
IS ~ ein schwarzer ritter ~

瑠偉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S ‹ e i n ‹ s c h w a r z e r ‹ r i t t e r ‹

【Nコード】

N 5 2 7 6 Q

【作者名】

瑠偉

【あらすじ】

この小説は一夏のハーレムを崩したくない、しかしラブコメが書きたい！という作者の欲望にまみれた作品です。
基本ヒロインは年上組という仕様になっております。

処女作ですが読んでくれるとありがたいです。

プロローグ（前書き）

初めまして、瑠偉です。

できれば楽しんで読んで下さい
感想もくれると喜びます。

プロローグ

ここはとある研究室、床一面に何に使うか分からないようなパーツがひしめいていた。

そこには一人の女。スクリーンに流れる文字を読みながら一人つぶやいている。

「今日は何処の国にイタズラしようかな」
ハッキング
「やめろアホ」

後ろから近づいた男が女の頭に拳を落とす。

ゴン！

「痛い！この天才美少女束さんのあたまをぐーで殴ったのは誰かな？！運くんだな？！久しぶり！」

「おう、久しぶり。つーか誰かわかってるんじゃないかねーか。それと美少女って言う年じゃないだろ」

「失礼だなあ、私はいつまでたっても十代のままさ！」

「精神年齢がだろ。…っと、こんな漫才するためにここに来たんじゃないかった。……束、一夏がIS学園の入試でISを動かしたっていうのは本当か？」

束は少し驚いたような顔をして言った。

「おやおや、ずいぶん情報が早いねえ。まだニュースとかにもなっていないでしょ？」

「ああ、たまたま試験官を友人がやってたんでね。そいつに教えてもらった」

「むー…IS学園の教師って言ったら女だよな…」

束がなにかをつぶやいてうまく聞こえなかったので「ん？なんか言ったか？」と聞き返すとなぜか少し不機嫌そうに言った。

「何でもない」

「何でもないならいいんだが…。まあ本題に移ろう、預けてた俺のISを返してくれ」

いままで不機嫌そうだった束が真面目な顔になった。

「いいの？もうISには乗らないんじゃないの？」

「ああ、もう一生乗ってたまるか、そう思ってたよ。でもな、一夏がISに乘れる唯一の男、そうなるというんな所があいつを狙うだろう。ファントム・タスク亡国企業とかな、一夏だけじゃあいつらは厄介だ」

「それで守ってやる、ということ？」

厳しい顔をした束がこっちを真っ直ぐ見つめてくる。

「それはひどい思い違いだよ、蓮くん。いっくんも戦えるんだよ？守ってやる、なんてのはいっくん嫌がると思うな。」

「分かってる、これは俺の罪滅ぼしみたいなもんだ。それでも、いや、だからこそ大切な人達を今度こそ守りたいと思っただんだ………
…あー、何言いたいかわかんなくなってきた。もうこの話は終わらだ！」

普段どうりの弛んだ顔にもどった束がクスツと笑って言った。

「うん、蓮くんはいつまでたっても変わらないねえ。私のことも守ってくれるのかな？」

「あ？守ってやるに決まってるだろ、おまえも俺の大切な人なんだから。」

「うえ！？あ、う……………」

なぜか顔を赤くして言葉に詰まったあと、うつむいた。顔が真っ赤だ。

「どうした？ 束？ 大丈夫か？」

「っ！ もう！ ISはそのトランク持って行ったらいいから！ 何もいじってないから自分でセッティングしてね！」

顔をのぞき込むといつもの束らしくなく、慌てて俺を研究室から追い出した。

「・・・・・・・・・・というわけだ、十蔵のオッサン、俺をIS学園の教師にしてくれないか？」

「はっはっはっは、東雲くん。きみはいつも面白いことを考え付くね。うむ、楯無くんだけに任せるのもなんだしな。東雲^{しのめ} 蓮浄^{れんじょう}くん、その案、謹んでお受けしよう。」

「そんなあっさり……いいのか？」

「はっはっはっはっは！ なぁに、IS学園にも新しい風を吹き込ま

せただけさ。『黒騎士』くん？」

「っ！何でそのことを？」

「わたしもただ年を取っているわけではないよ。おっと、もう時間だ。それでは学園で会おう！」

颯爽と去っていくおっさんを見ながらつぶやく。

「・・・・・・・・・・敵にはまわしたくないタイプの人だな……」

この次の日、世界は衝撃を受けた。

『ISを操縦できる男が一度に二人見つかった』と言うニュースによって。

プロローグ（後書き）

いろいろと無理矢理ですねえ．．．．．
次から原作に入ります。

感想、お待ちしております。

第1話 職場の同僚は全員女（前書き）

いやゝ一話を投稿してから一日しかたっていないのにお気に入り登録してくれた方！

ありがとうございます！

もう感想までくれた人が居ます！

励みになりますので感想、よろしくお願いします！

第1話 職場の同僚は全員女

「全員揃っているようですね。それでは定例職員会議をはじめます。えーそれでは本日の――」

前で話しているのは教頭先生だ。名前は知らんが。

今日は俺がIS学園の教師になって一日目、つまり始業式の日だ。俺と一夏がISを使用することが出来る、というニュースが流れた後、それはもう大変だった。ありとあらゆる検査、検査、検査。もう血は採らないで。

しかも初の男性IS操縦者と言うだけあって貴重なサンプルだ！と言わんばかりにあらゆる研究所が群がってきた。おそらく束が圧力を掛けたのだろう、政府からの勧告で蜘蛛の子を散らすように勧誘は収まった。俺は希望どおりIS学園で働くことになった、というか事態が落ち着くまで二人ともどこも手を出せないところに入れとけ！と言う感じなんだろうな。

「……先生、東雲先生！」

「っ！は、はい」

いかんいかん、考え事をしていると周りが見えなくなるのが俺の悪いクセだな。

「話はちゃんと聞くようにお願いします。それでは先ほど紹介した東雲先生です。……どうぞ」

「東雲 蓮浄です。ISの基本動作、座学を担当させて頂くことになりました」

他の教師が「え？それだけ？」という目で見てくる。どうしろと言

うんだ。ああ、周りの視線が痛い。何故かというそれは他の教師が全員女だからである。………その中でも一人、こっちに視線という名のビームを撃ってくるヤツが居る。その名も織斑おりむらちいぬ千冬、2年ぶりに再会したのであるう、俺の幼馴染みである。

「えーっと…初めて教職に就いたので至らない点もあるでしょうが、よろしく願います」

何とか言葉をひねり出してその場を逃れる、千冬の視線がさらに鋭くなった。だから俺にどうしろというのだ。

「それでは東雲先生は1年1組の副担任をやってもらうことになります。あの組には山田先生が副担任としていますが、まあ特例と言うことで。織斑先生、副担任が二人と言うことで大変かもしれませんがよろしく願います」

「わかりました」

千冬が返事をして職員会議は終了となった。

「…よう、千冬。久しぶりだな」

「ああ、二年ぶりか？一体何処をほっつき歩いていたんだ？」

「ちよつと世界中を転々としてた」

「そうか」

「……………」

「……………」

「……話が続きん！あの後予鈴がなつて真耶が（一夏がISを動かせるということを教えてくれた友達だ）SHRをするために先に行つてからずつとこの調子だ。その沈黙を引きずつたま、1年1組の教室に着いた。」

「蓮浄先生、しばらくしたら呼ぶのでここで待つてくれるか」
「はい、わかりました」

そう言つて千冬は教室へと入つて行つた。しばらくするとパァン！と何かを叩くような音とそれに続いて男の「げえっ、関羽！？」という声が聞こえパァン！……また何かを叩くような音がした。まあ何となく想像は付くが。

しばらくすると教室から黄色い声援が飛び出した。その声援がしばらく続いたかと思うとまたパァン！と何かを叩く音が。……一夏の頭は大丈夫なんだろうか。

ガラリ、と教室のドアを開けて千冬が少し疲れたようなかおで俺を教室へと招き入れた。

「蓮浄先生、自己紹介を」

「えーと、ニユース等を見て知つてる人もいるかもしれないが、東雲 蓮浄だ。これから一年間、皆にISの基本知識を教えたいと思う。よろしく」

「きやあああああああああああ！」

黄色い声援が俺の鼓膜をおそつた。

「すごい、すごいよ！ウチのクラスにISを使える男が二人も！」

「結構かつこいいよ！」

「ついでる！お母さん、産んでくれてありがとう！」

この黄色い声を断ち切るかのように一夏が声を上げた。

「蓮兄!？」

ガタツ！（一夏がイスから立ち上がる音）

パン！（千冬が一夏の頭を叩いた音）

ドサツ（一夏が頭を押さえて倒れた音）

「お前はSHRの時ぐらい静かに出来んのか」

「いや、千冬姉!だって、」

パン！

「織斑先生と呼べ」

「・・・・・・はい、織斑先生」

おいおい、いいのか？そんなやりとりしていると姉弟だってバレるぞ？そんなことを思っていたが遅かったようだ。

「え・・・・・・？織斑君って、あの千冬様の弟・・・・・・？」

「それじゃあ、男なのにISが使えるっていうのも、それが関係して・・・・・・」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

・・・・・・最後のは何だったんだろう。まったく、女というヤツは分からない。そういやこの教室、よく見ると箒も居るじゃないか。そうか、箒もIS学園に入っただのか。

「しつもん!」

考え事をしていると一人の女子が手を挙げていた。

「さつき織斑君が東雲せんせーのことを『蓮兄』って呼んでたけど
どっという関係なんですかー！」

千冬に「どうする？」とアイコンタクトを送ると「答えてやれ」と
帰ってきた。

「えーとな。一夏とは家が近くて幼馴染みだったんだ。」

すると質問タイムになった、と勘違いしたらしい女子が質問攻めを
してきた。

「もしかして千冬様とも幼馴染みなんですか？」

「おう、小学校から高校まで一緒だったな」

「先生は何歳ですか？」

「24歳だ」

「彼女は居ますか？！」

「残念ながら居ないよ」

「好きなものは？」

「タバコと酒」

「誕生日は？」

「7月23日」

「納豆は好きですか？！」

「普通だ」

めんどろだったので一気に答える。というか最後の質問何なんだ。
質問に答えているとチャイムがなった。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を
半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体にし

みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

そう千冬が締めくくってさわがしいSHRはおわった。

職員室へ向かう廊下で千冬に話しかける。

「全然変わってないなあ、千冬は」

「そうか？自分ではずいぶん変わったつもりだが」

「いや、表面は変わっても根っこの部分は一つも変わってないと思うぞ、俺は。……あー、変わった所が一つだけあるわ」

すると足を止めて「何が変わった？」と聞いてきた。

「いや、髪、伸ばしただろ？確か2年前はそんなに長くなかったかな」

「ああ、よく、覚えているな」

「幼馴染みなんだから覚えてるのは当たり前だろう？……」

あー、それと髪を伸ばしてるほうが綺麗だと思うぞ」

「っ！そ、そうか…綺麗か……ふふっ」

俺が褒めたのが嬉しかったのだろうか、顔をほころばせて歩き出した。

第1話 職場の同僚は全員女（後書き）

グダグダですねえ…

ああ、文才が欲しい……………

誤字、脱字等ありましたら指摘をよろしくお願いします！

第2話 クラス代表は誰の手に！？（前書き）

いつのまにかPVが5000を突破していました。

・・・・・怖いよ。瑠偉は過度な期待を受けると爆発します。

第2話 クラス代表は誰の手に!?

「——であるからしてISは宇宙での活動用マルチフォーム・スーツから兵器に、兵器からスポーツ用パワードスーツに落ち着いたわけですね」

一時間目、ISの基礎理論授業。真耶が座学を、俺は結局実習を担当することになった。授業の方式は副担任である真耶が授業を進め、千冬がそれをサポートするというやり方だ。……俺?俺は教室の後ろでパイプイスに座って授業の進め方などをメモしている。メモを取っているうちに一時間目は終わった。

教室を出てから真耶に話しかける。

「おい、真耶」

「あ、蓮浄さん、どうしたんですか？」

「いやー、入試の時に一夏のこと教えてくれたよな。そのことで礼しとかねーと」

「いえいえ、大したことじゃないですよ。……実は極秘扱いになってたのに後で気が付いたんですけどね……」

それって駄目なんじゃ……と思っていると、顔に出ているらしく

「だ、大丈夫ですよ!もう世界中に知れ渡ってるんですから!」

「大丈夫なのかそれ……。まあ、今度埋め合わせに飯でも奢るから」

「わ、期待してもいいんですかね？」

「おう、旨い店に連れて行ってやるよ」

「これってデートとかになるのかな……」

「ん？すまん、もう一回言ってくれるか？」

「……や！何でもないですよ！」

真耶はえへへ、と笑って誤魔化した。

そして二時間目、またISの基本理論授業だ。

真耶が前で話して居るんだがどうも一夏の様子がおかしい。机の上に積み上げた教科書をぱらぱらとめくっては冷や汗を流している。そして隣の女子を注視し始めた。なにをやってるんだあいつは。

「織斑くん、何か分からないところがありますか？」

様子がおかしいことに気が付いた真耶が一夏に声を掛けた。

「あ、えっと……」

「分からないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

えっへん、と胸を張る真耶。ああ、生徒にいいところが見せられる、とか思ってるんだろうな。すると一夏が意を決したように、

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

予想外だった、弱さを吐露されてもこれは受け止めることが出来ないだろう。案の定真耶は困ってるよ。

「え、えつと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらい居ますか？」

真耶が拳手を促す。

シーン…誰も手を挙げない。

そりゃそうだよな、IS学園は倍率一万を超える学校、そう簡単に入れるわけではない。

「……………織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の横で控えていた千冬が訪ねた。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パン！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

また出席簿で頭を叩かれた。

「後で再発行してやるから一週間以内に覚えろ、いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

まるで鬼軍曹のような容赦の無い視線と言葉を浴びせる。もうやめて！一夏のライフは0よ！

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。そうだった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そう

しないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ」

うむ、正論だ。しかし一夏は腑に落ちない顔をしていた。

「……………貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな？」

なんでバレたんだって顔をしている。本当に考えていることが顔に出るな、一夏は。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなければならぬ。それすら放棄するなら、まずは人であることを辞めるんだな」
「……………」

その言葉を受けて、一夏は覚悟を決めたような顔をした。

「お、織斑くん、わからないところは放課後教えてあげますから、がんばって？ね？ねっ？」

「はい。それじゃあ、また放課後によりしくお願いします」

そう言って、一夏は席に着いた。真耶も元の場所に帰ろうとして……………こけた。

「うー、いたた……………」

……………一夏が少し心配になってきた。

三時間目、一、二時間目とは違って千冬が教壇に立っていた、装備の特性等の説明を行おうとしたところで、ふと思い出したように言った。

「ああ、その前に再来週おこなわれるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス代表？その疑問を察したかのように説明が入る。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。まあ、たぶん推薦されるのは――

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

一夏なんだろうな。

「私もそれがいいと思いますー」

「お、俺!？」

一夏が立ち上がる。そしてそこに集中する女子の視線。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやらな――」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも――」

理不尽な千冬の言葉に反論しようとした一夏の声を、突然甲高い声が遮った。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

机を叩いて立ち上がったのは、えーと……。セシリア・オルコットか。

「そのような選出は認められません！だいたい、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年味わえとおっしゃるのですか！？」

おおう、女尊男卑が当たり前！と思ってるタイプの女子だな。こういうタイプはめんどくさいんだよね。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までES技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

はっはっは、いつの間にか一夏が猿になってるな。それにイギリスも島国だろうに。しかし、オルコットはまだ言葉をはき出す。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

お、一夏が少しイライラし始めてるぞ。もう少して一夏がなにかを言い返すかもしれない。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

「おい、お前。ちょっと言い過ぎだ。黙れ」

一夏が軽く睨みながら言い返す。少しひるみながらオルコットが言い返す。

「い、言ってくれますわね……！」

「おう、さすがに今まで言われたことはイラッと来たからな」

「……決闘ですわ！そこで決着をつけましょう！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い

――いえ、奴隷にしますわよ」

「寝言は寝て言え。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

真正面からにらみ合う二人、教室が殺伐とした空気で包まれる。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

ぱんつと手を打って千冬が話を締めた。

ずいぶん面白そうな事になってきた――

———とか一夏は相手になるのだろうか、オルコッ
トはたしか専用機持ちだったはず…

第2話 クラス代表は誰の手に！？（後書き）

こちら辺はほとんど原作のまんまですねえ…
ちなみにウチの一夏は少し血の気が多いです。

第3話 俺たちの部屋は何処ですか？（前書き）

悪ふざけが過ぎました。

先に謝っておこうと思います。

ほんつとにすいませんでしたあ！でも後悔はしていいん（ry

第3話 俺たちの部屋は何処ですか？

「うつ……。い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ……？」

放課後、俺は教室の机の上でぐったりしている一夏を見つけた。

「お、いたいた。女子が集まってから居ると思ったぜ」

「蓮兄？どうしたのさ」

「アホ、学校では東雲先生と呼べ。……まあいい、寮の部屋が決まったんだとさ」

そう、このIS学園は全寮制なのだ。生徒は全員寮で生活することが義務付けられている。こいつは将来有望なIS操縦者たちを保護するという目的もあるらしい。

「俺の部屋、決まっていんじゃないじゃなかったですか？前に聞いた話じゃ、一週間は自宅から通学してもらうつていう話でしたけど」

「そうだったんだけどなあ…事情が事情だろ？一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしい。………というか政府特命が出てとにかく寮に入れることを最優先にしたらしい。俺まで寮で暮らせて言われたからな。……まあ、一ヶ月もすりゃ個室の方が用意できるから、しばらくは相部屋で我慢してくれ」

「え？じゃあ東雲先生といっしょの部屋になったんですか？」

「残念ながら相部屋じゃあないぞ、生徒と先生が相部屋って言うのにも問題があるだろ？」

「そうですね…。部屋のことはわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いや、荷物は――」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

いきなり千冬の声。一夏が顔を引きつらせる。おそらく今一夏の頭の中ではダースベイダーの曲が流れているに違いない。それかターミネーターの曲だな。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

「すげえ大雑把だな。少しぐらい娯楽品とかも持ってきてやったらいいのに」

「必要ないからな」

その言葉に俺と一夏は顔を引きつらせた。人間には日々の潤いも大事だと思っただ、千冬さん。

「……じゃ、じゃあ、時間を見て部屋に行けよ。夕食は6時から7時、寮の一年生用食堂で取ってくれ。ちなみに各部屋にはシャワーがあつて、大浴場もあるらしいが俺たち男は今のところ使えないな」

「え、なんでですか？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

一夏が残念そうな顔をしている。そっぴや一夏は風呂が好きだったなあ。

「まあ、伝達事項はこれだけだ。俺たちは会議があるから、これでお前は先に部屋に行つて荷物の確認でもしとけ。………あー、そつだ。一夏、気をつけろよ」

よくわからない、といった顔で一夏がこつちを見てくる。一夏ならきっとラッキースケベなイベントを起こすはずだ。

「蓮、寮の部屋のことでは話があるんだが」

「ああ。何だ？」

会議が終わった後、千冬が話しかけてきた。

「その、蓮浄先生は一年生寮の寮長の部屋に住んでもらうことになった」

「お、そうか。で、相部屋になる先生は？」

そこでなぜか顔を赤くして俯いてしまった。

「……………だ」

「え？もついちど言ってくれるか？」

「……っ！私と相部屋だ！」

「……………え？」

しゅる、ぱさつ。衣擦れの音と何かを置くような音がかすかに聞こ

える。がちゃ、きい、ばたん、ドアを開けて閉じる音。ザー、とシャワーから流れ出た水の音。

今、千冬がシャワーを浴びています。

「……………落ち着かねえ」

ぼつり、とこぼした言葉は風呂場から聞こえてくるシャワーの音にかき消された。どうしてこんな居心地が悪いのか、それは数分前――

「……………へえ。寮長の部屋って結構広いんだな」

「……………ああ、元々二人用の部屋だからな」

「……………」

「……………」

ああああああ！気まずい！なんでこんな気まずい思いをせにやなんのだ！幼馴染みだよ？！一緒に風呂に入ったこともあるんだよ？！

「蓮」

「お、おう。なんだ？」

「先に、シャワーを浴びていいか？」

「お、おう。俺は千冬の後でいいぞ」

……………その軽い返事の結果がこれだよ！千冬の後に入る、って言うちゃったから迂闊に外に出られないしな！

どうしよう、と悶えていたとき、荷物に紛れていた黒いトランクケースを見つけた。

「あ、そうだ。軽くISのセッティングしとこう。今何もしないでいるよかマシだ」

トランクを引き寄せ、開く。バシュウ、という圧縮空気の音とともに待機状態のISが姿を現す――

トランクの中に入っていたのは、細いフレームの、眼鏡だった。

その眼鏡をかけると視覚野にセンサーが接続され、機体のパラメーターが直接意識に投影される。その中からメニューを開き、簡易フッティングを実行する。

――簡易フッティング、開始します。確認ボタンを押してください。――

目の前にウィンドウが表れ、真ん中にあるそれを押した。それからしばらく経つと、

――簡易フッティング、完了しました。次回展開時には本格的なフッティングを実行してください。――

「ふう……」

「蓮、上がったぞ。次はお前が入れ」

千冬が出て来た。振り向くと確かに風呂上がり、上はタンクトップに下はショートパンツ。うっすらと桃色に染まったうなじが実に扇情的だ、思わず見とれてしまっぐらいに。

「蓮？どうかしたか？」

「っ！あーいや、何でもない」

「？、そうか。ん？その眼鏡、『黒騎士』か？」

「…ああ」

そう答えたところで千冬の髪が濡れていることに気付いた。

「…千冬、髪、拭いてやるよ」

ちよいちよいと手招きをする。

「…子供じゃ無いんだぞ」

「いいじゃないか、泊まった時とかは全部俺がやってただろ。今更
遠慮するなよ」

「……わかった」

ゴォー。部屋にドライヤーの稼働する音だけが響く。

「……よし。終わったぞ」

「ああ、ありがとう」

千冬の頭をぼん、と叩いて立ち上がる。さてと、シャワーを浴びに
いきますか。

がちやり、という浴室のドアが閉まる音が聞こえた。ふう、とため息をつく。ため息の原因はやはり――
東雲しのめ 蓮浄れんじょう。二年ぶりに再会した幼馴染み。

（まったく変わっていなかったな。いや、変わられても困るのだが……）

この私、織斑 千冬は、東雲 蓮浄のことが好きだ。
少しつり気味の鷹のように鋭い瞳、低めの声。挙げるならいくらでも挙げられる、好きなところ。

（私はどうしてあいつを好きになったのだろうか……。他の女にも優しくて、いつもへらへらと笑っているやつを）

いつの間にか好きになっていた。今日だって廊下で髪のことを褒められたとき、嬉しすぎてどうにかなりそうだった。
ベッドにぼすつ、と倒れ込む。

ふと、香ってきた匂いはシーツの香りではなく、彼の匂い。思わず彼の匂いを確かめるようにシーツを口元へ。

（ん……。蓮の、匂い……）

――ふと、自分はとても恥ずかしいことをしているのではないか、そう思った。

「うわあああっ！何をしているんだ私はあああっ！？」

「千冬ー？大丈夫かー？」

思わず出してしまった大声が聞こえたのだろう、浴室から声がかかる。

「あ、ああ。大丈夫だ」

なんとか、そう返す。内心はそれどころじゃ無かったのだが。

織斑 千冬、24歳。 まだまだ恋する乙女である。

第3話 俺たちの部屋は何処ですか？（後書き）

やめて！石を投げないで！
キヤラ崩壊とか言わないで！

第4話 一夏の覚悟（前書き）

また蓮 浄が空気です。

ここはほとんど原作進行ですね。

第4話 一夏の覚悟

——だめだ、なんともなりそうにない。

ISの基礎理論授業が終わったとき、俺、織斑一夏は早くもグロッキーだった。

何とかなるだろ、と軽く考えていた自分が恨めしい。

単語は予習のおかげである程度わかるが、根本的に理解不能な箇所がある。

何度やっても解けない数学問題みたいだ。そう、式を知らないと解けないタイプの。

「……………」

しかし、こうなってくるとなおさら不思議だ。初めてISに触れたときのあの懐かしい感じ。まるで何年も前から知っていたかのようなそんな感覚。

けれど、こうして教科書を読むと、本当に俺がISを動かしたのかと疑いたくなるくらいに理解できない。前で山田先生が授業を進めているが、自分の知識が授業に追いつかない。

（うーん…………）

どうしたものか、と俺は腕を組んで天井を見上げる。その瞬間視界に黒い影が。

パン！

「授業はきちんと聞け、馬鹿者」

「……………すいませんでした」

キンコーンカーンコーン。
チャイムが鳴る。

「それじゃあ、次の時間では空中におけるIS基本制動をやりますからね」

「次の授業はまじめに聞けよ？一夏」

そう言つて、山田先生と蓮兄、千冬姉が教室を出て行つた。すると周りに群がる女子。クラスの半数近くは俺の席に詰めかけたんじゃないだろうか。

「ねえねえ、織斑くんさあ！」

「はいはい、質問しつもん！」

「今日のお昼ヒマ？放課後ヒマ？夜ヒマ？」

今『もう出遅れるわけにはいかないわ！』とか聞こえてきたぞ。

「いや、一度に訊かれても——」

困るんだが。と続けようとして、なにやら整理券を配っている女子を見つける。しかも有料。商売をするな、商売を。

（しかし参った。筈にISのことを教えてもらおうと思つたんだが……こりゃ夜に訊くしかないな）

そう思っている間にも女子の早く質問に答えて視線が非常につらい。どれから答えたらいいのやら。

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの!？」

「え。案外だらしな――」

パン!

「休み時間は終わりだ。散れ」

おお、いつの間にか千冬姉が背後に。しかしこのタイミングでの叩きは個人情報をばらそうとしたからですよね。そうに違いない。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するようだ」

「????」

俺がちんぷんかんぷんでいると、教室がざわめいた。

「せ、専用機!?!一年の、しかもこの時期に!?!」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「ああ。いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

どういうことだろうか。何がそんなにうらやましいのか。

全く意味がわからないという顔をしていると、見るに堪えかねたという感じで千冬姉がため息混じりにつぶやく。

「教科書6ページ。音読しろ」

「え、えーと……」『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS468機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が制作したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第7項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』……」

「つまりそういうことだ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか」

「な、なんとなく……」

えーと、整理しよう。

1・ISは世界に468機しか存在しない。

2・コアは篠ノ之博士以外作れない。博士はコアをもつていない。

3・俺が特別待遇。ただし実験体。

……ん？それじゃあ蓮兄はどうなるんだ？

「あの、それじゃあ東雲先生にも専用機が用意されるんですか？」

「いや、俺はもう篠ノ之博士から直接ISを貰ってきている」

「え？今博士は行方不明じゃ無かったんですか？」

「そこら辺はちょっとした機密事項に引つかかるんだ、勘弁してくれ。ただ、俺は何処の国にも何処の組織にも所属していない。ま、

いわゆる特例だな」

蓮兄は苦笑して言う。……それって結構すごいことなんじゃないの
だろうか、そう考えていると、

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者な
んでしょうか……………」

女子の一人がおずおずと千冬姉に質問する。……………まあ、篠ノ之な
んて名字、そうそうないしいつかはバレるよな。

——篠ノ之 束。ISをたった一人で作成、完成させた稀
代の天才。千冬姉と蓮兄の同級生で、そして筈の実姉だ。俺もよく
世話になったが、何というか、『天才』だ。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

おい、教師。個人情報バラしているのか。自分の個人情報バレる
のは嫌なくせに。

「ええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が二人もい
る！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？今度ISの操縦教えてよっ」

授業中だというのに、筈の元にわらわらと女子が集まる。おお、こ
れは端から見ているとなかなか面白い光景かもしれん。道理で誰も
助けてくれないわけだ。

「え、あの、私は……………」

スパパパーンッ！

「授業中だ、席に着け」

千冬姉の出席簿の一閃で蜘蛛の子を散らすように席に着く女子達、
箒の方を見ると何故か気まずそうにしている。何かあったのだろうか、
後で訊いてみよう。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」
「あ、はいっ！」

山田先生が号令をして、授業が始まった。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

はあ、そうですかセシリアさん。
昼休み、早速俺の席にやってきたセシリアは、腰に手を当ててそう
言った。どうでもいいけど、お前好きだねそのポーズ。どうでもいいけど。

「まあ？一応勝負はみえていますけど？さすがにフェアではありませんものね」

「？　なんで？」

「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「へー」

「……馬鹿にしていますの？」

「おう」

「……もう一度聞きますわ、馬鹿にしていますの？」

「おう、馬鹿にしてるぞ」

「……わかりました！あなたがそう言う態度なら、決闘で完膚無きまでに叩き潰してやりますわ！」

「おう、できるものならやってみる」

キツ、とこちらを睨んだ後、髪を手で払って綺麗に回れ右、そのまま立ち去っていった。

こっちを見ていた箒に話しかける。

「箒、飯食いに行こうぜ」

さつきからずっと気まずそうな顔をしているんだ、ここは幼馴染みとしては見逃せないだろう。

「……私は、いい」

「まあそう言うな。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おいっ。私は行かないと——う、腕を組むなっ！」

ははは、どうせ箒は拒否すると思っていたからな。対策は万全だ、こいつは大体こうやって行動で強引に動かせば正解だ。

「なんだよ、歩きたくないのか？おんぶしてやろうか？」
「なっ…………！」

ボツと顔を赤くする箒。うん、さすがにこうまで言われたらイヤでもついてくるだろう。

「は、離せっ！」

「学食についたらな」

「い、今離せ！ええいつ——」

「う、おっ！？」

箒の腕に絡ませていた腕を中心に投げられる。なんとか身体をひねって足から着地した。

「あつぶねー！いきなり人を投げんじゃねえよ！」

「ふ、ふん。離せと言っても離さないお前が悪い」

箒は「私は悪くないぞ」と言いたげに、腕を組んでそっぽを向いていた。

「はぁ…………。箒、飯食いに行くぞ」

がしっ。箒の手を強引に掴む。

「お、おいっ。いい加減に——」

「黙ってついてこい」

「む……………」

俺がにべもなくそう言つと、箒はされるがままについてきた。最初からこういえばよかった。まったく。

学食に到着。すげえ混んでるが、座って飯を食うぐらいは出来そう
だ。

「箸、何でもいいよな。何でも食うよなお前」

「ひ、人を犬猫のように言うな。私にも好みがある」

「ふーん。あ、日替わり二枚買ったからこれでいいよな。鯖の塩焼
き定食だつてよ」

「話を聞いているのか、お前は！」

「聞いてねえよ。俺がさつきからどんだけ穏和に接してやってると
思ってたんだ馬鹿」

「わ、私は別に……頼んだ覚えはない！」

「俺も頼まれた覚えがねえよ。あ、おばちゃん、日替わり二つで。
食券ここでいいんですよね？」

食券をカウンターに置く。さつきから左手で箸を掴んでるからすげ
え不便。

「いいか？頼まれたからって俺はこんなこと、普通はしないぞ？箸
だからしてるんだぞ」

「な、なんだそれは……」

「なんだもなにもあるか。おばさんたちには世話になったし、幼馴染
みで同門なんだ。これくらいのお節介はやらせる」

むすっとした顔で視線だけ天井に逃がす箸。こいつ、引越してか
らひねくれたなあ。

いや、前からそうか。目を離すとすぐ集団から浮くんだよな、箒
て。

「そ、その……ありが——」

「はい、日替わり二つお待ち」

「ありがとう、おばちゃん。おお、うまそうだ」

「うまそうじゃないよ、うまいんだよ」

そういつて恰幅のいい学食のおばちゃんはにかつと笑った。うん、
いいひとだ。

「箒、テーブルどっか空いてないか？」

「……………」

「箒？」

返事がないので見ると、さっきよりも益々不機嫌そうな顔をしてい
た。

「…………向こうが空いている」

俺の手を払って、自分の分の定食を手にしたと歩き出した。
……？　なんで怒ってるんだ？

とりあえず箒を追って三人がけのテーブルについた。

「よう、この席、いいか？」

「あ、東雲先生、どうぞ」

蓮兄が話しかけてきた。教師も学食が利用できるらしい、初めて知
った。

「そついやさあ、箒」

「……なんだ」

味噌汁に口を付けながらの返事。俺は焼き鯖の身をほぐしながら続ける。

「ISのこと教えてくれないか？このままじゃ来週の勝負で何も出来ずに負けそうだ」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

「それをなんとか、頼むっ」

箸を持ったまま、手を合わせて箒を拝む。

「……………」

しーん。無視された。流石にいたたまれなくなってきたのか、蓮兄が助け船を出してきた。

「一夏、よかつたら俺が基本的な戦術を教えてやろうか？」

「え、いいの!？」

「流石にあの言い方は俺も力チンと来たからな。まあ、俺独自の理論が混じってたりするからあまり期待はするなよ」

「それでも助かるよ」

「……………一夏、放課後に剣道場に来い。剣の腕が鈍ってないか見てやる」

「え? いいよ。蓮兄に教えて——」

「見てやる」

「……………わかったよ」

なんでこう、俺の周りの女って強情なのが多いんだろうか。蓮兄も

苦笑してるよ。

「どういうことだ」

「いや、どういうことだって言われても……」

放課後の剣道場、俺は箒に怒られていた。それもそのはず、手合わせを開始してから十分、俺が一本負けしたからだ。

「どうしてこんなに弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな？」

「ここまでくるとIS以前の問題だ!徹底的に鍛え直す!これから毎日、放課後三時間、私が稽古をつけてやる!」

「え、それはちよつと長いような」

「お前は勝負に勝ちたくないのか!？」

うわあ、すげえ怒ってる。これはもう何言っても聞いてくれないよ。ただでさえ負けてへこんでいる俺の心を、

「織斑くんてさあ」

「結構弱い？」

「ISほんとに動かせるのかなー」

ひそひそと話すギャラリーの落胆した声がさらに削り取っていく。

久々に味わう、底辺の気持ち。

こんな有様じゃあ、自分の憧れた人と同じ領域に進むなんてできない。

――よし、やろう。

俺は、こんなところで止まるわけにはいかないのだから。

第4話 一夏の覚悟（後書き）

そつえばいつの間にかPVが15000行っていました。
マジでびびりましたよ。

次回ついに決着が！

第5話 『白』の目覚め（前書き）

な……………総合PVが24000越えだ、と？

戦闘シーンを書くのに苦労しました。
今回は本当にgdgdです。

第5話 『白』の目覚め

そして翌週、月曜。セシリアとの対決の日。

「いいか、一夏。俺が教えたことはたったひとつ。一瞬たりとも考えることを止めるな。自分がどう動くか、相手がどう動くかを考える。思考し続け、問い続け、回答し続ける。いいな？」

「わかった」

あれから六日、筈は剣道の稽古、蓮兄はIS理論……は教えてくれず、先ほど会話でもあったとおり「思考を止めるな」それだけを教えてくれた。……結局、ISの動かし方が曖昧なまま当日を迎えたのである。まあ、そこは良いとしよう。いや、良くないか。しかし、一つ問題が解決していない。それは俺の専用機がまだ来ていないということだ。

「……蓮兄。俺のISはいつになったら来るのかな」

「……俺に聞くな」

「……」

「……」

俺と蓮兄、沈黙。

「織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

三度も呼ばなくていいです。第三アリーナ・Aピットに駆け足でやってきたのはおなじみ副担任の山田先生だ。
本気で転びそうで、見ているこっちがハラハラする。

「真耶、落ち着け。ほれ、深呼吸しろ」

「は、はいっ。すゝはゝ、すゝはゝ」

「……………落ち着いたか？」

「は、はいっ！……………ってこんなことやってる場合じゃないのですっ！織斑くん！来ました！織斑くんの専用機が！」

——え？

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番でものにしろ」

いつの間にか来ていた千冬姉が言う。

ごごんっ、という音がしてピット搬入口が開く。斜めにかみ合つたイプの防護壁は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こうを晒していく。

——そこには『白』が、いた。

白、真っ白。飾り気のない、無の色。まぶしいほどの純白を纏ったISが、その装甲を解放して搭乗者を待っていた。

「これが…」

「はい！織斑くんの専用IS『白式』です！」

真っ白のそれ。無機質なそれは、けれど俺を待っているように見えた。そう、こうなることをずっと前から待っていた。この時を、た

だこの時を。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフッティングは実戦でやれ。出来なければ負けるだけだ。わかったな」
急かされて、俺は純白のISに触れる。

「あれ……？」

試験の時に、初めてISに触れた時に感じたあの電撃のような感覚はない。ただ、馴染む。理解できる。これが何なのか。何のためにあるのか。
——わかる。

「背中を預けるように、ああそくだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」

千冬姉の言葉通り、装甲を開いているIS——白式に体を任せる。受け止めるような感覚がしてから、すぐに俺の体に合わせて装甲が閉じた。
かしゅっ、かしゅっ、という空気を抜く音が響く。そして、生まれた時から我が身だったかのようなあの一体感。融和するように、適合するように、最初から俺のためだけにあつらえたかのように、白式が『繋がる』。

解像度を一気に上げたようなクリアな感覚が視界を中心に広がって、全身に行き渡る。各種センサーが告げてくる値は、どれも普段から見ているように理解できる。

「あ」

——戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコ

ット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備あり――。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

いつもと同じ態度に見える千冬姉の、その微妙な声の震えまで知覚出来る。――ああ、心配してくれているんだな。

「大丈夫、千冬姉。いける」
「そうか」

ほつとしたような声。けれどそれは、ISのハイパーセンサーがなければおそらくわからないほどのブレだった。

（まあでも、俺のこと名前で呼んだし、やっぱりわかるかな？）

それとなく、箒の方に意識を向ける。目を向ける必要はない。なにせ、自分の周り360度全方位が『見えている』から。

「……………」

何か言いたげな、けれど言葉を迷っているような、そういう表情をしていた。これも、おそらく普段ならわからないレベルなんだろう。

「箒」

「な、なんだ？」

「勝ってくるよ、お前に特訓して貰った六日を無駄にはしない」
「う、うむ」

そのままピット・ゲートに進む。すると幕が

「一夏！」

「ん、なんだ？」

「が、がんばれ！」

「……おう！」

俺はその言葉に返事をして、ゲートから飛び出した。

「あら？逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。それにしても腰に手を当てたポーズが様になっているな。

「最後のチャンスをあげますわ」

「んなもんいらん」

「っ！普通は話を最後まで聞いてからそう言うのではなくって!？」

「どうせ今ここで謝るっていうなら、許さなくてもいい、とかだろ？」

凶星だったらしい。セシリアはふるふるとふるえている。

——警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。——

ハイパーセンサーがセシリアの情報を伝えてくる。確実に撃つてくることは解った。考える、どう避ける？

「はやく撃って来いよ。何時までたっても始まらない」

「…………その言葉……………」

——警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。——

「あの世で後悔しなさい！」

レーザーが放たれる瞬間、前へ加速する。レーザーが肩の装甲をかするが問題ない。

「な！？前に、突っ込んで……………」

「うおおおおっ！」

そのまま手に近接ブレードを展開、速度に乗せて突きこむ。

「きゃあっ！」

セシリアは、なんとか回避しようとするが脇腹にかすったようだ。

「くっ！かすっただけか！」

「やってくれますわね！行きなさい！『ブルー・ティアーズ』！」

ブルー・ティアーズから四機のビットのようなものが射出された。このビットらしきものの名前もブルー・ティアーズと言っらしい。ややこしいな。

すると、射出されたビットが四方からレーザーを撃ってくる。

「くそ！オールレンジ攻撃かよ！厄介な！」

レーザーの一発一発の威力は少ないのだが、じりじり削られていく

のはなかなか辛い。

考える、どうやってビットを破壊する？相打ち覚悟で行くか？……いや、リスクが高すぎる。

その時、ある一つの考えが頭に浮かぶ。

「……………やってみるか！」

ビットから逃げるように加速、ビットは射撃しながら追いかけてくる。ビットを引き連れたまま、アリーナの遮断シールドに向かってさらに加速する、

「遮断シールドに突っ込むつもり?!」

ぶつかる直前、レーザー攻撃はもちろん、物理攻撃も通さない遮断シールドを蹴り、サマーソルトの要領で後方宙返りをしてビットの後ろに回り込んだ。そのまま、斬る！

ビットを一度に二機撃墜する。まっぴたつになったビットが爆発するのにも構わず、ビット3に追いつき後部推進器を破壊して落とす。

「なっ！ブルー・ティアーズが!?!」

ビットが次々と撃墜されて動揺している今がチャンスだ！

苦し紛れのように一機しか残っていないビットで射撃をしてくる、それを避けセシリアに向かって加速する。

「おおいにく様！ブルー・ティアーズは六機ありましてよ！」

セシリアに向かって突撃していた俺にセシリアの腰部からスカート状に広がったアーマーの突起が外れ、飛んできた。

——まずい！『弾道型』だ！

回避もかなわず、赤を超えて白い、その爆発に俺は包まれた。

「やりましたわ……！」

倒した、そう思った時だった。まだ晴れない黒煙を突き抜けるようにして、純白の機体が飛び出してきた。

こっちを真っ直ぐ見つめて突っ込んでくる一夏と、目が合う。

——まずい、そう思った時にはもう遅かった。

「ぜらあああああっ！」

体に走る衝撃。

『試合終了。勝者——織斑 一夏』

「で、俺はどうして勝てたんだろう」

パンツ！

「自分の機体の武器の特性ぐらい把握しておけ、馬鹿者」

試合終了後、一夏はふざけた質問をして千冬に叩かれていた。
ファースト・シフト
それにしてもあのタイミングで一次移行するとは……。

それにしても気になったのは白式が一次移行した瞬間、俺のISが
確かに共鳴した。

まるで何かの復活に歓喜するように――

第5話 『白』の目覚め（後書き）

最近、文章を書くのが非常に楽しくなってきました。
まあ、内容はアレですが……。

第6話 教師たちの休日（前書き）

今回は短めです。

今回も若干暴走気味ですがご了承ください。

第6話 教師たちの休日

一夏がセシリアに勝ち、クラス代表になった週の日曜日の朝。俺は床に正座させられていた。

「……………蓮」

「……………はい」

「見たか？」

「……………はい、見ました」

千冬は顔を赤くしてこっちを睨む。
なんでこんな状況になっているかって？この発端は二十分前に遡る。

————二十分前。

俺は窓から差し込む朝日で目を覚ました。

「ふぁ……………」

むくり、と体を起こす。

そして、窓の方を向くと千冬が居た。絶賛着替え中の千冬が。

————見えてしまった。

肌色の双丘が、その頂上にある桜色の突起も。なるほど、ブラをつける前だったんだな。……いやそんなこと考えてる場合じゃない。このままではやばい、そう思っていないながらも何故か体が動かない。この光景を網膜に焼き付けることしかできない。ブラをつけ終わった千冬が顔を上げる。

目が合った。そりゃあもうばっちり。冷や汗が体中から吹き出る。

「……………よ、よう。おはよう」

「……………う、うわあああああああ？！」

ゴッー！

ここでいったん俺の意識は途絶え、今に至るわけだ。

よし、状況を確認しよう。

俺起きる↓偶然千冬が着替えてた↓思わずガン見↓殴られて気絶↓
俺土下座

……………あれ？これって俺が悪い訳じゃないよね？そう思っていると、

「うううううう！」

千冬さんが今にも泣き出しそうな目でこっちを睨んでおります。

「……………蓮」

「……………はい」

「見たか？」

「……………はい。見ました」

そう答えると、千冬は顔を赤くしてこっちを睨む。

…………… こういう経験がない訳じゃないんだ、昔だって何故か千冬の部屋に行くとか着替えてたり、海に行ったら水着のトップだけ波に流されてたり。まあそういうことが起こるたびに土下座してきた。こいうのは自分の非を認め、土下座しながら「なんでもするから許してください」と言えばたいいてい許してもらえる。…………… よし！

「ごめんなさいマジでごめんなさい俺が悪かったです。何でもするから許してくださいお願いします」

額よ焦げると言わんばかりに床に擦りつける。

静寂。緊張で胃に穴があきそうです。

「……………何でもするか？」

「許してくれるならどんなことでも！」

「……………なら買物に付き合え、それで許してやる」

こうして、俺と千冬は街へ行くことになった。

ここはショッピングモール『レゾナンス』、駅舎と合体したこれは食事は和・洋・中を問わずに完備。衣服も量販店から海外の一流ブランドまで網羅している。その他にも各種レジャーはぬかりなく、子供からお年寄りまで幅広く対応可能、と言った施設だ。

「千冬、ところで何買いに来たんだ？」

「ああ、洋服を少しな」

「そっか。洋服売り場って何階だっけ？」

「確か…三階だな」

わかった、と言って千冬に手を差し出す。

「手、繋ごうぜ。今日は日曜日だから人が多いしな、はぐれないようにしねーと」

「……はあ。わかってやってないんだろうな、きっと」

なぜかため息をつきながら手を取った後、言う。

「ん？何のことだ？」

「何でもない、行くぞ」

そう言っただけを引張っていった。

三階の洋服売り場。

俺は試着する千冬を試着室の前で待っていた。それにしても女の買い物は長い。男なんて軽くサイズを合わせて終わりなのにな。

「……………どうだ？」

試着室から出て来た千冬が訪ねる。白のワンピースに、七分のデニムを合わせている。ワンピースの方には所々フリルが施されており、なかなか、いや、かなり可愛らしい。

「おお、似合ってるぞ。…俺、千冬にはかっちりしたスーツとかが似合うと思ってたけどこういうワンピースも可愛いな」
「む、そ、そうか。ではこれを買っていくでしょう」

なぜか、顔を赤くして購入を決める千冬。

「うん、やっぱり千冬には白が似合うよ」

「そうか？」

「ま、俺のイメージだけだけだな」

そう言いながら、精算を終えてレジを抜ける。

買い物物を済ませた後、休憩がてら遅めの昼食を取ることにした。
食後、コーヒーを飲んで一息ついていると、

「蓮、この前世界中を転々としていたと言っていたがどこに行っていたんだ？」

「んー？えっと、アメリカ、イギリス、中国、イタリア、ドイツ……他にもいろんな国に行ったなあ」

「本当に色々な所に行っているな……。それにしても、一夏たちが心配していたぞ。いきなり失踪するんだからな」

呆れたように、千冬は言う。確かに何の連絡もせずに出て行ったのだから当然か。

「そりゃ悪いことをしたな、そういや二年前はドイツで会ったんだっけ？あのときは驚いたぜ、ドイツ軍の教官になってるんだもんね」
「……あの時か。驚いたのはこっちの方だぞ、いきなり軍の敷地に侵入者が現れたと言う報告が来て捕まえてみればお前だったからな」

それは二年前、俺が世界を転々としていた時の話。

第6話 教師たちの休日（後書き）

次は過去話！

……おっぱいは素晴らしい！

第7話 むかしばなし〜ドイツ編〜（前書き）

皆さん、お久しぶりです。

いやあ…大変だった……一週間ネット環境のない僻地に閉じこめられてました。

それから帰ってきた後に体調を崩したのも原因ですけどね……遅れたのは。

更新も再開しますので一読して頂けると幸いです。

第7話 むかしばなし〜ドイツ編〜

「……………迷った」

ここはドイツ、いや、厳密に言つとドイツのどこかの森の中である。そしてドイツのどこかの森の中で迷っているのである。

俺はここ数年世界各国を転々としている。理由はまだ伏せておこう。

「おいおい……。こんな異国の森で遭難なんて洒落になんねーぞ……」

森は深く、まだ昼だというのに夜のように暗い。足下を注意しながら進むのが面倒くさい。

そろそろと足を動かしていると

ピンッ

何かが抜けた音がした。

……イヤな予感がする。目を凝らして足下を確認すると、細いワイヤーが機械から抜けていた。

「これって、侵入者とかを探知する……センサー、か？」

……………俺はどこに迷い込んだのでしょうか。

ビーツ、ビーツ

管制室にてアラームが鳴る。

「第三演習場ブロック15にてセンサーが何かを感知しました。どうしましょう」

「全く…これで何度目だ！、あのセンサーは動物が通っても反応するからな……。侵入者ではないと思うが一応確認をとれ」

「……はい。陸上部隊の方から二人ほど確認に向かわせます」

オペレーターとその上司が愚痴をこぼしながら言った。

ここは、ドイツ軍の基地である。

「面倒くさい……。どうせ動物だろうに。なんでいちいち確認をとらせるんですかね？」

「だな……。まったく、ブリュンヒルデが来てから俺たち陸上部隊は演習場をほとんど使ってないんだぜ？一番使っているあいつらがやりゃあいいのにな」

「まったくです…」

ドイツ軍陸上部隊所属のゴードン・バルハウス上等兵とボリス・セルギウス兵長は薄暗い森を歩きながらばやいていた。しばらくして目的地に到着するが、そこには抜けたワイヤーしかない。

「ゴードン、本部に連絡しろ」

返事はない。

「ゴードン、何をして――」

振り向くとそこには、東洋人の男に首を絞められオトされているゴードンの姿があった。その男と目が合う。

「……あつ、やべっ」

「貴様！何者だ！」

拳銃をホルスターから引き抜いた瞬間、男が動く。

流れるような歩法からの掌底、その一撃は寸分変わらず水月、いわゆる鳩尾に吸い込まれた。

ズンッ！

鳩尾に衝撃が走る、霞む視界。
そのままボリスは倒れた。

「ふう！あつぶねえ……。銃をいきなり突き付けてくるとは……」

着ている服も薄暗くてよく見えない、とりあえず近くの木に縛り付けて動けないようにしておく。

ゲリラやらテロリストにしては装備が整い過ぎている気がする。

「なんかイヤな予感がする……」

ぼつりとつぶやき、見上げた空は生い茂った枝に隠されていた。

管制室は軽いパニック状態になっていた。

「応答、ありません！」

「糞！二人の搜索と侵入者の捕獲に一個分隊をまわせ！」

「了解！」

数十分後、分隊長から連絡が入る。

『侵入者とおもわれる東洋人の男を発見しました。人数は一人、携行している銃器などは見当たりません。……な！うわあッあああああ！』

ガシヤッ！

耳を刺すノイズ、おそらく通信機を地面に落としたのだろう。

『な、なんだお前はあああああ！？ゴシヤ』

『ダンダンダン！じゅ、銃弾をよけただど！？……ぐあ！』

『ひいいい！やめゴキンギやあああああ！』

『う、うわよせなにをするやめアッー！』

『た、助け……ウボアー！』

スイッチが入りっぱなしになっていたのだろう通信機から聞こえてくる状況は、管制室が騒然とするには十分すぎた。

十二人の精鋭が、たった一人に打倒されているのだ、当然とも言える。

「……………一シュヴァルツェア・ハーゼ《黒ウサギ隊》を出勤させる。ISを使って捕獲するんだ！」

「ま、待ってください。ISも一機しか無いんですよ！もし侵入者

がスパイで情報が他国に漏洩すれば……！」

「五月蠅い！上官の命令には従え！」

怒りのあまりその司令官は無茶な命令を下した。その場に居る人たちからすれば何を言っているんだといった感じである。

それもそのはず、この国に配備されているIS、八機のうち一機がドイツ軍に配備されている。そんな貴重品を人一人捕まえるために動かそうというのだ、これが無茶以外の何で表現すればいいのか。それにシュヴァルツェア・ハーゼ、この部隊は些か特殊だ。この部隊はISの機動補佐用のナノマシンを眼に移植し、IS戦での最強の部隊を作る、というのをコンセプトに置いている。

———
もっとも、そのナノマシンはまだ二人にしか移植されていないのだが。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ少尉にクラリッサ・ハルフォーフ軍曹！貴殿らに侵入者の捕獲を命ずる、直ちに出勤せよ！」

「はっ！了解しました！」

「少尉はISの装備を命ずる！敵戦力は不明、油断はするな。軍曹はナノマシンの使用を許可する」

そうして、二人だけのドイツ軍最強の部隊は出勤した。

「……………あー。訳わからん、本当に何が起こってるんだ？」

蓮淨は、自分の置かれている状況が理解できぬまま、兵が死屍累々と転がった森でつぶやいていた。

第7話 むかしばなし〜ドイツ編〜（後書き）

お気に入り件数が200件超えてました。マジびびった。

第8話 むかしはなし〜ドイツ編〜その2（前書き）

いやぁ……………。文章の書き方忘れてるう……………。
最後強引すぎるよう……………。

第8話 むかしばなし〜ドイツ編〜その2

「……………ん？」

誰かに見られている、ような気がする。

顔を上げて周りを見回すがそこには木しかない。森だから当然なのだが。

「気のせいかな…？」

まあ、いいや。そうつぶやいてトラップを仕掛ける作業に戻った。

私の視線を感じたのか、男は周りを見回している。

眼にナノマシンなんかを入れている私が言えた義理ではないが、男は化け物じみている。ナノマシンを起動させた眼で約1km先からその男を見ている、それに気付いたのだ。普通はあり得ない。

少尉はISの準備で少し遅れるらしい。……あの無能な上官は一体何を考えてISの使用を許可したのだろうか。

――雑念を振り切って無線機に話しかける。

「こちらクラリッサ、これより標的への接触を図ります」
『了解』

そう言つて一步踏み出したその瞬間、足下の草に巧妙に隠されていたロープが跳ね上がり、クラリッサの左足を捕らえた。

「なあっ!？」

古典的なトラップだった。逆さまの状態でぶら下げられている。腹筋の要領で体を引き上げ、足を捕らえているロープを切る。

「まさか……」

着地した後、自分が進もうとしていた方向に木の枝を投げると、仕掛けられていたトラップが誤作動を起こす。

木の枝を投げた5メートルの間で発動したトラップは、五個。1メートル進むたびに一個。

「こんな……。地雷原みたいなものを進まなきゃならないの……?」

顔を引きつらせながらつぶやく。こんな任務、一人でやっていられるものではない。

しかも進んだ先には一個分隊を一人で全滅させた男。やってられるか。

「それでも、行くしかないのよね……」

ため息をついて、進み出した。

「きゃあああ!？」

早速引つ掛かっていた。

「いやー、こんなところで役に立つとは……。親父に感謝しなきゃ
いかな」

俺が立っている所から半径1kmはトラップを仕掛けまくって、一
種の結界のようなものになっていた。そう簡単には俺がいる場所ま
でたどり着けないだろう。

しかし、この結界には一つ欠点があった。それは自分も動けないと
いうことだ。調子に乗って仕掛けすぎた。

「ん？驚いた、あのトラップをくぐり抜けていたのか」

視線の先には、なぜかボロボロになった服を着ている女が居た。こ
つちを据わった眼でにらみながらぶつぶつ呟いている。なにあれこ
わい。

「貴様、貴様が……！侵入者は！」

女は、こっちへと真っ直ぐに突っ込んできた。右手にはごつついナ
イフ。

ヒュウン！

ナイフの切っ先が空気を裂く。上体を反らして難なく避ける。

「おいおい、いきなり刃物振り回すなよ」

「……………しっ！」

突き込まれてきたものは手の甲を使い刃の腹を殴って反らす。
切り払いはステップで避ける。

「ちっ！」

このままではがちが明かない、と見たらしい。こちらから距離を取ると女は何故か眼を閉じる、そして見開いた眼は左目だけが金色に染まっていた。

先ほどとは比べものにならない速度での踏み込み。先ほどより鋭い太刀筋。

「…………なるほど！ナノマシン移植者か！おおかた反射速度の上昇辺りか？」

「シュヴァルツエア・ハーゼを舐めるな！」

先ほどまで避け切れていたはずの斬撃が、届き始めた。視界に舞う紅は、自分が流した血。このまま手を出さずに終わるといふのは自分の矜持プライドが許さない。

「…………東雲流近接格闘術壱の型・柳水しゅうみづ」

体は半身に、足は肩幅の広さ、両手は力を抜いてそのまま。自分は只、後の先を取るのみ——！

女が突き込んできた刃を体の捻りだけで避ける、少しばかり腹の肉を裂くが問題はない。一撃を外し、動作に空白が生まれる。その空

白に合わせるように、鳩尾への掌底を放つ。

——女の拍子^{リズム}が崩れる。腕を取り、投げる。

「うあっ！」

倒れた女のマウントポジションを取り、動けないようにしてから話しかける。

「くそ……！」

「まったく！いきなり襲ってきて…、お前ら何者だ？」

「は……？」

何とか体勢を変えようとしていた動きを止め女はポカン、とした表情をする。

「ま、まで！ココがどこかわかるか！？」

「ドイツのどつかの森だろ？」

「ここはドイツ軍の敷地だ！」

「……え？」

「貴様ア！クラリツサを離せえ！」

ここがどこか、ということを脳味噌で把握するよりも先に、横から

突貫してきたISに撥ねられたことによって俺は意識を失った。

気がつくと俺はベッドで寝ていた。

「う、あ？」

「蓮、気が付いたか」

「なん、で。千冬が？」

目覚めた俺に話しかけてきたのは、ここにいるはずのない千冬だった。

「あの事件の件でな。仕方なくここで教官をしている」

「そうか……。そういえば、そうだったな。……なあ、俺はこれからどうなる？」

「……蓮浄。お前はドイツ軍の敷地に侵入、兵への攻撃その他諸々の罪で逮捕される……。はずだったんだがな」

「はず？」

逮捕、という言葉聞き、やっぱりそうなるよなあ……。と諦観しかけていた意識が引き戻される。

「どこかの天才がな、IS協会に働きかけてお前の解放を条件にドイツ軍へのISコアの提供をしたい、という通信を入れたらしい。ドイツ軍はそれを呑んだ」

頭のウサミミを揺らしながら、満面の笑みを浮かべてピースサインをしている人物が頭に浮かぶ。まったく、やってくれる。というかマジで助かった、今度お礼をしなければ。

「……それは分かったんだけどな、なんか入り口からこっちを見ているやつが居るんだけど」

入り口から頭だけを出してちらちらとこっちを見てくる人が一人。それを見た千冬がはあ、とため息をつく。

「……クラリッサ、入ってこい」
「ひゃいつ!？」

気付かれてないと思っていたのだろうか。
おずおずと入ってきたのは俺と戦いを繰り広げた女だった。

「…私は少し席を外しておくぞ」

そう言つて千冬は部屋を出て行った。

「……あの、怪我は、大丈夫ですか？」

おずおずと言葉を発する。

「……そんなことを言うただけにここへ来たのだろうか? そう思うと、笑みがこぼれずには居られなかった。」

「おう、大丈夫だ。クラリッサ、だっけ? そっちこそ怪我はないか?」

「は、はい! 私の方は大丈夫です」

何故かこっちの顔を見たまま惚けていた。何か付いてるのだろうか。

「そっか、そりゃ良かった」

女に怪我させて無くて良かった。

それから2日後、ドイツ軍を引っかき回していったあの人は、基地から出て行くことになった。

「クララ、こんな所まで送ってくれてありがとな」

「いえ、これが私の任務なので」

ここは基地の出入り口、彼を出口まで案内することが今の私の任務だった。

「じゃあな。色々世話になったよ、機会があればまた会おうぜ」

「……はい、機会があればまた」

そう言うとは彼は背を向けて歩き出した。

その背中が見えなくなった頃に、ふう、とため息を吐いた。

私は、彼、蓮淨のことが好きになってしまったらしい。

笑顔が素敵で、やさしくて、強い。この二日間で自覚してしまった、惚れてしまったと言っことに。

最後の言葉を思い出す。思わず笑みが溢れる。
また会おうぜ、か。楽しみだ。

第8話 むかしはなし〜ドイツ編〜その2（後書き）

この後クラリッサは千冬という強敵の存在に気づいたんでしょうねw

人物設定（前書き）

蓮浄「なんか俺の設定を書いたらしいな」

瑠偉「……ネタがな。尽きたのだよ」

蓮浄「早いなおい！？単なる時間稼ぎにしかならんだろ」

瑠偉「ですよー」

人物設定

・主人公

東雲 蓮淨 しのめ れんじょう

・プロフィール

現在 24 歳

誕生日 7 月 23 日

血液型 B 型

身長 178 cm

体重 64 kg

好きなもの

酒、タバコ（ただいま禁煙中）、友達

嫌いなもの

特になし

趣味

読書、料理

家族構成

父親と弟の三人家族、母親は7年前に事故で他界

・概要

いわゆるオリ主。チート主人公ではなく、そこそこ普通を逸脱している主人公。

性格は明るく快活、そしてマイペース。容姿は10人の女性に聞けば8人はかつこいいと答える。

何よりも特筆すべきはそのフラグ乱立能力、これは高校時代の友人に『一級フラグ建築士』と言われるほど。

しかし恐ろしいほどの鈍感さで「俺みたいなやつが好意なんて持たれるわけ無いよなー」などとぼざく、筆者が書いていて「蓮浄爆発しろ！」と呟くレベル。

家が『東雲流近接格闘術』という武術の道場をやっており、蓮浄自身もそれを修得してある。現在は父親の柳沙りゅうさが当主を務めている。実力は格闘戦であれば千冬を軽く凌ぐ。

・使用IS

黒騎士くろきし

人物設定（後書き）

これからも設定を付け足すことに加筆したいと思います。

第9話 セカンド幼馴染みの襲来（前書き）

また体調を崩して執筆が遅れました。

……… 装甲悪鬼村正やって書くヒマがなかったっていうこともあるんですが。

第9話 セカンド幼馴染みの襲来

「え？二組に転校生？」

朝。ショートホームルーム S H Rのために教室へと足を進める俺に真耶は話しかけてきた。

「はい、中国の代表候補生が来るそうです」

「この時期に？」

今は四月。この時期に転入というのも珍しい。ちなみにI S学園の転入試験は国の推薦が必要だ。

そして教室の前に着くと何故か教室の中が騒がしかった、中をのぞき込むとそこには懐かしい顔が居た。

「ありや？鈴じゃねーか」

ツインテールを揺らしながら振り向いたのは七年ぶりに再会した年下ファン・リンインの幼馴染み、凰 鈴音だった。

「げっ！？蓮浄！？」

「年上を呼び捨てとはお前も変わってないな！？」

この中国娘は昔から変わってない、一応年上の俺に対してタメ口、ファッキン・ガール暴言、暴力何でもありの活発少女だ。しかし千冬には敬語を使うという……。

「なんであんながここにいるのよ」

「ここで教師やってんだよ」

「……………うわっ、似合わないわねー」

「うるせえよ。……ああ、中国からの転入生ってお前のことか。なんでいきなりここに……って聞く必要も無いか」

にやにやと笑いながら言う。

おそらくこいつは一夏を追ってこの学園に来たのだろう。性格に似合わず一途なヤツだ。

「…死ね！」

考えていることが伝わったのだろうか、顔を赤くしながら拳を打ち込んでくる。

その拳を軽く避ける。

それを繰り返していると――

「おい」

「なによ!？」

バシンツ！聞き返した鈴に出席簿での強烈な一撃が入った。――

―― 我らが担任、織斑 千冬の登場である。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

何という謙虚な態度……！やっぱり俺と千冬では態度に天と地の差があるな。ていうか俺一応教師だから『先生』ってつけるよ。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！………それと蓮 浄今度殺す………!!」

最後に小声でもの凄く物騒なことをささやいたなおい。というか騒がしかったのはやっぱり一夏のせいかな。

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

隣の二組に向かって猛ダツシュ。結局先生とは一度も言わなかったな。

「「っていつかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った」」

セリフが一夏とハモる。その言葉を聞きつけたのか生徒が大騒ぎ。

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」
「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で——」

一夏はクラスメイトからの質問集中砲火。一夏！後ろ後ろー！

バシンバシンバシンバシンッ！

「席に着け、馬鹿共」

千冬の出席簿が火を噴いた。……俺と一夏のせいだな。多分。

（それにしても最近知り合いと再会することがやけに多いな。……うん、良いことの前触れってことだろう、そう言うことにしておこう）

そして、今日も一日が始まる。

「というわけだから、部屋代わって」

「ふ、ふざけるなっ！なぜ私がそのようなことをしなくてはならない！？」

ここは一夏と箒の部屋。時刻は8時過ぎ。クラス対抗戦の後に部屋を調整出来そうだ、ということを一夏達に伝えに行くとこの修羅場である。とつさに逃げようとすると一夏が「ここでひとりぼっちにしないで」という眼でこちらを見てくる。一体どうしろと言っのだから。箒と鈴は相性が悪い。いや、悪いんじゃない。――
最悪だ。

「いやあ、篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？気を遣うしのんびりできないし。その辺、あたしは平気だから代わってあげようかなって思ってたさ」

「べ、別にイヤとは言っていない……。それにだ！これは私と一夏の問題だ。部外者に首を突っ込んで欲しくはない！」

「大丈夫。あたしも幼馴染みだから」

「だから、それが何の理由になるというのだ！」

こんな感じで一向に話が進まない。というか、噛み合っていない。俺が「お前ら……。いい加減にしるよなあ……。……」と言つと「うるさい！蓮浄（兄さん）は黙ってて（ください）！！」「と言われて撃沈。もうやだこの子たち。

しかも鈴に至ってはもう自分の荷物を持ってきているという……。

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

「ふ、ふざけるなっ！出て行け！ここは私の部屋だ！」

「『一夏の部屋』でもあるでしょ？じゃあ問題ないじゃん」

そう言ったあと、同意を求めるように鈴は一夏を見る。

「俺に振らないでくれよ……。頼むから……」

一夏がこめかみを押さえながら言う。

「とにかく！部屋は代わらない！出て行くのはそちらだ！自分の部屋へ戻れ！」

「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

「む、無視するなっ！」

「はぁ……。そこまで！箒、少し落ち着け。鈴も、少しは他人のことを考えろ！」

流石に見かねて口を開く。微妙に気まずい空気が流れる。その空気を変えようとしたのか、一夏が口を開く。

「鈴、約束って言うのは」

「う、うん。覚えてる……。よね？」

「えーと、あれか？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――

――

「そ、そうっ。それ！」

なんと、プロポーズみたいな約束してるんだな。やるな、鈴。思っている、

「——奢ってくれるってやつか？」

「……………はい？」

「だから、鈴が料理できるようになったら、俺にメシをこちそうしてくれるって約束だろ？」

見事に落とされた。一夏、それはないと思っぜ。鈴がすげえ可哀想になってきた。

「いやしかし、俺は自分の記憶力に感心——」

パンツ！

「……………へ？」

一夏が鈴にほおをひっぱたかれた。何が何なのか分からない、といった顔をしている。

ゆっくりと顔の向きを戻す一夏を待っていたのは、肩を小刻みにふるわせ、瞳に浮かんだ涙をこぼさないように唇をきゅっと結んだ鈴の姿だった。

「あ、あの、だな、鈴……………」

「最つつつ底！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ね！」

一気に言い放つと、床に置いていたバッグをひったくるように持つて、ドアを蹴破らんばかりの勢いで出て行く。

バタンツ！という大きな音が響いた後、一夏は呟く。

「……………まずい。怒らせちゃった」

「なあ、一夏」

「な、何？蓮兄」

「今のはお前が完全に悪い」

「う……」

「一夏」

「お、おう、なんだ箒」

「馬に蹴られて死ね」

箒が続けてとどめを刺した。

——翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。

表題は『クラス対抗戦日程表^{リーグマッチ}』。

一夏の一回戦の相手は二組——鈴だった。

第9話 セカンド幼馴染みの襲来（後書き）

皆さん最近気温が上がったり下がったりと不安定なんで体調の管理には気をつけてくださいね。

じゃないと自分みたいになりますよw

第10話 襲撃、そして…（前書き）

お久しぶりです。

テストも無事（爆）終了しましたので、更新を再開したいと思います。
す。

……あれ？このせりふ、前も言ったようなきg（ry

第10話 襲撃、そして…

五月。

あのアホ

一夏が鈴の機嫌を損ねてから早くも数週間。

そのとばつちりは、俺に來ている。現在進行形で。

「なに避けてんのよ！当たれええっ！！」

「うおわあああああ！！？」

ここは第三アリーナ。

今、俺は鈴の訓練ハつ当たりに付き合っていた。いや、無理矢理付き合わされたの間違いか。

異形の青竜刀。それがISを部分展開しかしていない俺の体を掠めている。まあ、部分展開でも絶対防御は体全体に適用されるから少々当たっても平気なんだがな。

「おい！鈴さん！！いくらハンデって言っても、足と背中のスラスターの部分展開だけはきついんですけどー！！？」

「知るか！アンタはただ的になってりゃいいのよ！！」

「だああああ！？せめて武器ぐらいは展開させてくれー！！？」

ハつ当たり

訓練が終わり、ピットに戻る。

「あー、疲れたー。つか鈴、まだ一夏と仲直りしてねーの？」

「……………」

鈴は不機嫌そうな顔で黙る。

「あのさ、一夏のことだからお前に謝りたいけど、どうすればいいかわかんねえ、ってなってると思うんだよ。だからさ、お前の方から会いに行つてやるとあいつも謝ってくれるさ」

「……………そんなこと、わかってるわよ」

「わかってるなら早めに会つてやれ。このまま仲が悪いままにいるのは嫌だろ？」

「うん。……………よし！一夏に会つてくる！」

「おう。一夏は今日は訓練するらしいからな、ここで待つてるといいだろ」

そう言つて俺はその場を後にした。

それから数時間後、俺はなぜか鈴に跳び蹴りをされた。

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは俺と鈴。

噂の新生同士の戦いとあって、注目度が高いのだろう、アリーナは全席満席。それどころか通路にまで立って見ている生徒で埋め尽くされていた。会場入りできなかった生徒たちはリアルタイムモニターで観戦するらしい。

(……そんなこと気にしてる場合じゃないんだよなあ)

視線の先には、鈴がIS、『シエンロン甲龍』を展開して試合開始を待っている。その機体は、両肩の横に浮いた非固定浮遊部位が特徴的だ。なんせザクのシオルダー・アーマーのような棘が付いているのだ。当たったら絶対痛いな。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、俺と鈴は向かい合う。その距離は5メートル。俺と鈴は開放回線オープン・チャネルで言葉を交わす。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙ぐらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

言っておくが、俺は真剣勝負で手を抜くのも抜かれるのも嫌いだ。

……前回セシリアに勝てたのは、機体が起こした奇跡に俺が便乗した結果、勝ってしまっただけだ。代表候補生は奇跡が起こってやっと倒せるレベル。

そんな奇跡は、二度も起こるはずがない。

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーッと鳴り響くブザー、それが切れる瞬間。俺と鈴は動いた。

ガギンッ!!

同時に展開した二人の武器は、火花を散らす。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど――」

鈴が手にした青竜刀――白式が解析した結果、『双天牙月』
と言っらしい――をバトンでも扱つかのように振り回す。

ガキン！ ギン！ ギャリンッ!!

高速回転させながら斬りかかってくる分、受けるのも受け流すことも苦勞する。

（まずい。このまま斬り合っていたら削り殺されちまう。いったん距離を取って――）
「――甘いつ――!!」

カシュッと鈴の肩アーマーがスライドする。露出した機構がその空間を歪ませる。

ガゴンッ！

『殴られた』ような衝撃。受けた衝撃で沈みかけた意識を無理矢理引き上げる。しかし、鈴の攻撃は止むことはない。

ドゴンッ!!

「ぐ、あッ!？」

見えない拳に殴られ、俺は地表に打ち付けられる。脳を揺らす痛みがシールドバリアーを貫通して届いていた。このままでは、かなり、まずい。

「よくかわすじゃない。衝撃砲『龍咆』は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

しばらく回避を続けたが、埒があかない。

そう、この衝撃砲は砲身すら見えないのだ。しかも砲身斜角はほぼ制限なし、ときたまんだ。それに、鈴の能力がかなり高い。かなりの強敵である。

（ハイパーセンサーに空間の歪み値と大気の流れを探らせているけどこりゃあだめだ。撃たれてから気付くようなもんだ。………冷静に考えたら何この無理ゲー……!）

びびる自分の心を押さえ込むように、ぎゅっと右手の『雪片式型』を握りしめ、先週の訓練を思い出す。

「――『バリアー無効化攻撃』？」

聞き返すと、千冬姉は小さく頷く。

セシリア戦の後、俺と箒はどうして一撃を入れただけで決着が着いたのかをあれこれと考えていた。

試合時の動画や、ログを見ても、今ひとつ結論が出ない。そんな俺たちを見かねたのか、千冬姉がやってきて説明、今に至るというわけである。

「『雪片』の特殊能力が、それだ。相手のバリアー残量に関係なく、それを切り裂いて本体に直接ダメージを与えることができる。……まあ、この能力には欠陥があつてな、自分のシールドエネルギーを攻撃に回しているからひどく燃費が悪い」

「要するに欠陥機なのか！？」

「欠陥ではないさ。ただ、ほんの少し攻撃特化になっているだけだ。おおかた、拡張領域バスロットも埋まっているだろう」

「そっぴやそうだったよ。……でもまあ、銃なんて使い方わかんねーし、いらなかなあ」

「まあ、一つのことを極める方が、お前には向いているさ。なにせ

――私の弟だ」

千冬姉は微笑を浮かべながらそう言った。

それから訓練はすべて近接戦闘と基礎移動技能に費やした。箒との剣道訓練も『刀』と言うものの間合いと特性を再度把握することに活かすことができた。

（あとは……気持ちで負けないってことくらいだな）

覚悟を決めて、戦おう。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くぞ」

真剣に見つめると、なんだか鈴は曖昧な表情を浮かべた。

「な、なによ………そんなの、当たり前じゃない………。とっ、とにかくっ、格の違いってのを見せてあげるわよ！」

『双天牙月』を構え直した鈴との距離を詰めようと加速姿勢に入る。この一週間で身につけた技能『瞬間加速^{イグニッションバースト}』は、出し所さえ間違わなければ代表候補生クラスとも渡り合えるものだ。

「うおおおおっ！」

加速し、バリアー無効化攻撃を叩き込もうとしたその瞬間。

ズドオオオオオオオンッ……！！

アリーナ全体を揺らすような衝撃が走った。ステージの中央ではもくもくと煙が上がっている。どうやらさっきのは『それ』が遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃らしい。

「な、なんだ？何が起こつて……」

状況がわからず混乱する俺に、鈴から通信が入る。

「一夏、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！」

いきなり何を言い出すのか。そう思った瞬間。ISのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

——ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。

立ちこめる煙を吹き払うかのように、ビームの連射が放たれた。

ビームによって吹き散らされた煙の中に立っていたのは、——

——異形。

「なんなんだ、こいつ……！？」

深い灰色をしたそのISは手が異常に長く、つま先よりも下へ伸びている。

首というものがなく肩と頭が一体化しているような形。

何よりも特異なのは、その『全身装甲^{フル・スキン}』だった。

「お前、何者だよ」

「……………」

問いかけには答えず、腕にあるビーム砲を乱射してくる。

「くそっ！鈴！避ける！」

「言われなくても！」

「織斑くん！？鳳さんも返事してください！！」

一夏と鈴にいくら連絡を入れようとしても通じない。そのことで真耶は焦っていた。

「あのISの仕業だろうな。おそらくジャミングをかけられているのだろう。遮断シールドはレベル4に設定され、隔壁にはロックがかけられている。まったく、厄介なことになったな」

「お、お、織斑先生！？何をのんきなことを言ってるんですか！？部隊を編成して制圧に向かわなければ！！」

「落ち着け。もう蓮が制圧に行った。だから大丈夫だ」

「…蓮淨さんが？」

確かに今までそこにいたはずの蓮淨の姿はなかった。

まるで、雨。雨のようにばらまかれるビームはじわじわとシールドエネルギーを削っていく。

「このままじゃ、どうにもならねえぞ。鈴、あとエネルギーはどのくらい残ってる？」

「260って所ね」

このままでは文字通り、削り殺されてしまう。

そう、考えたとき、

ガン　　ガン！　　ガン！！　　ガンッ！！！！

ドゴオンッ！！

閉ざされていたピットへと続く隔壁は内側から爆発したように開く。そこから飛び出した影は、飛び出した速度のまま、回避させる余裕など与えずに、『フルスギン全身装甲』をはねとばし、その姿を見せた。

『黒』。

吸い込まれるような色。

背には翼のようなスラスター。

両肩には西洋の騎士の盾を模したような非固定浮遊部位。アンロック・ユニット

体は、黒の装甲に銀のラインが走っている。

その手には、あまりにも長大な突撃槍。ランス

その姿はまるで、騎士のようで。

そのISを装着しているのは、見慣れた、顔。

「よう。待たせたな」

第10話 襲撃、そして…（後書き）

「待たせたな！」

なんとというテンプレ。

安易すぎたと思っている。

第11話 戦闘（前書き）

今回も本当にさささです。

第11話 戦闘

「――よう。待たせたな」

蓮兄はその突撃槍ランスを肩に担いで言った。

「蓮兄!？」

「お前らが苦戦してるみたいだったからな。思わず隔壁をブチ抜いて来ちゃった」

ブチ抜いてきた。言うのは簡単だが実際にできるものではない。有事にはシエルター代わりになるような隔壁をだ。

その言葉に哑然としている俺と鈴の横をビームが掠める。

吹き飛ばされていた全身装甲フルスキンが体勢を立て直し、射撃を再開する。

「ちっ、もう立て直したか。一夏、鈴!援護頼む!!」

そう言っただけ蓮兄はビームを避けながら加速、突撃槍を脇に構え突進する。

突き込まれたその穂先を全身装甲フルスキンは避け、その異常に長い腕を振り回す。

ガギンツ!ガキヤンツ!!ギン!ガン!

何十もの剣戟。空中でぶつかり合うように攻撃を交わす。互角と思われる戦いを断ち切ったのは蓮兄だった。

突撃槍の石突きを突き込み、体勢を崩した全身装甲フルスキンの頭を掴んで地

面に叩き付ける。

——圧倒的。自分が幾ら接近戦を挑もうと回避されていた相手に一撃を叩き込む。レベルの違う戦いに只、圧倒されていた。

「おい。援護はねーのかよ、援護は」

そう言いながら蓮兄は俺たちがいる場所へと上昇してきた。

「む、無理に決まってるでしょ！？あんなに高速で動かれたら照準なんて合わないし下手すれば誤射するわよ！？」

「えー、そうかあ？」

軽口を叩いていた蓮兄の雰囲気、急に鋭くなる。

「……もしかするとあれは————っ！、一夏、鈴。あれは無人機だ」

「………は？」

「……あり得ないでしょ？ISは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものじゃないの？」

「……スタンド・アローン独立稼働。技術自体は七年前に確立してるんだよ。よく見りゃ、あいつの行動にはパターンがある。そのパターンを俺は知ってる。………クソツタレ………！」

苦々しげに言葉を吐き捨てた蓮兄の横顔は、今まで見たことがない、哀しそうであり、憎悪に満ちた顔だった。

「一夏の『零落白夜』なら一撃で落とせる。鈴、お前は衝撃砲での

牽制。俺があいつの動きを止める。合図をしたら遠慮なく叩き切れ」
「わ、わかった」

その表情に、只頷くことしかできなかった。

（
クソが）

憎悪、憎悪、憎悪。今俺の中で渦巻いているのは制御できない感情。
フラッシュバックする
脳裏を駆けめぐる記憶。

（一夏にやらせるまでもねえ、跡形もなくぶっ壊してやる！）

目の前が真っ赤になるような感情を持て余したまま、機体を操る。
感情の赴くままに操る機体に、先程までの精細さは無い。

—— 無様。酷く、無様。

そんなことはわかっている、わかってはいるが、これを抑えることができない。

肩に被弾。かまうものか。突撃槍を俺が被弾した箇所と同じ所に突

き込む。関節の駆動系がやられたのか、だらりと動かなくなる腕。もうただの殴り合い同然の戦い。殴られたら殴り返し、殴ると殴り返される。

フルスキン
全身装甲の胸部装甲がスライドし、砲口が姿を現す。
避ける気など更々無い。

ドガッ！

「な！？」

横からの衝撃、それによって無理矢理、体が射線上から外される。そして、発射されるビーム。

ギユバツ！！

「ぐあッ！」

「一夏！？」

俺を押しつけ、射線上に躍り出たのは、一夏だった。
慌てて一夏の元へ駆け寄る。

「おい！大丈夫か！？くそ、何で——」

ガツンと殴られた。

「——らしくねえ。蓮兄らしくないんだよ！！何があつたかは知らないけど、今はそんなことやってる場合じゃ無いだろ！？」

「——っ」

「蓮兄だつて分かってるんだろ！だから！違うモノを見てないで前イマを見る！！」

—— 嗚呼。漸く頭が冷えた。そう思うと笑みが零れる。
弟分にここまで言われたら、やるしかないよなあ。…まあ、せめて
カッコつけるぐらいのことは許されるだろ。

「ったく、やっと元に戻ったのかよ。遅い！」

「……はっ、誰に向かってそんな口聞いてんだよ。征くぞ！一夏あ
！！」

「おう！」

加速。今までまともな動きができなかった体がやけに軽い。

武器は持たずに、無手で打ち合う。

突き出された豪腕を受け流し、掴む。

重心を崩し、ISの姿勢維持が反応する前に投げる。

空中を錐揉みしながら飛んでいく敵ISを視界に納めながら、つぶ
やく。

「はあ、俺は主人公^{ヒーロー}には成れないらしいな。—— やっちま
え、一夏」

「うおおおおおおおっ！！」

『零落白夜』を展開した一夏が、その『全身装甲^{フルスキン}』を切り裂いた。

学園の地下50メートル。そこはレベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。
機能停止した『全身装甲』フルスキンはすぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。

それから約2時間後、解析結果が出た。

「織斑先生、蓮浄さん。解析の結果、やはり無人機でした。どのような方法で動いていたかは不明です。織斑さんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切られていたので、修復は無理かと」
「そうか、何か情報は引き出せなかったのか？」

「いえ、ひとつだけあります。……ログにメッセージが残っていて、『ゲシュペンスト亡霊八亡国ノ元、再ビ彷徨ウ』とだけ」

そのメッセージが表示されたディスプレイを、蓮浄はただ、見つめ

て
い
た。

第11話 戦闘（後書き）

蓮浄は主人公だけど主人公らしい扱いはあまりしたくない、と思ったのがこの酷い展開の始まり。

まあ、いろいろ伏線張ったのはいいけど回収しきれるかどうかな。

こんな駄文でも読んでくれるお方、本当にありがとうございます。

よろしければ感想、コメントなどを。

第12話 オリキャラ登場、そして蓮浄の日常（前書き）

オリキャラ登場します。

ラブコメ成分はないです。久しぶりにネタを織り込んでみたことに後悔はしているし反省もしている。

第12話 オリキャラ登場、そして蓮淨の日常

「……んで、弟分いちかにハッパかけられて正氣に戻ったって事か？」

「……ああ」

「うつわー、だっせえ」

……分かつてる。そう言つて、コップに注がれた酒を喉に送つた。今、俺は高校時代の友人とともに自分の部屋で酒を飲んでいた。にやにやとした笑みを浮かべているのは中学からの悪友、前田まえだ 英太えいた。何故この様なことになっているかというところ、全身装甲フルスキンとの戦闘時の出来事を機密に引つかからない程度で話した結果だ。

「……まあ、そんなことはどうでもいいからさ。千冬ちゃんとはどうなったのよ？ 久しぶりに再会したんだろ？」

「？ どうなったって？」

「……ああ。何となく把握した」

「？ だから何のことだよ？」

「いや、気にするな。……千冬ちゃんと束ちゃんもなーんでこんな面倒くさい奴に惚れたのかねえ」

最後の方が聞こえなかったが、気にするな、と言っていたので大したことでないのだろう。

「話が変わるけど蓮淨さあ、学園の教師やり始めたって聞いたけど給料ってどんぐらいなん？」

そう、IS学園とは国家が管理する機関であるから、公務員扱いになるのだ。給料もそれに見合うだけの金額になる。そのことを英太に教えると、

「うげ！僕の二ヶ月分の給料じゃねーか！？いいなあ、僕なんか機デスクワークにくたいろうどう体設計やら機体整備やら労働基準法カンペキ無視したような事やつて漸く二分の一だぜ？」

英太は『打鉄』に次ぐ純日本製IS量産機の開発に携わっている。最近漸く試作機が完成したらしく、本人曰く「半年ぶりの休み」だそう。実はIS学園の教師は、このような企業のテストパイロットを任されたりする事がある。今はまだ担当する人が決まっていないようだ。

「結構気疲れするんだよ、男が俺と一夏ぐらいしか居ないからな」

「……………ちょっと待て、もしかして先生まで女ばかりなのか」

「そうだけど、どうかしたか？」

「……………神は死んだ！」

「はあ？」

「いいなあ！いいなあ！！僕の職場なんて愛情のベクトルが機械にしか向けられないような変態おとしどもの巢なのに！！！」

「あー、すまん？」

「くそう！この一級フラグ建築士め！！いつもなんで女に囲まれてるんだよ！！！！羨ましいぞコンチクショウ！！！！！」

このようなバカ騒ぎをしながら土曜の夜は過ぎていった。

「……う、あー」

喉の渴きと不協和音を奏でる脳の痛みで目を覚ました。空き瓶やつまみの袋が散乱した机に突つ伏していたので体が痛い。

「……あつたま痛^{いて}え」

昨晚の記憶がない、いや、断片的には覚えている。たしか英太が帰った辺りまでは記憶があるが、そこから後が分からない。たぶんあの後一人で飲んでいたら吞まれたのだろう。
頭痛で揺れる視界を何とかしようとするが体が動かない。

コンコン

「兄貴ー入るぞー、うわ酒臭え！」

「……^{さかき}榊か、水持ってきてくれー」

部屋に入ってくるやいなや失礼な事をほざいたのは弟の東雲^{しのめ} 榊^{さかき}。
一夏と同一年で市内の市立高校に通っている。

「ったく。英太さんが帰った後も飲んでたのかよ。朝飯はどうする？」

「……あさりのみそ汁」

「ん。わかった。水持ってくるからおとなしくしてろよ」

「……おーう……」

持ってきてもらった水を飲み、体を起こしてリビングに向かった。

「おはよう、蓮浄くん」

「おはよう」

挨拶を交わしたのは父の柳沙、いつもどりのほんとした微笑を浮かべている。

「「「いただきます」「」」

朝食のメニューは白飯とアジの開きにあさりのみそ汁、ほうれん草のおひたし。

「神、俺こんなに食えないぞ。気持ち悪くて」

「食べられるだけ食べてよ。せつかく作っただから」

「…わかった」

ずず、とみそ汁を口に含む。

五臓六腑に染み渡る味。うん、うまい。やっぱり二日酔いの後にはあさりのみそ汁だな。

「そうだ、蓮浄くん。後で組み手をしようよ」

「親父。俺二日酔いなんだけど」

「……駄目？」

そこでなぜ悲しそうな顔をする。

「…わかった。シャワー浴びたら組み手しよう」

「うん！」

満面の笑み。だから44になっても子どもっぽいつて言われるんだぜ。

道場で親父と向き合う、審判は榊。

「始め！」

距離を取る。相手は右手を前に、左手を腰に添えた構え。じり、と重心を崩さないように近付いてくる。

（攻めるべきか、守るべきか。さて、どうするか）

そう考えながら間合いを測っていたとき、膨れあがった威圧感に押し潰されそうになる。

「なっ！？」

「東雲流——遠隔格闘術。壱の型、遠当て」

親父が何もない空間へ向かって拳を打ち出す。

5メートルは離れていたはずなのに、打撃が届く。

理論は簡単だ。『鎧通し』と言う技がある。あれは相手が鎧を着ていようと、衝撃を通す技だが、ウチの親父殿はそれを空気を挟んでやる。簡単に言えば空気があるならある程度離れた所に幾らでも打撃をぶち込める、ということだ。マジチート。

「があっ！」

「壱の型、伍の型、混成打撃」

攻撃を食らい、遠のく意識の中で思ったことは、

「この親父、手に衝撃砲でもついてんのかよ」
だった。しまらねえ。

「…あ、やりすぎた」

「ちょ！？兄貴！？大丈夫かよ！？」

打撲による全身の痛みを堪えながら道場の拭き掃除をする。殴られた時に血が飛び散っていたのだ。

「いてて…。親父も手加減しろよなあ…。俺じゃなかったら死んでるぞ」

プルルル、プルルル

「ん？電話か」

痛む体を引き摺りながら電話を取ると、聞こえてきたのは爆音だった。

「ハハハ！リュウサ、いるか！？」

「……………マイケルさん？」

「oh！レンジョーか！？」

「どうしたのさ、大統領が電話してくるなんて珍しい」

「いやぁ、ビッグアップルを焼き林檎にしようとした腐ったチーズにOSI OKIしようとしたんだがな。なかなかしぶといのでリュウサに手伝ってもらおうかと思ったんだ！」

「……………なんつーか、流石大統領ですね」

「当たり前だ！なぜなら私は……………アメリカ合衆国大統領だからだ！！」

「……………親父に代わるわ」

……………いつも通りの日常だった。と思う。いや、思いたい。

第12話 オリキャラ登場、そして蓮浄の日常（後書き）

まさかのオチに大統領登場
やっちゃったぜ

反省はしていない、なぜなら私は・・・アメリカ合衆国大統領だからだ！！

感想くれると嬉しいです

第13話 金と銀（前書き）

うん。サブタイがなんか麻雀漫画みたいになってるね。
それと自分で読み返して「うわあ、まんま原作だ」って思った。

第13話 金と銀

ここは職員室。

いつもは静かなここも今日は少し騒がしかった。

その原因は今俺の目の前に並んでいた。

「シャルル・デュノアにラウラ・ボーデヴィツヒ。これから一年間、1年1組で一緒にやっていく事になった副担任の東雲蓮浄だ。よろしくな」

「はい。よろしくお願いします」

「……………」

二人の転校生は代表候補生だ。いや、それも結構珍しいことだが騒がしさの原因は別の事だ。驚く所は、シャルル・デュノアは男だという点だ。

世界で三人目のISを操縦できる男。珍しいなんてレベルじゃない。

……………おっと、時間がギリギリだ。ショートホームルームSHR始まっちゃう。

「さてと、そろそろ行くか」

「はい」

「……………」

つかラウラ、一応俺と面識あるんだからなんか一言ぐらい言えよ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生の一人、デュノアはにこやかな顔でそう告げて一礼した。

おーおー、一夏もクラスのみんなも呆氣にとられてやがるな。

「お、男……？」

誰かが呟く。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

「きや………」

あ、嫌な予感がする。

「はい？」

「きやあああああーっ！」

音が疾走^{さけび}る。いや、比喻とかじゃなくて。大音量の大型スピーカーがハウリング起こした時と同じ様にに耳が痛い。クラスの中から広がるように歓喜の叫びは伝播している。

「男！三人目の男！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった〜！」

元気だな、うちのクラスの女子は。……元氣すぎて困るってこのことか！

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬がぼやく。昔からこういうテンションについて行けてなかったからなあ。

「あ、あのっ！皆さんお静かにつ！まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

あまりの騒がしさにスルーされかけていたラウラにやっとクラスの皆が気付く。

なんか前より『軍人やってます』オーラが出てるといふか。あ、あれか。眼帯してるからそう見えんのかな。

「……………」

黙っている。腕組みをした状態で教室の女子たちを下らなそうに見ている。しかしそれもわずかのことで、今は視線を千冬に向けていた。

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

いきなり佇まいを正して素直に返事をするラウラ。……………まだこいつは千冬大好きっ娘なのか。ドイツ軍式の敬礼を向けられた千冬は先程とはまた違った面倒くさそうな顔をした。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」
「了解しました」

そう答えるとラウラはぴつと伸ばした両手を体の真横につけ、カッと踵を合わせて背筋を伸ばし、言った。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」
「……………」

クラスの皆の沈黙。続く言葉を待っているのだろうか。しかしラウラは口を閉ざしている。

「あ、あの、以上……………ですか？」
「以上だ」

うわあ。空気にいたたまれなくなった真耶ができる限りの笑顔でラウラに訊くが、返ってきたのは無慈悲な即答だけだった。全く、真耶が泣く一歩手前な顔をしているじゃないか。

「！ 貴様が——」

ん？ラウラが一夏の方へ歩み寄って。……………平手打ちをかましやがったあ！？

「……………」
「う？」

いきなりこのことで混乱しているのだろう、一夏がぼかんとしている。

「いきなり何しやる！」

「ふん……………」

ラウラは来たとき同様すたと一夏の前から立ち去っていく。うわー、無視された一夏がキレてるぞ。拳握りしめて額には青筋立ってるし、相当だなこりゃ。

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

パンパンと手を叩いて千冬が行動を促す。

「一夏、デュノア連れてさっさと更衣室行くぞ」

「あ、うん」

やっぱり一夏が少し動揺してるな。そんなことよりも更衣室へ急がなければならぬ、急がなければ女子たちが着替え始めてしまう。それだけは避けたい。絶対に。

「君が織斑くん？初めまして。僕は―――」

「あ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

一夏がデュノアの手を取って教室を出た。

「とりあえず男は基本空いてるアリーナの更衣室で着替える。これから実習のたびにこの移動だから早く慣れるようにな」

「あ、はい」

やばい、急がないと。……………あ、来た。

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君と東雲せんせーも一緒！」

HRが終わってしまったのだ。早速各学年各クラスから転校生の情報を手に入れるための尖兵が駆けだしてきている。捕まったら最後、質問攻めで授業に遅刻。一度体験したから分かる。千冬の説教タイムになることは間違いない。あれはもう二度と食らいたくない。

「いたっ！こつちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

アレですか、俺たちは武家屋敷に侵入して発見された忍者かなんかですか。

「織斑君と東雲せんせーの黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああっ！見て見て！二人！手！手つないでる！」

「……………！これからの流行は東雲×織斑じゃなくて織斑×デュノア……………！これは売れる！」

何だろう、すごい嫌な気分になったよ。でも最後の方の言葉を聞いて何故か少しほっとした。

「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

状況が飲み込めないらしいデュノアが困惑顔で訊いてくる。

「そりゃ男が俺達だけだからだろ」

「……………」

何故かデュノアが「意味が分からない」って顔をしている。なんのだ？

「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦できる男って、今のところは俺と、一夏とデュノアしかないわけだしな」

「あつ！——ああ、そうでしたね」

まあ、そんなことはどうでもいい。今優先すべき事項はこの女子の包囲網を突破することだ。

第13話 金と銀（後書き）

よく考えたら、ちょうど二巻に突入。

P V 2 6 5 ' 5 0 2 アクセス

ユニーク 4 6 ' 8 9 7 人

になってました。

今回は25万突破記念で書きたかったバレンタイン話でも書くかな？

そう言えばアンケートを採りたいと思ってたんですね。

まあ、オリヒロインを登場させてハーレム形成か、原作ヒロインでハーレムいちゃいちゃか。

こっというのがいい！っていうのがあったら一言書いていただくとありがたいです。

第14話 はじめての合同実習（前書き）

いやあ、遅れた遅れた。

前回投稿したら早速アンケートの件でコメントをいただきました。

キールさん、l s t o r y | さん、極神さんありがとうございます！

第14話 はじめての合同実習

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

1組と2組の合同訓練のため、人数はいつもの倍。これからISを使用した本格的な訓練を始めるせい、みんな返事に気合いが入ってるな。

「くうっ……。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「…………一夏のせい一夏のせい一夏のせい…………」

オルコットと鈴が頭を押さえてぶつぶつと呟いていた。先程千冬に騒いでいた所を注意されたせいだ。
出席簿アタック

どがっ！

うわ、一夏が鈴に蹴られた。何やってるんだあいつ。そんなことやってると――

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――
ファン 凰！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで!?!」

完全にとぼっちりだ。諦めるオルコット。もう何を言っても無駄だと思う。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」
「だからってどうしてわたくしが…………」

「一夏のせいなのになんであたしが……」

不満をたれる二人に千冬が後半が一夏には聞こえないように言った。

「お前ら少しはやる気を出せ。————あいつにいいところを見せられるぞ？」

うわぁ、こんなのでやる気出すわけ無いだろ。常識的に考えて。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

……！？俺が間違ってるのかこれ！？え、そんなことでやる気出すんですか？まじで女子というモノが分からなくなってきた。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞よ。返り討ちにしてやるわ」

「慌てるなバカども。対戦相手は————」

キイイイイイイイン……。

んあ？なんだこの音。あ、アレだ。戦闘機とかが飛ぶときに出す音だ。………まさか。そつと後ろを振り向くと俺の方向に向かって真っ直ぐ墜落してくるISがあった。

「あああーっ！ど、どいてくださいーっ！」

「おいまてまじかよオイ！」

ドカーン！

慌てて黒騎士を展開するが、受け止めきれずに数メートル吹っ飛んだ。

「ぐおお……！シールドエネルギー越しでも超痛え……！」

からだを起こそうと両手に力を入れると、何か柔らかいモノを手で押し潰しているような感触。わあ、超嫌な予感がするぜ。

「あああああ、あの、あのあのっ！れれれれ、蓮浄さんっ！
？……………ひゃあん！」

嫌な予感的中

「そ、その、こ、困ります……………こんな場所なんて……………」

真耶。真耶でした。今の体勢は真耶を押し倒しているような体勢ですよヒヤッホウ！俺の両手はしっかりと真耶のおっぱいを鷲掴んだ状態でキープ。……………うわあ、早くどこないと現在進行形で右斜め後ろから注がれる千冬の視線が痛い……………！だけど体が動かないんですよね、なんか知らんけど体が「動きたくない、てへ」って言うてるんだようわあ自分で何言ってるかわかんなくなってきたマジで誰か助け——

ドゴン

千冬さんや、IS装備してる俺を宙に浮かすぐらいの威力を持った蹴りってどれくらい痛いかわかるかい？

「ごほん。鳳、オルコットお前らは山田先生と戦って貰う」

ISを解除した後、脇腹を押さえてのたうち回る俺を尻目に千冬が授業を再開する。

「え？あの、二対一で……？てゆうか蓮浄大丈夫？」

「いや、さすがにそれは……。あと東雲先生が死にそうになっているんですが」

「安心しろ、今のお前たちならすぐ負ける。………その馬鹿は放っておけ」

最後の言葉を聞いて心が折れそうになった。あれなんだろうなんだかしよっぱいぜ。そんなことを考えているといつの間にか戦闘が終盤を迎えていた。

お、真耶が使ってるのはラファール・リヴァイヴか。それにしても真耶は射撃が巧いな、牽制射撃でセシリアを誘導して鈴とぶつからせた所にグレネード投擲。黒煙の中から二つの影が落下してくる。

「くっ、うっ……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……。何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！なんですぐにビットを出すのよ！しかもエネルギー切れ早いし！」

面白いぐらいにいがみ合ってるな、しかしどっちの主張もそこそこの射ているんだからそこら辺をうまくカバーしたら――

無理か、この調子じゃ無理だなきつと。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

この後、ISの装着と起動、歩行の実習をやり終えて千冬とともに職員室に帰っている途中に、予期せぬ訪問者に出会った。

「やあ。蓮浄、千冬ちゃん」

「英太！？どうしてここに？」

「いやあ、ウチの会社が試作機完成させたって話はしただろ？そのトリアルを千冬ちゃんに頼みたいなーって思って」

「……私が？」

「うん。『打鉄』の後継機、鉄を打ち、鍛錬されて出来た一機――」

――銘は『虎徹』………どうかかな？」

第14話 はじめての合同実習（後書き）

今回は初めての真耶イベント。これだけは外したくなかったので書いて結構満足している。

ふう……………。虎徹とかネーミングセンスなさ過ぎだろ。jk
うわあああああああつあああああ！

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい単に村正やりすぎてただけですうこのままじゃ千冬が「吉野御流合戦礼法 迅雷が崩し――

――電磁抜刀 呪！」とかやつちゃうよ！――いや、二次創作だからいいのかな？
いやよくねーよ作品が代わってるよ。

まあそんな茶番は終わらせてと、アンケートを4月16日には締め切りたいと思います。

べ、別に感想が欲しい訳じゃないんだからねっ！

それとIS7巻の展開に度肝を抜かれた。

第15話 模擬戦（前書き）

なーんか最近サブタイトルが貧弱になってきた気がするよ！
それとリアルが忙しいので更新が週末しかできないorz

第15話 模擬戦

「んじゃ、早速フツティングをしますかね？」

「ああ、頼む」

あの後、整備室に移動しての作業となった。『虎徹』のスペックデータに目を通すと、『打鉄』の後継機らしく、主力武装が右肩に担ぐように装備された野太刀だけらしい。……まあ、白式とは違って拡張領域がちゃんと空いてるから射撃武器も使えるんだろうが。データに目を通している間にフツティングが終了したようだ。

色は白を基調としたデザイン。形状は『打鉄』に似通っている部分もあるが、『虎徹』のほうがより攻撃的なフォルムをしている。

「今日は細かい所までは設定を弄くれないけど、ある程度千冬ちゃん用に設定しておいたから」

「千冬用？どこら辺を弄ったんだ？」

「信号伝達速度を1.8倍にして、機体の反応速度の上昇に伴う関節の補助アクチュエータの制限解除とか――」

「……とりあえず、反応速度が上がった所までは分かった」

千冬がマニピュレータを動かして機体の調子を確認めている。そういえば千冬がISを装備しているのを見るのは久しぶりだな。

「蓮、機体の調子を確認するために少し模擬戦をやってみたいのだが」

「おう、いいぞ」

「おおー、ありがたいねえ。早速データがとれるよ」

アリーナの中央で向かい合う。

私は機体の反応等を確かめながら、蓮と相対していた。

『んじゃ、制御室で僕はデータ取ってるから。一応フツティングした後だから制限時間は五分で設定しておくよ』

「お、りゃ」

「ああ」

「それじゃあ――始め！」

前に向かって加速。

ひゅっ、と息をはきながら野太刀を振り下ろす。その一撃は突撃槍によつて防がれた。

その一瞬に思ったことは、速い、だった。ある程度自分の操縦しやすいように設定しているとはいえ、機体のレスポンスが量産機とは思えない。

「速っ！？本当に量産機なのかそれ！？」

一撃を防いだ蓮も、予想以上だったのか驚いている。

そのままグルグルと空中で絡み合うように打ち合っていく、蓮は武器の扱い方が巧い。突撃槍なんてリーチの長い代物を、バトンの様に回して打ち合ってくる。穂先での突きかと思えば、柄での横薙ぎを放つなど緩急合わせた攻撃をしてくる。……………一瞬、頭の中で

「女の扱いもこれぐらい上手かったら良かったのに……」と考えてしまった。馬鹿か私は。

「しっ——」

下段からの逆袈裟。

ガイン！

「お——らアッ！」

突きの連撃。

ギャリ、ギャリン————ギャン——！！

幾重にも重なる剣戟、一際高く鳴り響いた音。それを合図としたかのように両者が距離を取る。

——白はその野太刀をゆるり、と大上段に構え、

——黒はその突撃槍を脇に抱え込み、突撃の構えを取る。
チャージ

静寂。その刹那、色を交わらせるように、白と黒は激突した。

「まさか、同時にシールドエネルギーが0になるとはな」

ここはアリーナの廊下、データ回収も終わり、寮へと戻っている途中だった。

そう、最後の一撃で二人のシールドエネルギーが同時に底を突いた。偶然と言うにはあまりにも出来過ぎな感じがするがそれも世界の意志^{作者の意}なのだろう。……………む？なにか電波を受信したような……………気のせいかな。

「英太が、『こんなにハイレベルな戦いじゃあ参考データに成らないよ！』と嘆いていたな。全く」

「まあ、良いんじゃないか？俺は楽しかったぞ」

そう言って笑う横顔に少し、ほんの少しだけドキリ、とした。

「っ！そ、そうか、私も、楽しかったぞ……………」

ああ、顔が赤くなっているのだろうな、と他人事のように感じているとき、そっかあ、と笑った蓮に、またドキリとさせられた。

全く――敵わない。

ここは、とある研究室。

「おお！？ちーちゃんがISに乗ってる！？」

一人の女性が幾重にも展開された空間投影型ディスプレイを見ながら騒いでいた。そこに表示されていたのは、蓮浄と千冬が模擬戦をしている映像だった。

「むー……。ちーちゃんだけが蓮君に構って貰うのは頂けないなあ。どうしようかなあ。……。あ、そうだ。私もIS学園に行けばいいんだ！やっぱり束さんは天災だね！よーし！こうなったら今すぐ行こう！」

がちゃーん！とまわりに積み重なっていた使用用途が不明なパーツ

を薙ぎ倒して、その女性は研究室を後にした。

第15話 模擬戦（後書き）

さてさて、みんな大好き束さんの登場だよー！

作者はここで束さんを出すつもりが無かったけど何で出したんだろ
うね！

そ、そこ！やっぱり馬鹿だったか、とか言わない！

やっぱり原作七巻で設定が色々そげぶされたので急遽、シナリオ変
更となりましたわーい！今まで書いてた設定の6割がゴミ箱行き
だよー

だって…！原作はあんまり無視したくないんですよ……！

皆さん、この様な駄文を読んでくださり誠にありがとうございます！
指摘、感想お待ちしております！

第16話 天才／天災の襲来（前書き）

最近ものすごく短い文章しか書けない……。
微妙にスランプかもしれない。

第16話 天才／天災の襲来

今日も一日、大変だった。

どこからか、学年別トーナメントで優勝すると一夏と付き合える、と言う噂が広がっており、その噂でヒヤッハ^{出席簿アタック}している女子が多くて大変だった。まあ、八割方は千冬にいつも通りの処置を取られていたが。

「あー、シャワー浴びてから食堂行くかあ」

独り言を呟きながら、自室のドアを開けると

「やあ！蓮くん！約三ヶ月振りだ——」

ボタン。思わずドアを閉めてしまった。なんで束がここにいるんだ。ああそうか夢か！夢に違いない！！あまりにも疲れてるからドア開けながら寝てたんだ。そうに違いない。

ガチャ。

「ちよつとー！？なんで閉めるの？せつかく束さんが会いに——」

ボタン。

「…………夢であって欲しかった……………！！」

ドアに額を当てて頂垂れていると、千冬が戻ってきて、俺を変なモノを見るような目で見てきた。

「……どうした？蓮、入らないなら私が先に入るが」

そう言つて、忠告する暇もなくドアを開け放った。

ガチャ。

「おお！ちーちゃん！久しぶりだね——」

ボタン。千冬が顔をしかめてこっちを向いた。

「どうなっているんだ。私は何も聞いていないぞ」

「……俺だつて何も知らんぞ」

はぁ、と深いため息を吐く。どうしようか、と考えているとドアが開いた。

「蓮くんもちーちゃんも酷いよ！なんで私を見るとドアを閉めるの！？束さん、なんか悪いことしたかなあ！？」

「……ここにいることが問題なんだ！」

「えー！？もしかして束さんはいらな子なのかな！？」

疲れる……！そう言う感想しか出なかった。何でかテンションの高低束と話していると疲れるんだよ！普段は良い娘なんだがテンションが上がるとヒヤッハーするんだよね。

「それは良いとして、何で束はIS学園（こ）に来たんだ？」

「おお！そついや忘れてた！」

忘れてたのかよ。

「いやー、ちーちゃんが『虎徹』だっけ？ISに乗ってるのを見て居ても立ってもいられなくて！……まあ、それはついでなんだけどねー」

「お前……IS学園のカメラにハッキングしたな？」

「ちつつち、今回は偵察衛星だよ！」

「似たようなもんだよ！」

そう言うとなんが可笑しかったのか、くすくすと笑いながら俺に腕を絡ませてきた。あの、束さん？腕を組むのは良いが胸を押しつけるのはやめようか。

「うん、やっぱり二人のそばにいるのは楽しいなあ」

「楽しむなら周りに迷惑が掛からないようにしてくれ。頼むから」

それと千冬さん、何でか知らないけれど殺気がダダ漏れです。マジで怖いんですけど。

「ち、千冬さん？どうなさったの？」

「はあ……。蓮、夕食を取りに行く途中だったのだろう？行くぞ」

「お、おう」

千冬は急に殺気を納めて、少し強引に俺の手を引っ張っていった。食堂で一夏や箒とまた一騒動あったのは別の話。

ここは寮の屋上。夕食後に、少し個人的な話があるといつて束に呼び出された。ちょうど良かった。こつちも言いたいことがあったからな。

「ねえ、蓮くん。今の世界は楽しい？」

ふわり、と夜風に髪をなびかせながら聞いてくる。

「なんだよ、いきなり」

「良いから答えてよ」

「——まあ、楽しいかなあ。ここには一夏に千冬、お前もいるからな。退屈はしてないよ、束こそ、どうなんだ？」

「私も、退屈では無いよ？ちーちゃんもいつくんも篝ちゃんも、」

……蓮くんのこと、大好きだからね」

落下防止の柵に肘をついて、今度はこちらから質問する。

「——ここを襲撃した無人機、お前が作ったモノだろ？」

「……ありやいや、気付いちやってた？」

「おう、まあ、あの独立稼働システムのことを知っているのは俺と、スタンドアローン千冬と束しか居ないからな。……それと、『あいつ』がまた動き

始めたって事、本当か？」

「うん。また『あの子』は動き出したよ。亡国企業ファントムタスクの元で」

「……そっか」

「……蓮くん、私はそろそろ行くね」

「随分と短い滞在だな、何か大切な用でもあるのか？」

「うん、ちよつとね。天才の束さんは忙しいのですよ。今度会うときにはおみやげを期待しててね？」

「……おう、体だけには気をつけるよ」

「うん。ありがと」

それじゃあね、蓮くん。

束がそう告げたと同時に突風が吹き、思わず顔に手をかざした。その手をどけると、先程の風に攫われたかのように、束は居なくなっていた。

第16話 天才／天災の襲来（後書き）

ヒャッハー！！アンケートの結果を発表するで御座るよ！

結果！原作ヒロインでハーレム？構成で御座るよー！

投票してくれた皆様！誠にありがとうございます！

第17話 The surprise came. (前書き)

地の文を増やそうとがんばった結果がこれだよ！

あんまり代わってない気がする。

それと更新速度が極端に落ちてる。これもリアルが忙しいせいだ。

……言い訳ですね。

第17話 The surprise came .

六月も最終週に入り、学園は学年別トーナメント一色になっていた。準備等は生徒の方にも手伝って貰ってはいるが、教師陣は忙しすぎて目が回りそうというのが現状だ。

ちなみに俺は貴賓席の担当となった。

……まあ、ISを動かせる男として世界各国の企業や政府のお偉い方に挨拶をしておけ、とのありがたい御命令が下されたからなんだが。

……うん、周りの視線が部屋に入ったとたん一気に俺の方に向いたからね。脂汗がやばいよ。

さて、気は進まないが挨拶周りでもするかな。

「お越しいただき誠にありがとうございます」

「ん？なんだ？レンジョーじゃあないか！！」

「……大統領！？こんな所でなにやってんですか！？」

「うん？私は我が国の未来を支える有望な若者たちを見に来ただけだが？」

「……そうですか」

まさかここで大統領に会うとは、マイケルさん エンカウントする思っても居なかったぞ。つか公務はどうした公務は。

「……あれ？蓮浄？久しぶりね！」

すると、大統領の横にいた金髪の女性が話しかけてきた。

「………？どちら様でしょう？」

「……本気で言ってる？」

そう言つとその女性は青筋を浮かべながら詰め寄つてきた。というかマジで心当たりが無いんですけど。どちら様？

考えが顔に出ていたのか、あーもう！と言つて髪をポニーテールにするように結い上げた。…………あ。

「…もしかして、ナターシャ、か？」

そこにいたのは、世界中を旅していたときに知り合つた、友人だつた。

「もしかしてじゃないわよ！もう、女の子のことを忘れる男は最低よ？」

「女の子って年じゃな足の甲が踏み抜かれたように痛い……いいいいいつ！？」

「女の子に年の話はタブーよ？分かつてる？」

「いてて、ったく、お前は美人なんだからそこまで気にすること無いだろうに……」

「！？…………うー、いきなりずるい…………」

なんだなんだ、青筋立ててたと思つたらいきなり顔を赤くして俯いてしまった。なんで？そんなに怒るようなこと言つたっけ、俺このままでは色々まずい気がする、よし！謝るか！

「あゝ、ナターシャさん？」

刺激しないようにゆっくりと顔をのぞき込む、すると、「ひゃあ？！」と声を上げて飛び退いた。

「うお！？なんだ！？どうした！？」

「なななななんでもないわよ！？さつさと他の所に挨拶に行つてきなさい！」

「お、おう」

背中を押されて、俺は次の所へと送り出された。

「うー、蓮浄のばかー……………」

頬に手をやると、まだ熱い。あの馬鹿があんな事言うからだ。

…………でも、美人って、褒めてくれた。そう考えるとまた頬が熱くなるのが分かった。でも、うれしい、すごく、うれしかった。

「…………えへへ」

「……………わー、ひとがいつぱいだー」

「……一夏、緊張してる？」

当たり前だ、という言葉が発することが出来ずに、ただ唾をこくりと呑んだ。それだけで俺がどれだけ緊張してるかが伝わったらしく、シャルルはあはは、と笑った。

「まあ、三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年も上位入賞者にはチェックが入るんじゃないかな」

「何で人がこんなに集まっているかは分かったけど、この待つてる間のこの時間をどうにかしてほしいぜ。……………早く試合始まらねえかなあ」

「やっぱり、ボーデヴィツヒさんのこと？」

「……………まあ、な」

鈴とセシリアは、ラウラとの模擬戦、いや、模擬戦というにはあまりにも一方的な攻撃で機体損傷度がCに達していたため、参加の許可が下りず、今回は辞退せざるを得なかったのだ。一般生徒ならともかく、二人は国家代表候補生であり、その中でもエリートの専用機持ちである。この様な各国の研究員や機体に参加する大会で参加が出来ないというのは、二人の立場を悪くするだろう、最悪、専用機剥奪ということもあり得る。

「……………敵討ちなんて仰々しいモノじゃあないけどさ、このまま何もしないっていうのは駄目だろ」

例の騒動を思い出して、白式が待機している右手を握りしめる。気付かないうちに力がこもっていたらしく、シャルがその力をほぐすように手を重ねてきた。

「感情的になっちゃ駄目だからね一夏、彼女は曲がりなりにもドイツ軍特殊部隊所属だからね。おそらく現時点では一年生の中で最強だよ」

「ああ、わかってる」

ペアが決まってから、シャルルと随分仲が良くなっていた。……まあ、その過程でシャルルが彼ではなく彼女だったということも知ってしまったのだが。まさか、ボディソープが切れかけているのに気が付いてそれを渡そうとしたら、丁度シャワーから出て来たシャルルと鉢合わせるとは。眼福でした。

「さてと、こっちの準備は出来たぞ」

「僕も大丈夫だよ」

お互いにISスーツへの着替えも終わり、IS装着前の最終チェックも完了した。あとは、試合が始まるのを待つだけだ。

「そろそろ対戦表が決まるはずだったよね」

何でかは知らないが、突然のペア対戦への変更に、従来使用してきたシステムが対応しないという問題が発生。そこで、急遽パッチを作成して対応させようとしたらしいがパッチの完成が遅れたらしく、今朝完成したようだ。

大まかな何回戦何組目という項目は決まっていたのだが、いかなせん全校生徒を人の手で割り振るには時間が足りなかった。

「なあ、シャルル、俺達が1年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運が良いと思わないか？」

「え？どうして？」

「待ち時間の緊張度が少なくて済むだろ。それと、勢いをつけるためだ。他人の試合とかを見ちまうとどうしても体が硬くなるからな」

「ふふつ、そうかもね。僕だったら一番最初に手の内を晒す事になるかもしれないから、ちよつと考えがマイナスに入ってたかも」

「……まあ、手の内を晒すって言っても俺の『奥の手零落白夜』は全校生徒に知られてるからなあ……」

「……あ、あはは。そうだったね」

微妙な空気になる。……一言余計だったか、と考えてこの空気をどうにかしようとしたとき、モニターがトーナメント表へと切り替わった。一組目は誰と対戦だ？俺達

「——え？」

画面へと表示された文字を見て、俺とシャルルは同時にぽかんとした声を上げた。

——なぜなら、一回戦の対戦者はラウラ、そして第のペアだったからだ。

第17話 The surprise came. (後書き)

あれー？ここまでナターシャをかわいく書こうとしてたわけじゃ無いんだけどなー。あれー？

次回は決着かな？

……大ッ嫌いな戦闘シーンだ！よし！地の文多くするぞー。
それと境界線上のホライゾンアニメ化おめでとう。ずいぶん前の話ですが。

第18話 ラウラ・ボーデヴィツヒ（前書き）

すいません。ゴールデンウィークだというのに投稿が滞っております。

これも実況プレイ動画なんて作ってたせいだ。

第18話 ラウラ・ボーデヴィツヒ

「ふん、まさか一回戦で貴様と当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そいつは重畳。……こつちも同じ気持ちだ」

空間投影型ディスプレイが空中に数字を描く。試合開始まで後五秒、四、三、二、一、————試合、開始。

試合開始とともに即座に行動を起こす。今すべき事は相手のリズムを崩し、自分のペースに持って行くことだ。————征くぞ。

じゃこん、と薬室に初弾が装填された音が聞こえる。

「————三十六計逃げるにしかずってなあー!!」

そこで俺が取った行動は、逃げるだった。

ラウラが放ったレールカノンでの砲撃を機体を跳ね上げるように回避する。連射されるそれをスラスターを連続噴射することで避ける。

————おわあ! 掠ったあー!

「わははははは! 当ててみやがれー!!」

「くっ! ちょこまかと!」

砲弾が風を切り、こちらを穿とうと迫る。

ぴりぴりと肌を刺激する着弾音は自分に当たっていないとはいえ、一瞬だが体が硬直してしまう。呼吸は緊張のせいで荒くなっている。正直、怖い。その恐怖を掻き消すように、叫ぶ。

「ああああ！ばかすか撃ちやがってえ！愉しそうだなオイ！」

「貴様……！避けてばかりなど、情けなくないのか！教官の弟として！」

レールカノンが弾切れを起こしたらしく、手首の辺りからプラズマブレードを展開して斬りかかってきた。それに合わせて雪片を展開しそれを防ぎ、鏑迫り合いの体勢に持ち込んで言い放つ。

「……情けないに決まってるだろうが！」

「——ふん。駄犬が、少しはまともなことを言つかと思えば。その思いを抱いたまま墜ちろ」

すう、とラウラの瞳が細められ、それが発動する。

足が、腕が、体が、まるでその空間に固定されてしまったかのように動かない。気付いたときには身動きひとつ出来なくなっていた。

完成停止能力、エネルギーを空間に作用させて物理運動、それに伴う慣性などを停止させる能力だ。

それを発動させたまま、右手のプラズマブレードを——

ダパアンツ！！

炸裂するような音とともにラウラが仰け反る。その一撃を放ったのはオレンジの機体。

「——お待たせ！一夏！」

「さんきゅ！助かった。箒は？」

「そこでお休みしてるよ」

シャルルが指さした方向をみると、悔しそうに膝をつく箒の姿があ

った。まだ始まってから数分しかたっていないのに、大した物だ。

「さすがだな」

「褒めても何もでないよ？」

そう言って両手に装備していたショットガンを捨てて、新たにアサルトライフルを装備する。

「シャルル、すまんが一对一^{サシ}でやらせてくれ」

「……………」

「どうしてもあいつに言わなきゃならないことがあるんだ」

「……………はあ、危なくなったら助けに行くからね？」

ため息を一つ吐いて、行くことを許してくれた。本当に良いパートナーだよ、シャルルは。

「……………待たせたな、ここからは俺とお前だけの舞台だ」

「ふん、御託は良いからさっさと掛かってこい」

「そうです、かぁッ！」

瞬時加速、一気に距離を詰めて雪片で斬りかかり、叫ぶように言葉を発する。

「ラウラぁ！お前は俺に『情けなくはないのか』って言ったよなぁ
！」

ギャン！

「それがどうした！」

ギーン！

「お前こそ情けなくはないのか！お前が千冬姉から教わったことは、自分より弱い者を叩き潰すためのモノか？！」

ガギャン！

「……くっ！黙れ！」

ギャリン！！

体ごと押し込むようにスラストの出力を上げて、鐔迫り合いの状態から少しずつ押し込んでいく。

「……誇りはねえのかよ！テメエの頭ん中には！！」

「——ぐ、あぁッ！」

雪片を力チ上げるようにしてラウラの両腕を跳ね上げる。そのまま返す刀で『零落白夜』を発動、逆袈裟に斬り上げた。そのまま地上に落下していくラウラを見ながら呟く。

「まったく、お前が何になりたくてこうなったかは知らないけどよ。お前はお前でしか無いだろうが。………昔の俺を見てる気分だったよ、畜生」

不思議な感覚に支配された空間。そこに私は漂っていた。
そこにはもう一人、先程まで戦っていた男が居た。

……強さとは、何なのだ？

『強さって言うのは、自分を自分と認めることだ。と俺は思っ』

……そう、なのか？

『当たり前だろ、自分がいたい何がしたいのか。自分は何なのか、それが分からねーやつは強い弱い以前にどこに進めばいいのかしらねーもんだろ』

……自分は、何なのか……。

『誰かを目標にするのは良いことだ。だけどさ、いくらがんばってその誰かになろうとしたって、無理だ』

……ならば、どうすればいいのだ？

『さっき言っただろ、自分を自分と認めることだ。俺はそうやって強くなるうと思っ』

……強くなって、どうするんだ？

『自分の大切な人を守る。それだけだ』

それは――まるで、あの人のようだ。教官

『そうかもな。でも俺が憧れていたのは――』

……誰、なんだ？

『蓮兄、かな。千冬姉に強さと言うことを教えた人だからな』

……そう、か。

『だからさ、この事をお前が覚えている限り、俺はお前を助けてやるよ。自分が誰か分からなくなったら、俺に聞け。』

少し気恥ずかしそうにこめかみを掻きながら言った。

『俺が、ラウラ・ボーデヴィツヒのことを覚えていてやるから』

ああ、こいつは。こいつは、私を私として見てくれる。
その事実、心臓は早鐘を打ち、収まる気配を見せない。

――ああ。これは、惚れてしまった。

戦いの終わったアリーナの上空で、紫電を纏い姿を現した一機のI
Sがあった。

『VTシステム、起動は成らず。情報収集は完了。帰還する』

その機体は、また宙に溶け込むように、姿を消した。

第18話 ラウラ・ボーデヴィッヒ（後書き）

原作での一夏くんのトドメのさし方が気に入らなかったのでもう少しありました。

こういう所を自由に変革出来るのが二次小説の良い所だと思います。戦闘パートが苦手でした。地の文増やすとか言っただけであんまり出来てない。

あとHOUKIさんマジKUKI。

感想、指摘お待ちしております。

第19話 抱き枕（前書き）

今回は自分の妄想が大爆発した回。反省もしていないし後悔なんぞするわけがない。

どちらかというと満足している。

それを考慮して閲覧してね！

よく考えると三巻に突入しているんですねー

第19話 抱き枕

「つ、疲れ、たあ……………」

部屋に戻り、疲労によって悲鳴を上げる体をベッドの上に投げ出す。本当に今日は疲れた、とネクタイを緩めながら声に出さずに呟いた。それにしても色々ありすぎた。今回の学年別トーナメント、準備も疲れたが何より疲れたのは後片付けだ。たとえるならば――

―そう、文化祭の後片付けのダルさだ。準備はまだ楽しいが、片付けとなるとまた別だ。

それはそうと、一夏とシャルルのペアがトーナメントを勝ち抜き、ついには優勝した。俺自身、まさか優勝するとは思っていなかった。のでかなり驚いた。

それに、あの千冬が「よくやったな、一夏」と褒めたのだ。まあ、言った後に照れくさそうにしていたのだが。

そんなことを考えていると、ジワジワと眠気が襲ってきた。押し寄せる眠気に逆らうことなく、俺は目を閉じた。

後片付けも終わり、ラウラの様子を見た後に部屋に戻ると、蓮がベツドで寝ている姿が目に入った。

「着替えもせずに、余程疲れていたようだ……」

ネクタイを緩めただけで寝入っている姿に近寄り、額に張り付いている髪を指で除けてやる。

いつもは鋭い目つきも、楽しそうな笑みを浮かべている口も、今はリラックスしてあどけない表情を見せている。

ふと、何を思ったかベッドに腰掛け、蓮の頬に手を這わす。ゆつくりと、頬を撫でていた手を、首を伝ってシャツがはだけた胸元へと下ろしていく。手のひらに感じる、鼓動。

そうして、ゆつくりと顔を近付けていく。

あと、数センチで唇が触れる、そう思ったときに寝ぼけ眼でこちらを見つめてくる蓮淨と目が、合った。

「ち、ふゆ……?」

「……っ!」

慌てて体を起こす。

しかし、蓮が腰に手を当てて引っ張ってきた。バランスを崩し、倒れ込む。

そのまま、蓮が背中に手を回してくる。すると、私は蓮の胸に納まるような形になっていた。

「っ!?!あ?!え?!」

混乱しながら、そおつと顔を上げて蓮の顔を見る。
すると――

「すー……」

寝ていた。完膚無きまでに熟睡していた。

（つまりアレか、寝ぼけていて枕を抱きしめるように私を抱いた、と。……この朴念仁に何かを期待した私が馬鹿だったということか）

頭の中で結論を出し、少し残念そうな表情を浮かべて自身を抱きしめる腕から逃れようとする。

「……む？」

ぐいぐい

「……む」

ぎゅー

「……抜け出せん」

こちらを抱きしめる腕の力が予想外に強く、抜け出すことが出来ない。こちらも力ずくならば抜け出すことも出来るだろうが、起こしてしまいそうだから、やめた。

まあ、こういう時ぐらいいは、良いのだろうか。

そのようなことを思いながら、その胸に額を押し当てた。

翌朝、俺はベッドの上で冷や汗を流していた。

朝起きると、千冬が隣ですやすやと寝息を立てているのだ。いや、隣ではなく、俺の腕の中でなのだが。

そして現在、俺は動けずに冷や汗を流している。

これからどうすればいいんだあ！さ、三択にすべてを賭けてやる！

？ 起こさないように体を動かして脱出↓この体勢では確実に起して殴られる。

？ 優しく声を掛け起こす↓殴られて俺が眠るハメに。

？ このままでいる↓起きた時に殴られる。

……………全部結局殴られる———！

戦々恐々としてしていると、千冬が腕の中でもぞりと動く。その行動にふと、既視感を得た。

……………ああ、懐かしいなあ。昔はよく千冬と束と一緒に昼寝してたなあ。起きる頃には何故かそれぞれの布団を抜け出して俺の左右の腕にしがみつくように寝ていたのだけれど。

———そんなことを想っているうちに千冬が目覚ましている———！？

＼（＾０＾）ノオワタ

おそつて来るであろう衝撃に身構えていると、消えそうな声で千冬がこちらにしゃべりかけてきた。

「れ、蓮……そろそろ、放してほしいの、だが……あう………」

「あ、すまん………」

「………あつ」

腕を放すときに上げた千冬の声が少し残念そうに聞こえたのは、気のせいだったのだろう。

その後に、妙に気まずい雰囲気になってしまい、何故に俺と一緒に寝ていたのかは聞き出すことが出来なかったのだが。

シャワーに入った後に新しいワイシャツに着替えながらあることを思い出す。

——七月頭にある校外実習、その準備のことを。校外実習といっても、いわゆる臨海学校のことなのだが、初日は一日丸々自由時間なのだ。まあ、海で遊ぶのだから水着が必要だが、海に行つたのは記憶にあるだけでも八年前。水着などもうどこにあるか分からない。

俺達教師はトーナメントのせいで準備など出来る状況ではなかったのから、おそらく千冬も用意は出来ていないだろう。

「なあ、千冬」

「なんだ？」

「付き合ってくれないか？」

「………買物にか？」

「おう。臨海学校の準備も兼ねてな」

何故か千冬はため息を吐いた。……俺、なんか気に障ること言ったか？

「……週末になるな。それで、どこに行くんだ」

「あー、『レゾナンス』でいいだろ？」

「私はどこでも良いのだが……」

「あ、そうだ。ついでに真耶も誘おうぜ。あいつも準備してないだろうし」

「……………」

なんでそこで不機嫌そうになるんですか。

「……私は先に行っているぞ」

「あ、ちよつと待ってくれよ！」

そう言って、部屋から出て行った千冬を追いかけるように部屋を後にした。

——さて、今日も一日がんばりますかね。

第19話 抱き枕（後書き）

異常なテンションのまま一日でこれを書けたことに少しびっくりしている。

次はおそらくショッピングの場面になると思われます。

ふふふ……！三巻は一番ネタに困らない巻でしたよ……！

妄想メモでA4用紙二枚消耗するぐらいの熱いsyodoが俺を突き動かしたのだああっ！

………ふう。そう言えば執筆時にBGM聞してる人ってどれだけいるんだろ……。

自分が書き終わった時に流れていた曲は「せつなさよりも遠くへ」でした。

………なんか選曲が古いな。

感想は瑠偉の貴重な栄養源となっております。

ヒロインのデレはこんなのが良い！っていうのがある人は一言コメントください。

でも誹謗中傷だけは勘弁な！

第20話 今日は楽しいショッピング〜前編〜（前書き）

一ヶ月近く更新せず、誠に申し訳ありませんでした！
うう、一週間に一話は更新しようってきめてたのに……。

第20話 今日は楽しいショッピング〜前編〜

「……暑い」

週末の日曜日。天気は憎たらしいほどの晴天。

IS学園の校門で俺は人を待っていた。

ジーンズのポケットに入れていた煙草の箱を引っ張り出して一本口に銜える。銘柄は『焰^{ほむろ}』。最近は置いてある店が少なくなってきた一品である。

キンツという音を響かせてジッポライターのフタを跳ね上げ、着火する。

「……ふー。それにしても遅いような気が……」

そう言いながらぼんやりしていると、寮の方から歩いてくる二人が見えた。

「す、すいませ〜ん！遅くなりました〜！」

「待たせたようだな。すまん」

「いや、そんなに待つてないぞ」

銜えていた煙草を靴の底にこすりつけて火を消し、携帯灰皿に放り込む。

「あれ？千冬はこの前買った服は着ないのか？」

「む？あ、あの服は……」

今日の千冬は、この前買った服ではなくカジュアルなスーツ姿だ。休みの日なんだからもう少し楽な格好でいた方が良さそうなのにな。

「蓮浄さん、そろそろ行かないとモノレールに間に合いませんよ?」
「おう、確かにそうだな。んじゃ行くか」

そう言つて千冬と真耶を連れて駅へと向かった。

モノレールを降りて駅の構内を進んでいくと、人が増えてきた。まあ、今日は日曜日。人が多いのは当たり前か。

「さて、まずは何を買うんだ?」

「水着だな」

「水着ですね」

「そっか、俺も水着を買うつもりだったから丁度良い。確か、二階だっけ?」

レゾナンスに入り、エスカレーターを使用して二階へと向かう。

「それにしても海なんて久しぶりだよなあ。確か千冬達といったのが最後だっけ?」

「ああ、そうだな。……正直、あまり思い出したいことではないの

だが」

「そうだよなあ……………」

……………確かに、あの時は正直良い思い出はあまり無い。なぜなら、夏休みの午後にだらだらとしているといきなり束が「そうだ！海行こうよ海！」と言いだして、束お手製のよく分からない飛行機？で沖縄まで行ったのだ。所要時間は18分。ただ記憶にあるのは、体が鉄板でゆっくり押し潰されるような加速と、その加速の中でリバー^吐スして大惨事になった英太の姿だけである。到着したあとに呆然と海の前に突っ立っていたような気がする。

「……………一体何があったんですか？」

「……………一言で言うと天災の仕業かな」

「？ 天才？」

「うん、分からなくて良いと思うぞ」

昔話をしながら歩いていると、いつの間にか水着売り場に到着していた。

「んじゃ、俺はさっさと買ってくるからここで待っててくれ」

「蓮、私達も付き合うぞ」

「ばーか。男の水着なんぞ選んだって面白くも何ともないだろ。すぐ戻るから待ってる」

「む、分かった」

まあ、選ぶと言っても最近の流行には詳しくないから普通のモノで良いか。そのようなことを思いながらトランクスタイルの水着が置いてあるコーナーへと向かう。

ふむ、トランクスタイルでも色々あるんだな。水着を引っかけているハンガーをガチャガチャと揺らしながら視線を動かしていく。

「お？」

一つ、目に留まった水着があった。色は黒、サイドに白のラインが入ったモノ。

—— うん、俺のIS黒騎士とカラーリングが同じだな。

下手なモノを買うよりかは無難にこれで良いか。と結論付けて、購入するためにレジへと向かった。

「……………ところで千冬、真耶。私はなぜ女性用水着売り場に居るのでしょうか？」

「私達の水着を選ばせるためだ」

「なるほど、何で俺がここにいるかは理解できた。しかしなぜ俺が選ばなきやならないんでしょうか千冬さん」

「嫌、ですか？」

「…嫌じゃあないさ。……………あーもう！そこで泣きそうな顔すんな！」

真耶の頭を髪を混ぜるように撫でながら、ため息を吐く。

「はあ…、あまり俺はセンスの良い方じゃない。それでも良いか？」

「…これ、蓮浄さんの選んだものならなんでも良いです！」
「へえ。じゃあ気合い入れて選ばないと駄目だな」

そう言っただけで周りの水着をぐるりと見回す。っあー……駄目だ、なんか酔いそうになった。何でか知らないけど間違えて女性用下着売り場に迷い込んでしまったかのような気まずさが――！
落ち着け俺、と頭を振ってもう一度周りを見て、ある一つを手にする。

「これ、ホルターネックって言うんだっけ？リボンとか付いてて可愛いし、真耶に似合うんじゃないか？」

色は緑で胸元と両腰にリボンがあしらわれたデザイン。真耶はスタイルが良いから似合うだろうな。

手に取った水着を見ながら、真耶は何故か顔を赤くしていた。何で？

「次は千冬か。うーん……。この二つで、どっちかな」

手に取った水着は、一つはメッシュ状にクロスした部分がセクシーな黒水着。

もう片方は、無駄が無い機能性重視の白水着。

どっちもビキニなんだが、雰囲気的に千冬はワンピースタイプとかよりもこのタイプが良いだろうな。

「そうか、それでは一度試着してみるか」

「あれ？試着ってできるのか？」

「はい、出来ますよ。もともと、女性だけですけど」

「そうなのか。……何というか、女性優遇制度もこんな所まで浸透してきてるんだな」

真耶に聞くと、女性が一度試着した水着は店員が回収してクリーニングするらしい。贅沢だなおい。

「む？人が入っているようだな」

試着室のドアをみると、鍵が掛かっている表示がされていた。

「どうする？少し待つか？」

「ああ。サイズが合っているかどうか確かめなければならいかな」

そう言っていると、試着室のドアが開いた。

「え？」

「えっ？」

「ええっ?!」

その扉を開いたのは、一夏で、試着室の中には水着姿のデュノアが。

「なにやってんだ、一夏？」

「何をしている、馬鹿者が……」

次の瞬間、パニックに陥った真耶が悲鳴を上げたのだった。

第20話 今日は楽しいショッピング〜前編〜（後書き）

原作につなげるのが難しいですね！いやもうマジで。

一回書いていたのが消えたせいで気分が萎えて萎えて……。

次回は後編になります！

感想、指摘お待ちしております！

フウハハア———！

第21話 今日は楽しいショッピング〜後編〜（前書き）

遅くなったあゝ！

今回は少し長めです。

第21話 今日楽しいショッピング〜後編〜

「水着を買いに？けどなあ、試着室に二人で入るのは駄目だよ」

「うっ、すいません……」

ぺこりと頭を下げる一夏とデュノア。

「ところで東雲先生達はどうしてここに？」

一夏が露骨に話題をそらした。まあ、疑問点を解消するため、というもあるのだろうが。あ、ナイス俺とか思ってる顔だ。一発殴っておこう。

「痛い！？何で殴ったんだよ？」

「俺達も水着を買いに来たんだよ。殴ったのは単に顔がイラっとしたからだ」

一夏が頭を押さえて恨めしげにこちらを睨んでくる。

「一夏、お前と一緒に買い物に来た奴はデュノアだけか？」

「？ そうだけど？」

「……………向こうの柱の陰、見てみる」

「え？」

一夏がふりむいたその先に居たのは、鈴とオルコットだった。慌てて鈴達は隠れたが、鈴のツインテールがはみ出ている。

「……………何やってるんだ？二人とも？」

「あ、アンタが説教されてたから出てくるタイミングを計ってたの

よ！」

「そ、そうですね！」

ようやく柱の陰から二名登場。

「はあ……、さっさと買い物を済ませて退散するでしょう」

それを見て、ため息混じりに千冬は呟いた。まあ、無理もないか。いつも通りといえばいつも通りなのだが。

「あーあー。私買い忘れがあったので行ってきます！場所が分からないので蓮浄さん、ついてきてください。デユノアさん達も」

「え？別に良いけど千冬達も——」

「いいんです！行きましょう！」

真耶には珍しく、強引に俺と生徒三人の背中を押すようにその場から去った。

その場に残されたのは俺と千冬姉だけで、変な沈黙が数秒間流れた。

「……………気を遣われたのか、抜け駆けされたのか。まったく……………」
「え？」

「……………気にするな。気を遣われた、と言うことにしておこう。一夏」
「な、なんでしょう？ 織斑先生？」

久々に下の名前で呼ばれたせいか、どうもぎくしゃくとした反応を
してしまった。その様子を見て、千冬姉は苦笑いを浮かべた。

「今は就業中ではないから、名前で良い」
「わ、わかった」

姉弟水入らず———ということなのだろうか。山田先生の気
の遣い方はよく分らん。というか他意があったような気の遣い方
だったな。

「ふむ———、一夏。どっちの水着が良いと思う？」

そう言って千冬姉が見せたのはハンガーにかけられた二着の水着。
黒ビキニと白ビキニ。ざつとどんな形状をしているかを一通り見る。

「黒の方」
「……………即答か」

何故か千冬姉は半眼でこちらを眺めていた。何で？

「ちなみに聞いておくが、何故黒の方を選んだ？」
「どうせそれ蓮兄に選んで貰ったんだろ？ だったらセクシーな水着

の方が良いだろ。蓮兄は鈍感だからな」

一瞬こちらのことをあり得ないモノを見るような目で見てきたが、いきなり顔を赤くして慌てふためき始めた。

「ちょ、ちよつと待て。一夏、私がお前にその、なんだ、そういうことを言ったことがあったか!？」

「はっはっはっは。態度でモロバレですよ？」

「……なん、だと？」

うん、蓮兄が他の女と一緒にいたら隣にいる俺が失禁しかけるほどの殺気を振りまいたりしておきながら気付かれてないと思っていたんですね。あはは、アホか。

ドゴン

「あぐあ——ッ!？」

「失礼な……！大体、お前の方はどうなんだ!」

「うぐおお……！お、俺？何が？」

「何が？じゃないだろう。お前は彼女を作らないのか？幸いお前は人気者だ、その気になればすぐだろう?」

……わあ、棘の混ざったお言葉！まださっきのこと少し根に持っているよ。つか、さっき俺は口に出した訳じゃ無いのに何で分かったんだ。読心術？

「そうだな……。ラウラなんかはどうだ?……色々アレな部分もあるが、一途な奴だ。容姿だって悪くはないだろう?」

「いや、それは……」

「それに、キスした仲でもあるんだろう?」

「ぐ…！い、いやそれは――」

「ふ、まんざらでもないか？」

「う、なんつーか、よくわかんねーっていつか……」

「ふむ、そうか。じゃあ、容姿は好きな方か？嫌いな方か？」

「あー、まあ、可愛いと思うよ」

「ほう」

「ラウラは可愛いよ――――って、何この誘導尋問！？」

「勝手に言ったのはお前だろう」

ぐああああ！微妙に知られなくなかった事を知られたー！しかもラウラのことを話していると千冬姉の表情が苦笑から微笑（慈愛）に変わって行ってるんだもの！

「私は私でしつかりするさ。まあ、私のことを心配する前に自分の方をどうにかしろ」

「あーもう、分かった。変な心配はしない。これでいいだろ？」

「ああ、それで良い」

最後にニヤリとした笑みを浮かべて、千冬姉はレジの方へと歩いていった。

時間は少し前に遡る。

鈴・セシリアとともに一夏追跡トリオを組んでいたラウラだったが、
乙女心ブレイカーどうもいつも通りの一夏だということに気が付き、鈴とセシリアから離れて、水着売り場へと移動していた。

（ふむ。そういえば私も水着を持っていなかったな）

しかし、学校指定の水着で良いか、と考えるラウラ。

ちなみに、IS学園の指定水着はスクール水着である。色は紺と白、二種類から選べる仕様になっている。ちなみにオプションとして名札つき。

ただそこにあつたから見た、と言った感じで水着の列を眺めるラウラだったが、次の瞬間その白い肌が赤く染まった。

「ラウラは可愛いよ」

いきなり、一夏の声が——その言葉が聞こえたのだ。

どうも千冬と二人で会話をしているという所までは把握していたのだが、会話の内容まで意識していなかった所への不意打ちである。

「あつ……………」

突然の言葉に顔は紅潮し、心臓の動悸は収まるどころかさらに速くなっていく。

そこには、ドイツの冷水と呼ばれたラウラの姿はなく、ただの恋する乙女がいた。

ラウラは、意味もなく周囲を見回してから、何度もコールする番号を間違えながら携帯の特殊回線を開いた。

同時刻、ドイツ国内軍施設。そこでは現在、IS配備特殊部隊『シユヴァルツェ・ハーゼ』――通称、『黒ウサギ部隊』が訓練を行っていた。

「何をしている！現時点で三十七秒の遅れだ！急げ！」

そう怒号を飛ばしているのは副隊長であるクラリッサ・ハルフォーフだった。部隊の中でも初期にナノマシンを移植された人物であり、面倒見が良く『頼れるお姉様』でもある。

軍服の胸ポケットに入れられていた携帯が着信を知らせる。スクリーンに表示されている番号は、緊急事態時の暗号通信だった。

「――受諾。クラリツサ・ハルフォーフ大尉です」
『わ、私だ……』

聞こえてきたのは、定時連絡などで聞き慣れた隊長の声。しかし、その声は妙に落ち着き無く揺れていた。

「隊長、何か問題でも発生したのですか？」

『あ、ああ……。とても、重大な問題が発生している……』

その様子からただごとではないことを感じ取ったクラリツサは、訓練中の隊員へと『訓練中止』のハンドサインを伝える。

「部隊を向かわせますか？」

『い、いや、部隊は必要ない。軍事的な問題では、ないのだ……』

「では？」

『そ、そのだな。わ、わ、私は、可愛い……らしいぞ？』

「………はい？」

あまりにも意味不明な事態に、クラリツサの声は若干間の抜けたモノへと変わっていた。

『い、一夏が、そう、言っていて、だな………』

「……ああ、隊長が思いを寄せているという彼ですか」

はあ、とため息をついて言葉をつなげる。

「羨ましいですね………」

『う、うん？なにがだ？』

「好きな人のそばにすることが出来て、その上可愛いなどと言われるのですよ？……羨ましいです」

『……う、クラリツサ、少し待て』
「はい？」

通信をいきなり保留にされた。こちらの返事も聞かずに、だ。
しばらくすると、通信が再開した事を知らせる音が鳴り、状況を再度把握しようとした時――。

「隊長、どうしたの――」

『あー、クララか？』

「にやあ?!」

携帯のスピーカーから聞こえてきた声は、ラウラのものではなく、
愛しい人の声であった。

『……クララ、だよな？』

「はい！IS 配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』所属、クラ
リツサ・ハルフォーフ大尉であります!？」

まさか、こんな所で、声を聞けるなんて。

『ははは、変わってないな。元気か？』

「は、はい！こちらの方は何も変わっていません!」

『そっか、そりや良かった。』

「そちらは色々と大変そうですね……」

『確かになあ、でも楽しいぜ？人に教えるのは』

「そうですね……。あ、あの、いつかそちらで休みが取れたの
なら、もう一度ドイツに来て頂けませんか？……隊員も、皆会いた
いと言っていたので」

『お、いいなそれ。こっちで休みが取れたら連絡するよ』

「は、はい！よろしく願います!」

数分後。そこには、通信が終わった後、しばらくの間携帯を胸に抱いて惚けているクラリッサの姿があった。

第21話 今日楽しいショッピング〜後編〜（後書き）

クラリッサとのやりとりの所は極神さんにネタ提供して貰いました！
ありがとうございます！

でも最後あたりは首が凝りすぎて意識朦朧としながら書いたからg
dgdだなあ……。

ネタ提供はいくらでも受け付けますので、コメント、感想等を一言
くれると喜びます！

A n o t h e r S t o r y } G i r l w h o h a s n a m e o f

三卷のプログレ的な。

わたしの周りを取り巻く世界は狭く、空も閉ざされた。

お姉ちゃんを助けるためとはいえ、こんな所にひとりでいるのは、嫌だよ。

だれか、たすけて。

皆との繋がりも無くなり、戦いたくなんてないのに、戦わなきゃいけない。

その体を縛る鎖は、重く、わたしを縛り付けるには十分だった。

俯きながら泣き続ける少女は、ひとり静寂の満ちた教会に取り残された。

——その白銀に輝く教会に、鐘は鳴る。福音ただ、ひとりの少女を残して。

A n o t h e r S t o r y \ G i r l w h o h a s n a m e o f

タイトルで分かったお方もいると思いますが……

第22話 今日から臨海学校！（前書き）

どうも、一度消えたデータを泣きながら書き直していた瑠偉です。

今回は短めになっております。

第22話 今日から臨海学校！

「海っ！見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの子が声を上げる。陽光を反射する海面が少しまぶしく、手で影を作った。

「おお、海だなあ……」

「そ、そそそそそうですね！」

「……………」

「……………」

バスで隣の席になったのは真耶だった。出発してからずっとこの調子である。正直やりづらい、何でこんなにテンパってるんだよ。がちがちに固まっている真耶を横目に見ながら、そっと嘆息する。

（俺なんかしたっけ？）

窓の外は、ただ穏やかな潮風が吹いていた。

それからしばらくすると目的地の旅館に到着した。四台のバスからIS学園一年生がわらわらと出て来て整列する。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」
「……よろしくおねがいしまーす」「……」

千冬の言葉の後、全員で挨拶する。そのあとに生徒達に諸注意、予定等を伝えた後に解散となった。

女子達が旅館の中へと向かっているのを見て、あることを思い出す。

「そう言えば千冬、俺の部屋って教えられてないんだけど」

「ああ、その件か。……織斑、こっちに来い。話がある」

「あ、はい」

同じクラス的女子と話していた一夏を呼び寄せる。

「織斑と蓮、お前達は私と同室になった」

「え、何ですか？」

「え、何で？」

「……本来なら男同士のお前達が同室になる予定だったのだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってだな」

はあ、と本当に面倒臭そうなため息を吐いて千冬が続ける。

「結果、私と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれと近づかないだろう」

「あー……、なるほど……」

虎穴に入らずんば虎児を得ず。とはいえ、俺達程度のために鬼の寝床に入ってくる奴はいないだろう。……鈴とかラウラは入ってきそうだが。

「こんな所で話しているのもあれだしな、荷物置きに行こうぜ」
「そうだな」

移動していると、目立ちすぎず周りのものを引き立てる装飾が目に入る。しかも内装は最新設備がしっかりと融合している。
というか、エアコンの吐出口が見あたらないぞ。すげえ快適な温度なのに。

「ここだ」

「うおー。すげー」

俺達が泊まる部屋は、二人部屋というのに広々とした作りの和室だった。なるほど、この広さならば三人でも大丈夫だろう。
うわ、ここバスまで付いてるのか。襖を開けたらセパレートタイプのバスってすげえシユール。

「一応、大浴場も使えるがお前達は時間交代だ。本来なら男女別になっているが、何せ一学年全員だからな。お前達二人のために他の生徒が窮屈な思いをするのはおかしいだろう。よって、一部の時間のみ使用可だ。深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使え」

「わかった」

「わかりました」

顔なじみがそろって言うのに千冬は真面目だよなあ。

「今日は丸一日自由時間だ。荷物も置いたし、好きにしろ」

「えっと、織斑先生達は？」

「俺達は他の先生との連絡やら確認やら色々あるんだよ」

「分かりました。それじゃあ、早速海にでも」

「おう、気をつけろよ」

「羽目を外しすぎんようにな」

一夏が部屋を出て行くのを見届けた後、千冬と二人きりになる。

「千冬、仕事が終わったら海に行くか？」

「……まあ、少しくらいは泳ぐとしよう」

「おう、せっかく水着選んだんだしな」

すると、千冬の動きが停止ボタンでも押したかのように止まる。

「……見たいのか？」

「え？何が？」

「……見たいのかと言っている」

「あ、水着のことか？そりゃ見たいさ、絶対千冬に似合うと思って選んだんだからな」

「っ、そうか……」

千冬が俯いて何かを呟きだした。よく聞けば途切れ途切れに「ずるい」やら「不意打ちだ」と聞こえてくる。

………なんかしたっけ？

ぎしり、と音を立てて私の世界が歪んでいく。

あ、だめ。このままじゃ、おねえちゃんが。

先程まで全身に行き渡っていたはずの意識が緩やかに喰われていく。

たすけなきゃ。

無理矢理空を閉じ、世界を独立させていく。

わたしはどうなってもいいから、たすけなきゃ。

そうして出来上がったのは、一つの牢獄――

第22話 今日から臨海学校！（後書き）

次回は待ちに待った海・うみ・UMI！
うふふふふふふふ！たのしみだなあ！

感想、指摘等ありましたらよろしくお願いします！

機体設定（前書き）

「んあ？設定い？今更だなオイ」

瑠偉「いいんだよ。今更なのは自覚してるから」

「駄目じゃね？ご主人のもテキトーだしよ。もうちょいがんばれよ」
瑠偉「……………うん」

機体設定

『黒騎士』第一形態

蓮淨の専用機。

機体自体は第一世代の中でも初期に開発された機体。

機体名称からも解るように、コアナンバー001『白騎士』の姉妹機。ちなみにコアナンバーは002である。

機体特性としてはスラスター等が強化された強襲用の機体であり、瞬間的な加速では『白式』を上回る。

そのほかにも、束によって様々な強化、改造が施されており性能的には2、5世代程度のスペックを誇る。

外観は黒一色で統一されており、脚部装甲などの側面に銀色のラインが走っている。形状は所々『白式』に似通っている部分がある。

背部には高出力ウイングスラスターが二つある。両肩には西洋の楯を模したシールドユニットが装備されている。

主武装はISを装備した蓮淨を上回る長大な突撃槍^{ランス}。元ネタは武装錬金のサンライトハート（友人Tがネタ提供を）。

突撃槍の内部には色々と内蔵されているらしい。

『黒騎士』第二形態

・名称 ？？？

機体設定（後書き）

新設定等が追加されれば、加筆します。

第23話 奴が来る（前書き）

どうも、PCが落雷でトンでガチ泣きした瑠偉です。
みんな！停電には気をつけようぜ！

第23話 奴が来る

時刻は昼前。スケジュールなどの話し合いが終わった俺は、千冬を連れて更衣室へと向かっていた。

「んじゃ、俺着替えてくるわ。入り口の所で待ってるよ」

「ああ、わかった」

水着を着て、日除けのパーカーを羽織る。男の着替えなんて速いモノだ。二分もあれば忘れ物の確認だって出来る。

入り口を出た所で待っていると、ふと目に付くモノがあった。何故か地面からウサミミが生えている。おまけに『引っ張ってください』との貼り紙付きである。

こんなモノを仕掛けてくるのは一人しかない。

「すまない、待たせたな。……………なんだこのウサミミは」

「俺に聞くなよ。ていうかどう見ても束だろ」

お互いに顔を見合わせて同時に言った。

「無視しよう」

その場を離れようとすると、キイインという何かが高速で向かってくる音がした。

『ちーちゃああああん！れんくうううん！』

「やかましい」

こちらへの直撃コースで向かってきた謎^束の飛行物体を千冬が部分

展開した野太刀の峰で殴り飛ばす。わあ、容赦ねえ。

『うにゃあああああ！？それはひどいんじゃないかなあああああ
ああ？！』

快音。まるで逆再生されるかのように青い空へと吸い込まれていく謎の飛行物体。というか束。

「行くぞ、蓮」

「お、おう。いいのかアレ？」

「そう簡単に死ぬ奴でもないだろう」

「……ま、そうだな」

「それに、いつものことだからな」

「いつものことだな。うん」

どうせあの変な飛行物体にはISの技術を応用した何かが仕掛けられているのだろう。そう納得して海へと向かった。

近くにいた生徒のこちらを見る目がおかしいが気にしないでおう。

砂浜に着くと、一夏がデュノアと話しているのを見つける。

「おい、一夏あゝ」

「蓮兄、泳ぎに来たんだ？」

「おう、久しぶりに遠泳しようぜ」

「……今さつき鈴とやったばかりなんだけど。さすがに連続はキツイ」

「んじゃビーチバレーでもしようぜ」

「んー、それもシャルとやったばかりなんだよな」

「それじゃあスイカ割りでもしようよ」

「それいいな。あ、スイカはどうする？」

「えへへ、束さんがちゃん準備してあるよっ！」

束がその手に持っていたのは、丸々としたスイカだった。なんだか久々にスイカを見た気がする。ここ数年はずっと海外にいたからなのだが。

うん？なんか違和感があるぞ？

「束———?!」

俺と千冬が同時に叫ぶ。いやなんでここにいるんだよ今さつき空の彼方にぶっ飛んでたのに?!

束だから仕方ない。頭の中にこの言葉が浮かんでくる。………まあ、束だしなあ。

「ふっふっふ！さつきは本気で死を覚悟したよちーちゃん！」

「何でここに来た。現在ここは関係者以外立ち入り禁止になっている」

「だってひまだっ」

めしり

「割れる割れる割れる?!ちーちゃん!愛が!愛が痛いよ!」

「割れてしまえ」

束が言い終わる前に神速のアイアンクローを決めた。……何と
うか怒気が溢れすぎて周りの空間歪んでますよ、千冬さん。それ
あと数キロ力を込めたら束の頭がスイカ割ったみたくなっちゃうか
ら。

「まあまあ、それぐらいにしておいてやれよ。本当は何しにきたん
だ?」

「え?さっき言ったとおりひまだっ」

「よし千冬割っちゃまえ」

「あ、ちよつと待って止めてアツー!」

第23話 奴が来る（後書き）

ここからオリ展開がちよくちよくと入ってきます。

第24話 Moon River（前書き）

タイトルに特に意味はありません。

あえて言つとすれば執筆中に聴いていた曲です。

最初は若干シリアス？

第24話 Moon River

あの後、俺達は普通に遊んで一日を終わらせた。……まあ、泳いでいる時に千冬のトップがはずれて眼福だったり束のトップがはずれて眼福だったりしたのだが。

ゆっくりとお湯に肩までつかりながら、空に浮かぶ満月を見上げる。

「それはともかく一夏よ」

「何だよ」

「俺達は今露天風呂にいるわけだがな」

「うん、そうだな」

「普通さあ、女湯の方が描写されるんじゃないの？」

「……ノーコメントで」

一夏があきれたように嘆息する。下らないことを言ったのは俺の方からだけどその反応は少々傷つくな。

口の端を持ち上げるように苦笑してから湯船の中でゆっくりと体を伸ばす。

「なあ、一夏。学園に来てお前はどうか？」

よく分からない、とでも言うように眉をひそめてこちらに向き直る。

「なんだよ、いきなり」

「いいから答えてくれ。ま、先生から生徒へのアンケートとも思ってくれ」

「……うーん。自分の弱さを再認識した、かな」

予想外の答えが返ってくる。てっきり「楽しいよ」とかそう言う月並みな言葉が返ってくるモノだと思っていた。

「ラウラと戦った時にさ、なんだか自分をみてるような感じだったんだ。それも昔の自分」

「——そう、か」

昔、こいつは誘拐されたことがあった。何が目的だったのかは今になっては分からない事だが。

色々あつて千冬に救出された時、一夏はこう思つたらしい。『強くなりた』と。——中学二年生の思考にしては、歪みすぎていた。

ちからがあればおれはちふゆねえにめいわくをかけなかった。

ちからがあればおれはちふゆねえがなくなすがたをみなくてすんだ。おれは、じぶんがだいきらいだ。——だから、つよくな

る。

そう、そう言ったのだ。千冬に対して。

それを聞いた千冬が、一夏の顔に首がもげるんじゃないかと思うぐらいのビンタを放って一喝した。

「——ッ！ たったひとりの肉親なんだ！ もう少し私に頼れ！ それが、家族という物なんだろう？！ お前はお前だ！ 織斑一夏あ！ お前は！ わたしのッ、私の弟だ！！」

ぼろぼろと泣きながら支離滅裂になっていく言葉を一夏へと叩き付けて、きつく抱きしめた。

そんなことがあったのだ、確かに千冬に憧れて自分を見失いかけていたラウラは、どうしようもなく目を背けたくなる物だったのだろつ。

「それでも、お前は真つ正面から『それは違う』って言ったんだろ
う？———」
「………」

湯船から立ち上がり、出口へと向かう。

「俺はそろそろ上がるわ。のぼせない程度にしっかり体を温めて来いよ」

出口へと歩いていく俺の背中にぼそり、と声が掛けられた。

「………」
「ありがとう、蓮兄」
「おつ」

部屋へと戻ると、千冬がいた。温泉に行っていたのか、その黒髪はしっとりと濡れていた。

「ん？一人か？一夏はどうした」

「あいつならもう少し温まってくるだとき」

「そうか」

そう言って千冬は腕をぐるりと回した。その動作を見てあることを思いつく。

「千冬、久しぶりにアレしようぜ」

一夏に部屋に来ないか？と誘われたセシリアは、今にも走りながらトリプルアクセルを決めそうなふいんきだ。（何故か変換できない）

一夏に誘われたのがそれ程まで嬉しかったのか、歩調にまで感情が表れている。

はやる気持ちを抑えながら目的地へとたどり着いた。

——しかし。

「……………」

「……………」

部屋の前、その入り口には二人の女子が張り付いていた。

「鈴さん？それに箒さんまで。一体そこで何を——」
「シッ！！」

鈴が慌てたようにセシリアの口をふさぐ。
状況が分からないセシリアがもがいていると、ドアの向こうから
声が聞こえてきた。

「久しぶりだからちょっと痛いかもしれないけど、我慢しろよ？」

「あ、ああ。——うあっ！ん、あ。少しっ、加減をしろお

っ……………！」

「だーめ。もう少し我慢しろ、っ」と

「ひあああ！？やめっ、ふああっ！？」

「ここがイイんだろ？——固くなってる」

「れ、ん。…………や、ああああっ！」

「こ、こ、こ、これは、なんですか……………？」

あわあわとして顔を真っ赤にしながら訪ねるセシリア。しかし、
返ってきたのはただただ沈黙だけだった。

「
……」
「
……」

鈴も箒も、赤面しながらもどこか居心地が悪そうな表情を浮かべている。

「あれ？三人とも部屋の前で何やってるんだ？」

——そこに、一夏が現れた。しかも、空気を読まずにナニの最中の部屋に入ろうとしているのだ。

「？ 入らないなら俺が入るぞ？」

「「「？！ 待つ……！？」」」

間に合わず、ドアが開けられる。

ドアを開いたその先には、——千冬の背中に親指を押し当て、指圧をしている蓮浄の姿があった。

「「「……あれ？」」」

第24話 Moon River（後書き）

マッサージ……っ！！こいつがやりたかった……っ！！
いやもう書いている時が凄え楽しかったw

感想、指摘等よろしくお願いします！

「ここはこうすればもっと読みやすくなるよ」とでもアドバイス
等もくれると嬉しいです！

第25話 ガールズトーク（前書き）

なんだか筆が乘りに乗った回。

ブラックラビツ党としてはラウラを可愛く書きたかった。

それと前回。ちょっと調子に乗って千冬さんの喘ぎg（ryを書いたら感想が十件近く一気に来ました。まじびびった。

第25話 ガールズトーク

「マッサージ……。わ、分かってたわよ!？」

「え、ええ!そうですとも!！」

「そんなことなどあるはずがないからな!！」

箒の言葉を聞いて何故か三人ともが顔を赤くして黙り込んだ。言い訳臭く聞こえるのは何故なのだろう。

「ふう、少し汗かいたからもう一回風呂に入ってくるわ」

「そうだな。部屋を汗臭くされては困る」

「へいへい、さっさと行つてきますよ」

タオルなどの用意をして、ひらひらと手を振って部屋を出る。

蓮浄が部屋を出たのを確認して、千冬はつまらなさそうに乱れた浴衣の合わせ目を直す。

「……はあ。篠ノ之。デユノアとボ・デヴィツヒを呼んでこい」

「え、あ、はい!」

指名された箒は、駆け足で他の二人を探しに行った。出て行った箒と入れ違いになるように、ドアがノックされる。

「どうもー、織斑先生居ますか？……わ、なんだか賑やかですね」

明日の事について連絡にでも来たのだろうか、真耶が入室してきた。それに続くように、息を切らせた篤たちが入ってくる。

「ふむ、全員そろったようだな。……一人余計な気もするが」
「……え！？もしかして私ですか！？」

真耶以外、どうしていいのかわからずに座ったまま固まっている。

「おいおい、葬式か通夜か？いつもの馬鹿騒ぎはどうした」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、初めてですし……」

「まったく、しょうがないな。私が飲み物をおごってやろう。篠ノ之、何がいい」

いきなり名前を呼ばれた篤は、びくつと肩をすくませた。言葉をすぐに出すことが出来ずに黙り込んでしまう。

そうしている内に千冬は備え付けの冷蔵庫から清涼飲料水五つと缶チューハイを一つ取り出した。

「適当に各自交換しておけ」

「い、いただきます……」

全員が同じ言葉を口にして、そして次に飲み物を口にする。

女子（プラス一名）の喉が、ごくりと嚥下したのを確認して、千冬はにやりと笑った。

「飲んだな」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの!？」

「ええええっ! そうなんですか織斑先生え!？」

「失礼な事を言うな馬鹿ども。なに、ちよつとした口封じだ」

そう言つて千冬が新たに冷蔵庫から取り出したのは、辛口が自慢の缶ビールだった。

プルタブを開けるとプシュッ! という景気のいい音がして飛沫と泡が飛び出す。その黄金色の液体を唇で受け止めて、実に美味そうに喉を鳴らした。

「……………」

全員が啞然としている中、千冬は上機嫌そうに缶をテーブルにおいた。

「ふむ。本当なら一夏か蓮に一品作らせるところなんだが……それは我慢するか」

いつもの規則と規律に厳しい『織斑先生』と目の前の人物が一致しないのか、真耶を除く女子全員がぼかんとしている。

特にラウラはさつきから何度も軽く握った拳で目をこすってはまばたきを繰り返している。

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ」

「は、はあ……………」

「そうですか……………」

「あ、あのお……。織斑先生、今は仕事じゃあ……………」

おずおずと千冬にそのことを告げる真耶。しかし――

「……山田先生、いまその手に持っている物は何かな？」

「？ 何ってチューハイ………あ？！」

「ふ、全員に口止め料は払っている」

全員が飲み物の意味に気付いたらしく「あっ」と声を漏らした。
真耶は半泣きになっていたが。

「さて、前座はここまででいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

ラウラに二本目のビールを取らせて続ける。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

――あいつ、とは。こう言っているが誰を指しているかは一瞬で分かった。一夏だ。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

と、ポニーテイルの先を弄りながら箒。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

人差し指同士を突き合わながら、もごもと言つ鈴。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりして欲しいだけです」

ツンとした態度を取りながら答えるセシリア。

「ふむ、そうか。では一言一句違えずに一夏に伝えておこう」

しれっと三人の乙女に重大なダメージを与えるであろう発言をする千冬。

「「「言わなくていいです!」「」」

その必死そうな様子を笑いで一蹴して、千冬はまた缶ビールを傾ける。

「僕——あの、私は……優しいところ、です……」

ぼつり、と小さい声で言ったのはシャルロットだった。その言葉には、短いながらも真摯な響きが込められていた。

「ほう?しかし、あいつは誰にでも優しいぞ。——誰かに似てな」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ」

あはは、と照れ笑いをしながら、熱くなつた頬を冷ますように手で扇ぐシャルロット。素直に自分の気持ちを述べる事が出来たのが羨ましいのか、箒、鈴、セシリアの三人は押し黙ってシャルロットを見つめた。

「で、ラウラ。お前は?」

先程から一言も発していないラウラに、千冬が話を振る。びっくり、と体をすくませながらもたどたどしく言葉を紡ぎ始めた。

「つ、強いところ、でしょうか……」
「弱いだろ」

何でもないことのように言う千冬に、珍しくラウラは反論した。

「つ、強いです。少なくとも、私よりは」

そんなものかねえ……。と言う千冬は、早くも二本目のビールに手を伸ばす。

千冬がその内容物を口に含んだ時、ラウラがある意味爆弾発言をした。

「あ、あの……。先生達は、その、東雲先生のどこがいいんでしょうか……？」

その言葉に液体が気管にでも入ったのだろうか、千冬と真耶が咳き込み始める。

「ごほっ……。い、いきなりなんだ!？」
「あ、あたしも聞いてみたいかも……」
「わ、わたくしも……」
「あの……。僕も……」

その女子達のプレッシャーに耐えられなかったのか、諦めたように言う。

「……くっ。山田先生から言え」
「ええええ!？わたしからですかあ!？」
「良いから言え」
「うっ……。分かりましたよう……」

威圧に負けたのか、涙目で千冬の事を見る真耶。

「えっとお……。わたしは、その。どこまでも引っ張って行つてくれそうところ、です……」

火が出そうなほどに赤面しながらも、最後まで言い切った真耶の顔はどこかスッキリしていた。

「……なんか、どんな時でも助けてくれそうじゃないですか」

その言葉に、昔から蓮淨のことを知っている篤と鈴は合点がいったような顔をする。

「……私か。……そう、だな。側に、本当にそばにいてほしい時にそばにいてくれるところ、か。——普段は気が利かないクセに、そう言うところだけには敏感なんだ、あいつは」

そう、あの時だって。

「まあ、その分鈍感、と言うのが欠点なのだろうな」

「一夏さんもそうですわね……」

「ふ、まあ、一夏は蓮の背中を見て育つたと同じだからな。似もするさ」

「……なぜか全ての元凶を発見した気分だよ。僕」

「奇遇だなシャルロット。私もだ」

そうして、恋する乙女達の夜は過ぎていく――。

第25話 ガールズトーク（後書き）

そう言えば、少し前に極神さんから、「このssはハーレムエンドなのか、個別ルートなのか？」という質問をいただきました。

軽い疑問なのですが、皆さんはどのようなエンドが良いですか？

感想、指摘等よろしくお願いします。

第26話 急転（前書き）

オリジナル展開が入ってきます。

第26話 急転

合宿二日目。

今日は朝から夜まで丸一日ISの各種装備試験運用などに追われる。特に専用機持ちはその国の新型装備のテストなどもあるので深夜までかかることもあるらしい。

「漸く全員集まったか。————おい、遅刻者」

「は、はいっ」

千冬に呼ばれて身をすくませたのは、意外なことにラウラだった。

「そうだな。ISのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ISのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。これは元々広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられたもので、現在はオープン・チャネルとプライベート・チャネルによる操縦者会話など、通信に使われています。それ以外にも『非限定情報交換^{シェアリング}』をコア同士が各自に行うことで、様々な情報を自己進化の糧として吸収しているということが近年の研究で分かりました。これらは制作者の篠ノ之博士が自己発達の一环として無制限展開を許可したため、現在も進化の途中であり、全容は掴めていないとのことですよ」

「ふむ。さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

その言葉を聞いて胸をなで下ろすラウラ。………もしかしくともドイツ軍教官時代に嫌と言うほど恐ろしさを味わったのだろくな

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

一同が返事をする。さすがに一学年全員が並んで居るのはなんというか、壮観だ。しかも全員がISスーツを着用しているので、なかなかアレな光景だ。

ちなみに現在位置は学園の私有地であるビーチに来ている。まあ、ISの装備の中には当然武器も含まれるわけで、そこら辺でドンパチするわけにはいかなからなのだが。

「なあ、千冬。俺と一夏はどうすればいい？専用パーツなんてものは無いぞ？」

「ああ、お前達は――」

「ちーちゃ~~~~ん!!れんく~~~~ん!!!!」

凄まじい砂煙を上げながら人影が突進してくる。ISのようなものを装備したその影は――

「……束」

だった。前日に立ち入り禁止だと千冬に殴られたのも何のその、稀代の天才/天災・篠ノ之 束は止まらない。

その突撃の威力を殺すことなく突進してきた。俺に。

「やあやあやあ!昨日振りだねれんくーん!さあ、ほーみーたい!
Hold me tight
!」

「うおおおおお!??」

突っ込んで来た束の手を掴んで足を払う。空に浮いた束の体をいわるお姫様だっこの状態になるように受け止める。

「……ったく。あぶねーだろ?」

「……………あつ」

顔をのぞき込むと、なぜか黙り込んでしまつ。

「束？大丈夫か？怪我とかしてないか」

「……………っ！あ、あはは！こ、この束さんがけがなんてするわけないよ！」

俺の腕からするり、抜け出して今度は箒の方を向く。

「やあ！」

「お久しぶりです、姉さん」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、箒ちゃん。主におっぱいが」

「ごすつ！！」

「姉さん、ここは公共の場です。その様なことを言つと殴りますよ」
「な、殴つてから言つたよ今！ひどい！箒ちゃんひどい！」

醒めた目で束を見下ろす箒と頭を押さえながら涙目になって訴える束。そんな二人のやりとりを一夏と千冬以外の全員がぽかんとして眺めている。

「で？束は何しにここに來たんだ？」

「んーとね。昨日はほんとにヒマだったから來ただけど、今日はちよつと違つよ」

「昨日は本当にヒマだったのか……………」

「黒騎士の調節に來たんだよ。無人機の時見てたけど、相当ズレてきてるでしょ？」

「……よく分かるな」

束の言う通り、五年近く操縦者との相互設定をしていなかった黒騎士は俺の反応と少しずれるようになっていた。まあ、動作がずれるのならそのズレに合わせて体を動かせばいいのだが。

「うふふ、そんなのが出来るのは世界中探してもれんくんとちーちやんぐらしいしか居ないと思うよ？」

「地の文を読むな」

「えへへ、ごめんごめん。それじゃ、今からセッティングしようか」

その言葉に、黒騎士を展開する。それを待っていたと言わんばかりに束が黒騎士の各装甲を開いて、内部の電装を弄り始める。

「ふむふむ。うわー、電装系が酷いことになってるなあ。よし、全部取っ替えるぞー」

「うーん、機体重量に対して推進系の出力が合っていないなー」

などと、独り言を言いながら作業を進めている。その工程を見て、整備科志望の1年が目を見張っている。

「よし！おーわりっ！」

「速いな」

「んふー、束さんは天才だからね！あ、そうだ。今回はちょっと弄ったところがあるからその説明しとくね。強化した点は主にスラストー周りかな、出力の調整次第では高機動パッケージ並の速度が出せるよ。極端に燃費が悪くなるけどね」

「ふーん」

ステータスを確認すると、確かに最高速度が向上していた。反応

速度も、しっかり俺に付いてこれるようになってる。

「流石だな、束。ズレが無くなってる」

「ま、天才だからね」

のほほん、と会話をしていると、真耶が慌てた様子で駆け寄ってきた。

「たっ、た、大変です！蓮浄さん！織斑先生！」

「どうした？」

「こ、これを！」

その小型端末の画面に表示された文章の一文目、それは『特命任務 LEVEL A』の文字だった。

第26話 急転（後書き）

ここから、やっと主人公らしくなるのかな？

そう言えば前回、たくさんのコメント、ありがとう御座います！

感想、指摘等よろしく願います！

第27話 作戦会議（前書き）

第27話 作戦会議

「では、現状を説明する」

旅館の最奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間では、一夏達専用機持ちと教師陣が集められた。

照明をオトした薄暗い室内に、浮かび上がるように空中投影型のディスプレイが展開されている。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用無人IS『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

千冬の説明に、一夏が混乱しているような気配を見せる。正式な国家代表や、候補生などには有事のさいの訓練などを受けているが、一夏はそのようなものなど受けていない。混乱するのも無理はないだろう。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

淡々と任務の概要を伝えていく千冬。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よつて、本作戦の要は専用機持ちに担当して貰つ」

ぐるりと周りを見回して、さらに言葉を続けていく。

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは拳手するように」
「…………生徒だけじゃ若干無理のある作戦だな。学園上層部は何を
考えてこの編成にしたんだ？」

「…………東雲先生、拳手をするように。それと少し思い違いをしている
ようだ。私は専用機持ちに担当して貰うと言ったが？」

会議の途中からか、いつも通り蓮とは呼ばず先生をつけて呼んで
きた。相変わらずこういうところでの切り替えが上手いな。

「…………なるほど。俺も動け、と？」

「そうだ」

「了解。んじゃ機体データを頼む」

「…………ああ」

機密事項などの注意を終えた後、顔を突き合わせるようにして専
用機持ちの面々と相談を始めた。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型…………わたくしのISと同じく、
オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動を特化した機体か。厄介ね」

「この特殊武装がくせ者って感じはするね。丁度本国からリヴァイ
ヴ用の防御パッケージが来てるけれど、威力とかを考えたら連続使
用は難しい気がするよ」

「このデータでは格闘性能が未知数だ。偵察は出来ないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も高速移動を続けている。最高速度は
時速四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「チャンスは一度きり。そうなりや、もう一人しかいねえよな」

モニターを睨んでいた視線を一夏へと移す。

「え……………」

「一夏、お前の零落白夜で落とすんだ」

「それしか、ないわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！お、俺が行くのか！？」

一夏が急に慌てて立ち上がる。その言葉にかぶせるように、千冬が言い放つ。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

その言葉に、ぴくりとする一夏。

「――つ！やります！俺が、やってみせます！」

「……よし。それでは作戦の本格的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちようどイギリスから強襲用高機動パッケージが――」

「オルコット。この任務は俺が^で出撃する」

オルコットの言葉を遮って発言する。周りの視線が訝しげなものに変わる。

「……………どうもこの^{任務}事については自分の目で確かめたいこともあるんでな。済まんが行かせて貰う」

「機体性能的には問題は無いのか？」

「今さつき東にチューンアップしてもらったばかりだ。燃費についても増漕つけりゃ何とかなる」

「……………」

無言で千冬と向かい合う。……時間にしても数秒だろうか、根負けしたようにため息をついて目を逸らされた。

「仮にも教師なのだから問題は無い、か……。では、本作戦では東雲・織斑の両名による目標の追跡及び撃墜を目的とする」

「く、ふ。くふふふ」

「ここまで予想通りだと、なんだかスッキリしてきたよ」

笑いながら何かを入力していた画面から目を離し、ぽつりと、ちいさな声で呟いた。

「——さあ。黒騎士きみたちとれんくんは、どんな答えを出すのかな？」

第27話 作戦会議（後書き）

どうも、お久しぶりです。

更新してなかった一週間、自分は岩手の方に行っていたのですが、何というか、暑かったです。

東北だから涼しいとか思ってた自分が馬鹿でしたよ。

……え？それだけですよ？

……オチないの catt？

オチません。

感想、指摘等頂けるとほぼ逝きかけます。

第28話 出撃（前書き）

どうも、検査入院のせいで昨日中に上げられませんでした。
福音戦も佳境となってきました。

どうか、楽しんで読んでください。

第28話 出撃

時刻は十一時半。

七月の空は晴れ渡り、容赦のない陽光が降り注いでいる。砂浜で俺と一夏は距離を置いて並んで立っていた。

「一夏、準備はいいか？」

「おう。何時でも行ける」

その言葉を聞き、意識を顔に掛かっている待機状態メカネのISに集める。

「出番だ、黒騎士」

「来い、白式」

瞬間、全身が眩い光に包まれ、ISの装甲が構成される。それと同時にPICにより、重力から解放される。

「じゃあ、蓮兄。よろしく」

「……やれやれ。いくら任務とはいえ、でかくなつたお前を背負うことになるとはなあ……」

作戦の性質上、移動のすべてを俺が担当しなければならないので、必然的に背中に乗せることになるのだが。

一夏が背に乗ると同時に、各部の衝撃緩衝材が軋みを上げる。

「こちら東雲。準備は完了した。何時でも出撃でれる」

ISのオープン・チャネルを使用し、千冬に連絡を取る。

『了解。……今回の作戦の要は一撃必殺だ。「ワンアプロッザウン」短時間での決着を心がける』

「……わかりました」

一見落ち着いているように見える一夏も、やはり言葉の端々には緊張が見え隠れしている。

その様子が通信上でも伝わったのか、千冬がプライベート・チャネルに切り替えて俺に話しかけてきた。

『——蓮』

「なんだ。千冬」

『……あの愚弟は何だかんだで背負い込んでしまうタイプだ。だから、その』

「サポートしてやってくれ、だろ？んなこた分かってるよ。何年幼馴染みやってると思ってるんだ」

『——あ。そう、だったな。ふふ、すまん』

「ま、お前はどっしり構えて戦勝パーティーの準備でもしといてくれ」

『ああ。——怪我などせず、無事に帰ってこい』

「……あいよ」

返事を境に、千冬はオープン・チャネルに切り替え、号令をかけた。

『では、始め！』

——作戦、開始。

強化されたウイングスラスターに火を灯す。

足下の砂地が爆発でもしたかのように爆ぜ、振動とともに体を空へと持ち上げていく。

目標高度、五百メートルまでの所要時間、約三秒。上出来だ。と言つか下手をするとパッケージを装着したISよりも速いかもしれない。

「暫時衛星リンク確立……情報照合完了。目標の現在座標を確認。

——よし、一夏あ！一気に行くぞ！」

「お、おう！」

加速、加速、さらに加速。エネルギー残量がゼロとなった増槽を切り離しながら音さえ引き離す速度に達そうかとしたその時。

「見えたぞ、一夏！」

ハイパーセンサーにより強化された視覚が、はっきりと目標を目視する。

その機体は、名に恥じることのない白銀。

異様なるは頭部から生えたかのような一對の翼。

『シルバリオ・ゴスベル
銀の福音』が、そこにいた。

「一夏！加速して約十秒後に目標に接触する！集中しろ！」

「ああ！」

轟、と言う爆音とともに体が軋むほどに加速。その速度は高速で飛翔するそれとの距離をぐんぐんと縮めていく。

「うおおおおッ！」

俺の背から弾丸のように飛び出した一夏は、零落白夜を発動して

一気に間合いを詰める。

唸りを上げるその刃が銀の福音に触れる、その瞬間。

「なっ!？」

福音は、なんと最高速度のままこちらに反転、後退の姿となって身構えた。

その姿を見て、押し切るのが最良と考えたのか、一夏が再度瞬時加速をした。しかし――。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘》^{シルバール}、稼働開始」

オープン・チャネルから聞こえたのは抑揚のない人工音声。しかし、そこには少しの違和感が残った。

その違和感が何なのか考える前に、目の前の状況をどうにかしなければ。

その時。

「あつ、ぶねえっ!」

「うおわああ!？」

銀の翼。スラスターであるその装甲の一部が開き、そこから羽のような形をしたエネルギー弾を打ち出してきた。

ギリギリのところで一夏の腕を引っ張り射線上から回避する。

しかし、回避したと思った瞬間。脚部に衝撃が走る。

「ぐッあ! 追尾弾だと!？この量をか!？」

羽の形をしたエネルギー弾。それは自らの意志を持つかのように俺を追いかけてくる。しかもその量が尋常じゃない、次々と翼から

吐き出されているせいで空を覆い尽くすまでになっている。

「れ、蓮兄！上！上上上！！」

「わーかつてる！俺だって避けるのに必死なんだよ！！」

「うわわわわああああああ！！？」

急加速、急降下などを使い、迫り来る弾丸を避ける。直撃しそうなものは槍で打ち払う。

「一夏！俺が右！お前が左だ！」

「おう！」

――挟撃。しかしそれは圧倒的な面での射撃に飲み込まれていく。

いくらか回避能力が優れているとはいえ、流石に限界が来た。来てしまった。

「な、エネルギー切れ！？こんな、時に！？」

回避での急加速。その代償がここで来てしまった。増槽のストックは尽き、エネルギーも尽きた。

エネルギー切れ
そのことを理解したのか、銀の福音がこちらへと向かってくる。

銀の福音は、俺の右腕を掴んだ。

その状態のまま翼を変形させてエネルギーで刃を形作り。

そのまま、俺の。俺の右腕を、断ち切った。

「あ、あああああああああああああ！！」
「れ、ん。蓮兄iiiiiiiiiii！！」

その時、最後まで残っていたものは、俺の名を呼ぶ一夏の悲痛な叫びと、無くなってしまった右腕を襲う焼けつくような痛みだけだった。

第28話 出撃（後書き）

……この展開を予想出来ていたのは何人ぐらいいるのだろう。
絶対いねーよ……。

余談ですが検査入院中に発作起こしてぶっ倒れるって本末転倒ですよねー。

感想、指摘等お待ちしております。

第29話 敗北（前書き）

どうも。

なんと

P V 1 / 0 1 4 / 7 8 7 アクセス

ユニーク 1 4 4 / 1 9 6 人

になっておりました！これも凡て皆さんのおかげです！

第29話 敗北

「蓮兄ッ！蓮兄い！！」

「織斑くん！あなたも治療を受けて下さい！蓮浄さんほどではないですが、酷い傷なんです！！」

確かに体は痛むが我慢できないほどではない。そう判断して、担架で運ばれている蓮兄へと駆け寄る。

——酷い。あまりにも酷い、傷だった。

福音に撃墜された蓮兄は、空中にて具現維持限界を迎え、海面へと落下した。見た限りでは各部への裂傷、打撲。左足などは曲がってはいけな方向へと曲がってしまっている。そして、肩口から切断された、右腕。

「ッ……！！」

くらり、とした。その断面は、高エネルギー体が通過したせいで焼け焦げたようになっており、出血すらない。

目の前で教師達が応急処置をしている。しかし、なぜか、助かるという気が、しなかった。

「——い、ちか」

血に濡れて赤くなった唇を動かして、蓮兄が声を上げた。

「蓮兄……！！」

「は、はは……。かつこわりいところ、見せちゃった……」

「こんな時に何言ってるんだよ……！！」

「は、確かに……。そうだな……」

途切れ途切れながらも、何とか言葉を紡いでいく蓮兄。浮かべている笑みも、弱々しい。

「ぐふッ…。いちか…」

喋ろうとしていた時に吐血して、体をくの字に曲げて咳き込む。それでも話そうとする姿が、見ていられなかった。

「もういい！もう良いからしゃべんな！！……死んじまうぞ！？」

「……ごめん、って。千冬にいつといてくれ……」

「……な」

何言ってるんだよ、と。口に出そうとした時。こちらを向いていた蓮兄の顔が、ゆっくりと、力を失った。

「……心肺停止！！」

「織斑くん！！部屋に戻って下さい！！」

「……………あ」

周りの世界が、急に遠くなった。

「……何とか脈拍は安定しましたが、意識は戻っていません。……いえ、下手をすればこれから一生、意識は戻らないそうです」
「……そうか。報告ご苦労」

真耶の報告に、淡々と答えていく千冬。

ISの絶対防御、これを貫通するほどの攻撃に晒された蓮浄の体の傷は想像していたよりも深刻なものだった。

「織斑先生はっ……！何とも思わないんですか！！」

その淡々とした態度に、真耶は詰め寄った。

「……」
「蓮浄さんがあんなに酷い傷を負ったっていうのに！！」
「……山田先生。少し、黙ってくれるか」
「……あ」

指が白く色を失い、指の間から血が滴るほどに強く拳を握りしめた千冬の姿がそこにあった。

「…………あれ？」

気が付くと、俺は黒い部屋にいた。

壁紙も、窓を覆うカーテンも、今自分が座っている革張りのチェアも吸い込まれそうな、黒。唯一天井に設けられたライトだけが、橙色の光を放っている。

いつの間にか、目の前に黒いスーツを着た男が立っていた。

その男は被っていた帽子をとり、恭しくこちらに礼をして、こう言った。

「ようこそ俺の世界へ。ご主人？」
マイマスター

第29話 敗北（後書き）

少し短いですが、オリ展開と云うことで。

感想、指摘お待ちしております。

第30話 鬼哭（前書き）

どうも、お久しぶりです。

夏休み中にPC壊れるとかなり得ないだろ常考……………。
修理に五万とかワロスw

第30話 鬼哭

空は紅。遙か彼方に見える水平線は境界を曖昧にさせている。海に臨む砂浜に、独り一夏は立っていた。

「……一夏」

「鈴、か」

「行くの？」

「ああ」

いつからそこにいたのか、吹き付ける潮風に髪をたなびかせながら鈴は一言、そう訪ねる。その言葉に、視線を水平線に向けたまま応えた。

「……あたしも、行くわ」

「——駄目だ。これは、俺の問題だ」

「……っ！」

ぱしん、と軽い音と共に衝撃が頬に走る。

「いつもいつも！アンタは一人で背負い込んで！馬っ鹿みたい！あたし達なんか、見てる事しか出来なかったのよ！？」

「……鈴」

「……蓮浄の事が心配なのは、アンタだけじゃないのよ」

「——そんな、こと」

一夏の中で、どろりとした感情が膨れ上がる。鈴は、一夏の表情を見て怯えたような顔をするが、それにかまわず言葉を続ける。

「見ている事しかできなかった?——俺は、目の前で蓮兄が撃墜される瞬間を同じ空間で!何もできずに!それが、どれだけ——!」

——辛かったか。悔しかったか。恐ろしかったか。

最後まで口には出さずに体を背ける。

「いちかぁ……っ!」

背後で鈴が引き留めようと服を掴んでくるが、それを振り払い、
呟く。

「………来い、白式」

純白の装甲を日没の光で紅く染めながら、白は征く。

「まあ、此処がどういった所かっているのはもう理解してますよね？」

ダルそんな態度で後頭部をボリボリと搔く。

目の前に立っている男が丁寧な言葉とは正反対に慇懃な態度でこちらに話しかけてきた。

「……まあな」

ぎしり、と革張りのチェアを軋ませながら体重を後ろへと預ける。

「ここは、黒騎士おまえの中なんだろう？いつも側に有ったんだ。解らないわけがない」

「理解しているなら重畳です」

「………何で俺をここに呼んだ？」

「ま、簡単に言いますと、あのまま放置してたらあなたは死んでいました。今は機能の九割がた使って何とか生命維持してるんです。」

——しかし、どうやっても力が足りない。このままでは植物状態で一生を過ごすのがオチだ」

今まで俺が座っているチェアの周りをゆっくりと歩き回っていた

が、俺の正面で立ち止まりこちらを真っ直ぐ見つめてくる。その目には、先程までの慇懃な態度など一欠片も含まれていなかった。

「変化が欲しい。大々的な、進化とも呼べるような変化が」

「……………さて、意味が分からないんだが」

「……………あなたが望んでくれれば進化は起きる。^{へんか} 確実に」

言われている事の意味が理解できない。戸惑っている俺に対して、また問いかけてきた。

「力が……………欲しいですか……………？」

「んなもんいらん」

「…………………………は？」

「いきなりなにを聞いてくるかと思ったら、そんなつまらんことかよ」

「え？あれ、え、あれえ？！」

黒騎士の中

こんなところに呼び出したのだからよっぽどの事かと思って身構えていたら予想以上につまらない事だった。

俺の反応に、男は、いやもう黒騎士だからクロでいいや。クロは首を捻ってぶつぶつと何かを呟いている。

「……………あれえ？おかしいな……………シロ姉はこれがテンプレだ！って言ってたのになあ……………」

子供が算数で計算ミスに気付かないような顔でおかしいな、と首を捻っている。というかもしれないがシロ姉って白騎士の事か。どうなってるんだISの深層意識。

呆れたような目で見ているのに勘づいたのか、慌てて表情を取り繕う。

「…………えーと、今更ですけど。貴方にやっていただきたい事があるんですよ。——ああ、力とかは関係なくて」

「妹”を助けて欲しいんです」

「シルバリオ・ゴスベル銀の、福音ウウウウツ!!」

機体の上げる悲鳴をもとめせず、一夏は激情でその身を灼く。眼前にいる銀色に向けて臓腑の底から噴き上げる憎悪を、憤怒を、声にして解き放つ。

加速させるは純白。スラスター背中つぱしの加速器から燐光を迸らせながら疾走する。

第30話 鬼哭（後書き）

さてさて、クロ。

どうしてこうなった……！なんだかクール（真剣）を目指してたのにクール（キリッ）になってるぞ。

若干厨二臭い文章になってますが、（特に最後の辺り）休み中にや
つてたシュタゲのせいじゃないんだからね！？助手ペロペロ（^ω
^）

感想、指摘等お待ちしております。

第31話 挫折（前書き）

今回は若干短いですが、キリの良いところで終わらせるためです。

第31話 挫折

「呼びかけても自分の世界から出てこなくなったあ？……引きこもってるだけじゃねえか！」

「ち、違いますよう！シルちゃんはそんなに内向的じゃないですもん！」

クロが説明した内容によるとこうだ、数日前から何か思い詰めたような表情でいたらしい↓昨日にいきなり自分の世界に閉じこもって連絡が取れなくなつた↓クロ涙目（今ここ）らしい。

と言うかクロはシスコンなのだろう。ISにシスコンなんていう概念があるのかはわからないが。

「こんな事は初めてなんですよ。仲のよかったファンちゃんに聞いても分からないって言うし……。そもそも、俺たち同士での連絡とつか、絆とつか、そういったものは途切れるはずがないんですよ。よっぽどのことがない限りは……」

本当に困り切った表情でこちらを見てくるクロから、目を逸らすこともできずにいた。……俺も弟がいるから、そうなったら同じような反応をしているのかな、と思うと、口から言葉が漏れていた。

「……はあ。分かった、何とかしてやる。勘違いするなよ？仕方なくだからな？」

「……う、うう。あり、がとうございますう……」

「おわあ！？いきなり泣き出すなー！？」

爆炎が、宵の空を明るく染め上げる。

その炎の中から、立ち上がる黒煙を突き破るように白の機体が飛び出てきた。

その姿は満身創痍、動いているのが奇跡に近いほどの損壊をしている。

「がッ、はあっ！」

体をくの字に折るように、空へ向かって吐血する。衝撃は、内蔵にまで伝わるほど大きいものだった。

しかし、その身に宿った闘志は衰えない。射殺するような視線を、ただただ目の前の怨敵へと向けている。

「La………」

そのような一夏は眼中にないと言わんばかりに銀の福音は、詠う。マシンボイスと共に空中へと撒き散らされた“羽根”は、球状に収束してゆく。舞っていた羽根の最後の一枚が消えたとき。

光の奔流が大気を蹂躪しながら一夏へと突き進んでいった。相対する一夏の反応は、零落白夜での打ち消しだった。

——しかし、それは唐突に訪れた。

ぴきり。

打ち消す刃を振り切って、身を守る事に成功した。

め、しり。

だが、これまでの過酷な運用がついに限界に達したか、それとも先ほどの一撃は刀身の耐久値を上回る一撃だったのか。

その刀身に入った罅はウィルスが浸食していくかのように蝕んでゆく。

ばきん。

折れた。その刀身が、まるで飴細工を砕いたかのようにぼろぼろと崩れていく。

「雪片が……、折れた……？」

思考は底へと沈んでゆく。抗うための、仇を取る為の武器が、たった一つの武器が折れたことによって。

その時。

—— 声が、聞こえた。

「夏あああああつ!!」

—— 龍は吼え。

「夏さん!!」

—— 蒼は優美に。

「夏っ!!」

—— 疾風は激しく。

「夏あ!!」

—— 雨は冷たく。

—— 四人の戦乙女が、そこに集った。

「みんな。どうして……」

「どうしてもクソもあるかあああああッ!!」
「うぐあああッ!」

啞然とした一夏にかけられた言葉は罵声。それとマニピュレータ
ーでの打撃付きだった。

第31話 挫折（後書き）

若干三巻にイベントを詰め込みすぎた感がありますねー……………

感想、指摘等、いただけると泣いて喜びます。

番外編 ISの中の人達（前書き）

どうも、お気に入りが1000を突破いたしました。
あまりにも嬉しすぎて番外編を書いてしまいました。

番外編 ISの中の人達

「おにいちゃん!」

自分を呼ぶ声に、クロは振り返った。振り返ると同時に、腹部へと軽い衝撃が走る。

見ると、白いワンピースを着た少女。

「えへへ、聞いて聞いて!」

「どうしたんだ式ちゃん」

えらく上機嫌そうに話しかけてきた。ここまで上機嫌だったのは初めて見るぐらいだ。

「えっとね!束おねーちゃんがね、あたしのごしゅじんさまが決まったって!おりむら いちかっていうひとなんだった!」

「おお!それはよかった!!今まで倉持の人たちにほったらかしにされてたからなあ……。ん?織斑?」

そう言えば、シロ姉の前の操縦者の名前も織斑だったような……。?もし関係者ならどんな人物なのかシロ姉に聞いてみるか。

「シロ姉!」

「……うっさい寝てたんだ起こすな馬鹿クロー!!」

返事は罵声でした。姉弟だからこそその気安さだと思いたい。殺気なんて感じない。

「……ったく、何の用なの?せつかく人が惰眠を貪ってたていうの

にさー……………」

寝ぼけ眼で、ぼさぼさの髪を手櫛で直しながら此方に近づいてくる。

「式ちゃんの操縦者決まったんだよ。それでな、織む「マジで！？」やったね式ちゃん！ーよし、おねえちゃんが今日はずっと遊んであげるぞー」話聞けよ……………」

案の定相手にされてなかった。ため息をつく自分を尻目に、シロ姉は式ちゃんに抱きついてくるくと回っている。

「おい、シロ姉の操縦者って織斑千冬だったよな？」

「んー？そうだけど？」

「織斑千冬に姉妹って居たっけ？俺の方はあんまり記憶にないんだけど……………」

「千冬に姉妹ー？……………あー、居たな。確か一夏っていう名前だったはず」

「そいつが式ちゃんのマスターらしいよ」

「へー、そうなのかー……………あれ？確か一夏って男だったぞ。珍しい、蓮淨と同じ異端者^{イレギュラー}か」

ISは女にしか操縦できない兵器である。その根本をひっくり返す存在がもう1人現れたわけだ。

——だが、そんなことはどうでも良い。

——問題なのは操縦者が男だと言う点だ！

「シロ姉！式ちゃん大丈夫かなあ！？乱暴な操縦とかされたりしな

いかなあ!？」

「だいじょうぶだよー。おねえちゃんもいるからしんぱいなんてしなくてもへいき!」

「鬱陶しいなー、シスコンは嫌われるぞー。というかキモイ」

「んなあ!？キ、キモイって言ったか!？キモくないぞ!これは妹への深い愛情を表したものでなあ——」

番外編 ISの中の人達（後書き）

こんな感じでクロ達はいつも過ごしています。

感想、指摘等ありましたらよろしく願いします！

第32話 覚醒（前書き）

短wwwwいwww

あとカワカミンが少々！

第32話 覚醒

先ほど、出会い頭に叩き込んだ一撃で気絶した一夏を肩に担ぐようにして支える。

その鈴の姿を見て、ほかの三人が半目で睨み付けている。

「……………な、何よ？」

「一夏さんが心配なのは分かりますけど、少々やりすぎではありませんせん？」——主に威力的な面で」

「くっ……………！あ、あんたたちだって同じ立場なら同じ事をしたでしょうがっ——！」

「ふ、自分の嫁にそのようなことはしない」

「ラウラの言うとおりだよ！——」——「やったとしてもパイルバンカー打ち込む程度だね！」

「……………うわあ……………」

今の一夏にそんな事をしていたら体に穴が開いている。

「ちらり、と抱えている一夏を見る。目を閉じて荒い息を吐くその姿は、見るに堪えられないものだった。」

——「いつもならあれ位の衝撃ではビクともしないはずだ。それが、一発殴っただけで気絶など、IS自体の損傷も、一夏の体も限界だったと言うことだ。」

「——また、無茶して……………ッ！」

ギリッ、と噛み締めた奥歯から軋みが音となって聞こえる。愛しい男を傷つけられたという事実には、沸々と怒りがわいてくる。

——「この手でゴミ同然のスクラップになるまで衝撃砲を撃ち込んで、そこから双天牙月でグチャグチャにして畑の肥料にし

てやる——！

しかし、その行動は許されない。

「みんな！一夏は回収したわ！個人が出せる最大戦速で離脱するわよ！」

「了解！」

四人ともが加速をする。それに引きつけられるかのように銀の福音も加速を始めた。

「何とかしてやるとは言ったものの……。どうすれば良いんだよ？引きこもり娘の所に行くには」
「引きこもり娘って言うなあ！」
「……シルちゃんだっけ？」
「はい」

「……どうすればシルちゃんの所に行けるんだ？というか、本当に連絡つかないのかよ？」

満足そうな表情をしているのがいちいち勘に障る。分かってやる

のなら殴っている。……素でやってるんだろうなあ。

「…………一応、声を聞くぐらいは出来ますけど」

「なんだよ、出来るなら先にいえよ」

「……あまり、お勧めできませんよ」

「？ 良いから聞かせてくれ」

なぜか、顔をしかめながらクロはもう一度確認してきた。

「…………ホントに、良いんですね」

ぱちん。と指を鳴らした瞬間、世界が、歪んだ。

『きえたくない』

『こわいよ』

『いやだいやだいやだ！』

『いたいよいたいよいたいよいたいよ！』

『！』

『だれか』

『だれか！』

『だれか！！！』

『だれか………助けて………!!』

「が、つア——!?!」

歪んだ世界が元に戻ると同時に、地面に膝をつく。心配そうにクロが駆け寄ってくるがそんなことはどうでも良い——!!

そんなことよりも!

声が聞こえてしまったんだ。

思いが伝わったんだ。

理解してしまったんだ。

——助けを求めて泣いている子供が、其処に居るって事を——!!

「——助けるに……、決まってるだろうがッッッ!」

このままで居るなど、後味が悪すぎる!

「クロ!今すぐ俺の体を叩き起こせ!!」

「え、あ、はい!!」

俺に声をかけられたクロがあたふたとしながら返事をする。

「あ、でも。繋ぐ方法ぐらいは……！」

「後にしろ！」

「は、はい……！」

クロが指をならした瞬間、意識は遠くなり、また戻ってきた。

第32話 覚醒（後書き）

気付く人は気付くかもしれませんが、個人的に大好きなゲームのシンをオマージュしてますww

感想、指摘等ありましたら一言よろしく願いします！

第33話 realize（前書き）

タイトル詐欺です。はい。

それと最近感想を返せず、申し訳ありません……

第33話 realize

戦場、旅館へと至る海上は、今戦場と言うにふさわしい場所へと姿を変えていた。

「くっ！鈴、五時方向！——来るぞ！！」

ラウラの言葉に反応した鈴が体を捻るようにロールした瞬間、先程まで居た場所を決るように光の奔流が走る。外れた光線は、海に直撃し隕石でも落下したのではないかと言わんばかりの波を生み出す。

「今一夏を担いで機動も落ちてるって言うのに容赦ないわね……ッ！」

「足止めはどうする！？」

「やってる暇なんてないでしょうが——！！」

言い合っているそばから空を決る光撃。それを散るように回避しながら鈴は思案する。——「このまま振り切ることが出来なければ、旅館まで銀の福音を誘導することになる。と言うか、確実に振り切れない。それにもしもクラスの皆が巻き込まれてしまったら。そう考えると一斉に鳥肌が立った。

「ねえ！鈴、このまま僕たちが振り切れなかったら——！！」

同じようなことを考えていたらしいシャルロットがオープンチャネル越しに話しかけてくる。その声には、わずかに恐怖の感情が交ざっているのが理解できた。

その言葉に、鈴は唇を噛み締める。

——決断しなくてはならない。誰が残って、銀の福音を引き留めるかを。

「行って下さい。鈴さん」

「セシリア！？あんた……」

「あーもう、仕方ないなあ！僕も残るよ！」

「シャルロット！？」

「ふむ。ならば私も残ろう」

「——ッ！あんたたちッ！」

「鈴は一夏を送り届けなきゃならないんでしょう？だったら、僕たちしかないよ」

「シャルロットの言う通りだな。結局は誰かが残らなければならなかったのだ。それがたまたま私達だったというわけだ」

「だから、鈴さん。——一夏さんを、一夏さんをお願いしますわ」

「……あんたら、応援を呼んでくるからそれまで持ちなさいよ」

「よけいなお世話ですわ！逆に撃墜報告を届けて差し上げます！」

——決断する。

「……ごめん！任せた！」

三人が苦笑しているのが見える。その一言を最後に一夏を抱え直して加速した。

「行っちゃったねー」

「行ってしまいましたわねー」

「……これから戦いだというのに、気の抜ける奴らだな」

反転して、敵へと振り返る。

「ま、頑張るしかないよね」

「うむ」

「そうですわね」

銀の福音に向かって、三人は己の武器を展開しながら飛ぶ。

ぎちぎち、と言つ音で目が覚めた。

「ぎアアアアアッ?!」

激痛。激痛。激痛。

体からめりめりとも、ぎちぎちともつかない音が漏れている。そして、首に掛かる髪が急速に伸びていく。

そのことを知覚した瞬間、思考がある結論にたどり着く。

——代謝を無理矢理上げて傷を再生させて居るのか!と
いつかからだいてえ——!?

「く、クロ……!泣かす!次会ったら絶対泣かす!」

そんな俺は悪くないですよ——!?!と言つ声が聞こえた気がするが関係ない。

腕に刺さっていた点滴を抜こうとするが、なぜか右腕が動かない。

「あ……。そっぴゃ斬られてたな……」

目をやると、其処には、肩口から中身がないように揺れる袖だった。

途方に暮れるが、仕方ないので無理矢理口で引き抜く。

枕元にあつた眼鏡をかけて体を起こして立ち上がるつもりだが、どうもバランスを取ることが出来ず倒れてしまう。結局立ち上がるのは無理だったのでずるずると這いずるよう移動する。

「……くそ、格好悪いな」

そのまま、廊下を這いずっていると、頭上に影が差した。顔を上げると、其処にいるのは真耶だった。啞然としているようで声を出すことも出来ない様子だ。

「……よう、真耶。よかったら歩くの手伝ってくれないか？」

「蓮浄さん！？何やってるんですか！？早く部屋に戻らないと！！」

「………真耶」

「自分がどれだけひどい怪我をしているか分かって居るんですか！？お願いですから戻って下さい！！」

「真耶！！」

びくり、と体を震わせる真耶。

「行かせてくれ。………いや、行かなきゃ駄目なんだ」

返事を聞かずにまた無様に這いずる。真耶が俺を止めようとするのは無理もないだろう、クロに聞いた話によると、俺は八回心臓が止まったらしいからな。

二メートルほど進んだ時に、真耶が話しかけてきた。

「……どうしても行かなきゃいけないんですか？」

「おう」

一瞬の静寂。

「分かりました。どこに連れて行けばいいですか？」

この言葉に、逆に驚かされた。最後まで反対されると思っていた

からだ。

「あ、ああ。玄関まで頼む……」

そう言つと一気に体を持ち上げられ、肩を貸すような体勢になる。

玄関までほかの誰とも出くわさずに辿り着く。外はもう完全に夜海から吹き付けてくる夜風が中身のない右袖と伸びた髪を揺らす。

「来い、黒騎士!!」

量子変換の閃光と共に疾風が吹き荒れる。今までバランスを取れていなかった体が、P I Cの補助を受けて宙に浮く。

展開された黒騎士は、ボロボロのままで右腕は、無い。

「すまん、真耶。助かった」

「……もう。さっさと行つて下さい」

頬を膨らまして拗ねたように横を向く真耶の頭を撫でる。

「……ひゃあう!？」

「……今度は怪我しないようにしてくる」

そう言つて背を向け、空へと飛び立った。

第33話 realize（後書き）

さて、次でようやく三巻が終了します。

出来るだけ早く仕上げますので、どうか少しでも期待していただければ恐悦です。

感想、意見等有りましたら一言よろしく願います。

第34話 その右手が掴むもの（前書き）

これで三巻が終わる……はずだった！すみません！なぜか微妙に長くなったので二話に分けさせていただくことにしました！

第34話 その右手が掴むもの

「アメリカ軍が開示したデータに不備があつたんじゃないのか!!」
「まったくですわー!?!」

鈴と一夏を見送り、足留めとしてその場に留まつた三人は回避に徹していた。と言うよりも、余りにも攻撃が苛烈過ぎたせいで回避するしか無かつたのだ。

全三十六門の主砲『銀の鐘』^{シルバール}による全方位射撃に、その砲門から放たれる羽根のような弾丸を収束させて放つ光線。前者はともかく後者など情報がそもそも開示されたデータに無かつたのだ。ついでに『羽根』には追尾機能付きときている。

「追尾付きでこの数つて避けられないよーっ!!」
「シャルロット! 退け、私が打ち落とす!!」

そう言つて立ちふさがつたラウラの姿は、普段と異なる姿をしていた。そして、シュヴァルツェア・レーゲンの全身に装備された追加装甲の表面が、がしゃがちゃじゃこんと言つ音を立てて開く。

開かれた装甲の内部にあるものは、無数のミサイル。

「砲打撃戦用パッケージ」^豪——Schwerner Regen^雨
「ん、全砲門解放! 発射アツ!!」

白煙を尾に引きながら発射されたミサイルの数は、空を舞う『羽根』の数の優に三倍はあるだろう。それが触れた瞬間、轟音と共に『羽根』の大部分が消し飛び、余剰分は銀の福音へと向かつていく。響き続ける爆音が止み、その場には黒煙が立ちこめる。

「……ちょーつとオーバーキル過ぎませんか？」

「——いや、来るぞッ！！」

黒煙を突き破り、銀は現れる。そのボディはひび割れていたり焦げていたりするものの、全体的に見ると微々たる損傷では無い。そのことを確認したラウラは、いち早くその機体を全速で前進させた。

「私が動きを止める！セシリアとシャルロットは援護！！」

両手にプラズマソードを展開させ、果敢に斬りかかってゆく。その追加装甲に施された補助ブースターにより生じる爆発的な推進力で距離を詰める。無論、敵も只接近を許すわけもなく『銀の鐘』による射撃で牽制をする。それを幾度と無く繰り返しただろうか。しびれを切らしたかのように翼を変形させ、ブレードを作り出し接近する銀の福音。

「近付いてくれるのを————待っていたッッッ！！！」

ヴン、と言う駆動音と共に慣性^{AIC}をねじ曲げる能力が作動する。空中で、いきなり壁にでもぶち当たったかのように制止する福音。好機と見て、加速。右拳を後ろに引き絞る。

拳を引き絞る動作から一拍遅れて、肩部にあった装甲が前腕部に移動していく。完成したのは、巨大な拳。

「喰らええええええッッッ！！！」

激しい金属音、それで終わりではない。打突の衝撃により、拳の前面に装着されていた爆発反応装甲が一斉に炸裂する。

轟音。

吹き飛ぶ福音が、重力に引かれるようにして、墜ちてゆく。

「……今度こそ、やりましたの？」

「おそらく、な」

福音が墜ちた海面を見ていると、海面が吹き飛ぶように蒸発した。その爆心地のにいるのは胎児のように自らの体を抱いている福音。

「……第二ラウンド開始って事かなあ？」

「……そろそろいい加減にしてもらいたいな」

戦いは、新たな局面を迎えた。

一夏を肩に担いだまま、鈴は旅館へと飛翔していた。

「……………っ！」

ああ、自分は何て無力なのだろう。一夏を引き留めることも出来ず、決断するのが遅かったせいで一夏はボロボロに―――そう考えると、押さえることの出来なかった嗚咽が漏れた。

「…………う、あああ!!」

目をギュッと閉じて涙を振り払い、叫ぶ。胸の奥の不安を振り払うように、しっかりと目の前を見据える。

――覚悟を決めろ、私のやるべき事は一夏を送り届けること。ラウラ達は足留め。しっかりとしろ、私！
体を撓めるように力を溜め、加速しようとしたその時。

「う、おあああああああああああ!!」

物凄い速度で私の横を突っ切っていった機体があった。

――蓮浄だった。

「……………はあ?……………え!?蓮浄!?!」

ボロボロの機体から、装甲板が剥がれ落ちて海面を泡立たせる。
先程鈴と擦れ違ったような気もしたがどうでも良い。表示された
マーカーは、銀の福音を差している。其処に向かつて、飛ぶ。
嗚呼、限界まで損傷した機体は既に満身創痍。それでも、なお蓮
浄を動かす理由^{わけ}。

——助けを求める声。聞こえなかったふりなど出来ない。
そんなコトをしてしまったら、後味が悪すぎる。

よろしくない、そいっただけは大変よろしくないのだ。

頭は焼けるようにズキズキするし、舌は乾く。

目の奥は突き刺すように痛いし、腹の底には重りでも入ったよう
に冷たい。

——嗚呼、要するに嫌いなのだ。

助けを求める人を無視することが、大嫌いなのだ。

——それなのに、そんななのに、たかが打つ手が無いぐ
らい程度のことδειいちいち手をこまねいていられるか！

「おお……………！！！」

第34話 その右手が掴むもの（後書き）

今回はオリジナルパッケージが登場。

次回こそ三巻分は終了です！……頑張ります！

感想、指摘等ありましたら一言よろしくお願いします！
それだけで執筆スピードが跳ね上がりますので……

第35話 白蓮（前書き）

やっとこの二巻が終了。

第35話 白蓮

——右手が、何かを掴んだ。

その瞬間、視界がぶれるような不思議な感覚に襲われる。気が付くと、巨大な教会の前に立っていた。

「な……！？」

目の前にそびえ立つ教会に圧倒され、思わず息を呑む。周囲を見回すが、薄暗い空に果てなど見えぬ地平。それに、どこかで感じたことのある既視感。しかし、それをどこで感じたのか理解することの出来ないまま、ふらり、と歩き出す。向かう先は、教会。

正面の扉の前にたち、扉を開こうとするが、引つかかるような抵抗とがちゃりという金属音を感じ、開くことが出来ない。

「……あーや、取っ手に鎖がからみついてんのか」

見ると、取っ手には太い鎖が絡み付いており、簡単に開きそうにない。他に入り口が無いかどうか周りを一周してみるが、裏口すら見あたらない。窓も到底ジャンプをして届く高さではないし、どうすればよいのだろう。

「……………うむ。ぶっ壊そう」

そう呟いて右手を鎖へと伸ばす。
そして指先が触れた瞬間。

ばきん。

異音を発して、触れた端から鎖が粉々になっていく。その光景を見ながら、蓮浄はまったく別のことに呆気にとられていた。

——腕が有るのだ。肩口から両断されたはずの右腕が。試しに動かしてみるが、痛みや違和感など微塵もない。むしろ以前よりも力が漲っているような気さえする。

「……………どうなってんだこりゃ。——お？鎖が無くなってる？」

うだうだ考えるのは性に合わない。まず行動してからどうするか決めよう。

観音開きの扉を体押し込むように開く。扉の奥から、気圧差による風が吹き付けてくる。木材が軋む音を聞きながら扉を開くと、礼拝堂だった。ずらりと並んだ長椅子に、窓にはめ込まれたステンドグラスが神秘的な雰囲気醸し出している。

礼拝堂の中央を走る聖壇へと続く道を歩いていくと、キリスト教であれば十字架があるべき場所に、ひとりの少女が礫になっていた。修道服のようなものを身にまとった少女は、聖壇の後ろの壁に縫い付けられるように鎖で捕らえられていた。垂れた前髪によって表情は見えず、浅い呼吸音だけがその場を満たしていた。

「っ！おい！大丈夫か！？」

急いで駆け寄り、鎖を外そうとするがビクともしない。自分の両腕を縛る鎖を外そうとする俺の存在に、今気付いたのかのろろと顔を上げる少女。

「……………だ、れ…………？」

掠れた声。こちらを見る瞳は、焦点が合わず揺れている。

「黒騎士の操縦者って言えば分かるか？」

がちゃがちゃと鎖を弄りながら答える。黒騎士、と言うワードに
びくり、と反応を返し、ようやく焦点が俺に合わせられた。

「クロお兄ちゃんのご主人様？」

「…………ご主人様、か。ま、そんなところだ」

「なんで、ここにいるの？…………ここは、私だけの、閉じた世界のは
ず」

「ま、いろいろあつてな。君を助けに来た」

「たすけ…………？」

「おう」

「…………お姉ちゃんも、たすけてくれるの？」

「お姉ちゃん？他に誰か居るのか？」

「ううん。私の^{マスター}ご主人様」

その言葉を聞いたとき、自分の中の疑問が氷解する。その代わりに
提示された情報に違和感を覚える。故意に隠蔽を？なぜ？何のた
めに？思考は少女の言葉によって遮られた。

「わたしが、ここにいないと。お姉ちゃんが死んじゃう」

「…………どういう事だ？」

「…………少し前にね、私の中に何かが入ってきたの。排除しようとし
てもダメだった。はいつてきたものはいつの間にか私を動けないよ
うにした」

じやらり、と体を揺らし鎖を鳴らす。

「この鎖が、そう。勝手に体は動き始めちゃうし、世界を閉じて押
機体

さえ込むので精一杯だった」

「じゃあ、この鎖を壊せば君は自由になるのか？」

「そうだよ。……壊せたら、話だけだね」

「扉についてた鎖なら壊せたんだよねー」

「……………え？」

「右手で触ったらなんか壊れたんだよねー。この鎖も……………お、壊れた」

「……………ええー」

助けてやったのになぜか不服そうな表情でこっちを見てくるのは何でなんだろう。

まあ、そんなことより。

「さて、鎖も外れたし。……………行くか」

「え……………何処に？」

「今まで引きこもってたんだろ？クロが心配してたぞ」

「あ……………」

聖壇から少女をおろし、手を繋いで出口へ向かう。

扉へ辿り着き、それを押し開いた後、少女の方を向き、言う。

「自分の世界に閉じこもるのも良いけど。——空はこんな
に広いんだ。自分から閉じるのは損って物だろ？」

ここに訪れた時の曇天とは正反対に、青く澄んだ空があった。
空をみてぽかんとしていた顔が、笑顔に変わる。

「あなたって…………正義の味方みたい！！」

「そんなたいしたやつじゃないよ。通りすがりの学園教師さ」

苦笑しながら言った直後、少女と繋いだ右手の感触だけを残して、世界に光が満ちていった。

世界が、光で染まった。

先程まで銀の福音と交戦していたラウラ達は、ハイパーセンサーでの視界を灼き尽くすかのような閃光を浴び、混乱していた。

——無理もない。必死に戦って福音を撃墜したかと思えば、セカンドシフト。若干諦めながら交戦していたところに雄叫びを上げながら突進してくる教師。蓮淨

訳が分からない。

「な、なににに！？何が起こってるのー！？」

「わたくしが教えてもらいたいぐらいですわー！」

「ええい！貴様ら落ち着け……！！」

眩んだ視界が元に戻り、目の前を空間を捕らえた瞬間、三人は驚愕した。

漆黒と言っているほどに暗く、深い夜空。

その中心に、――咲いていた。

花が。

純白に輝く蓮の花が。

その花の中心に居るのは蓮浄。

轟、と一斉に花弁が空に散った。

その腕の中には、ひとりの女性が収まっていた。
は、と息を吐いた蓮浄は、呟く。

「どうなってんだこりゃ」

「作戦完了」――と言いたところだが、お前達は独自行動

により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりで居ろ」

「……はい」

戦いを潜り抜けてきた戦士の帰還は、強制正座と説教に迎えられた、それはそれはつらく厳しい物だった。

なぜか俺まで説教を喰らい、不服そうな顔をしていると頭を殴られた。

「お前もお前だ！右腕切断という大怪我をしていたのだぞ。本来ならば死んでいたかもしれない！」

「う、……悪かったよ」

「……ふん。分かったのなら良い。ところで——その右腕は何だ？」

その場に居る全員の視線が、俺の右手に向けられる。

気になるのも無理はないだろう。俺ですらよく分かっていないのだから。

——その右腕には、漆黒の義手がついていた。

なめらかに光を反射する金属のような素材で出来たそれは、あらゆる動きに追隨できるように精巧に作られていた。

「……たぶん、黒騎士なんだと思うなあ」

何のことはない。待機状態が眼鏡から義手へと変わったただけなのだから。

「……はあ。まあいい。今日の所はこれで解散する、各自しっかり休めよ」

そう言って、千冬は頭が痛そうに部屋を後にした。

「黒騎士はセカンドシフトをついに完了、かあ」

空中投影のディスプレイに浮かび上がった動画やパラメータを眺めながら、その女性――篠ノ之 束は、無邪気に微笑む。

「んふふ」黒騎士と蓮君にはビックリさせられるなあ。銀の福音の最後、何がどうなっていたのかさっぱりだよ！れんくんが大怪我しちゃったのが想定外のことだったけど、福音を止めることは出来たから、結果オーライなのかな？」

ディスプレイから目を離し、空を見上げて、

「まだまだ世界には私でも分からない事が満ちている！ああ、これだからこの世界は素晴らしい！」

夜風にさらわれるように、忽然と、突然と、消えた。

翌朝。朝食を終えて、すぐにISの及び専用装備の撤収作業に当
たる。

そうこうして十時を過ぎたところでようやく作業は終了。担当の
クラスがバスに全員乗り込んだことを確認して自分も乗り込む。

「あー……。つかれたー」

そう声をのどの奥から絞り出して座席に身を埋める。
周りからは女子の話し声。少々姦しいがそれをねじ伏せて眠気が
来る。その眠気に身をゆだねようとしたとき。

「蓮浄っ！居る！？」

声と共に、車内に女性が駆け込んできた。
カジュアルスーツを着たその女性は。

「ナターシャ？どうしてここに」

「——お礼を、言いに来たの」

「え——？」

そんな物はいらぬ。そう言おうとしたその時。

唇に、柔らかい物が触れた。

「た、助けてくれてありがとう……」

呆然としてゐると、顔を茹で蛸のように真っ赤に染めたナターシヤが、身を翻して車外へと去っていった。

その後に、横で膨れ上がる――
修羅^{千冬}の殺気。

「れんじょう？」

「わあちよつと待つて何でいきなり日本刀を振りかぶつてゐるんだつて言うかどこから出したそんな物――？」

「うふふ。ええ、怒つてなんかありませんよ？蓮浄さん？」

「真耶まで――！？」

バスの車内では、ちよつとした修羅場が展開していた。

第35話 白蓮（後書き）

長かった！やっと終わったぜ！

次回からはかきだめてた番外編を少し投下してから夏休み編に入りたいと思っています。

感想、指摘等有りましたら一言でも良いので下さい。くれるともれなく瑠偉が喜びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5276q/>

IS ~ ein schwarzer ritter ~

2011年10月10日00時26分発行